

マニュアル

産業用パネル PC AP4-***A*シリーズ用

Linux ディストリビューション

『Algonomix4』 について

目次

はじめに

- 1) ……お願いと注意 …………… 1
- 2) ……保証について …………… 1

第1章 概要

- 1-1 Algomix4 とは …………… 1-1
- 1-2 Linux の仕組み …………… 1-2

第2章 システム構成

- 2-1 Algomix4 パッケージについて …………… 2-1
- 2-2 Algomix4 のディレクトリ構造 …………… 2-3
- 2-3 Algomix4 設定ツール「ASD Config」について …………… 2-7
 - 2-3-1 ASD Network Config について …………… 2-9
 - 2-3-2 ASD Application Config について …………… 2-12
 - 2-3-3 ASD Touch Panel Config について …………… 2-13
 - 2-3-4 ASD Date Config について …………… 2-17
 - 2-3-5 ASD Misc Setting について …………… 2-20
 - 2-3-6 ASD WatchdogTimer Config について …………… 2-23
 - 2-3-7 ASD Shutdown Menu について …………… 2-25
- 2-4 sysfs ファイルシステム …………… 2-26
 - 2-4-1 タッチパネルの設定 …………… 2-26
 - 2-4-2 基板情報 …………… 2-26
 - 2-4-3 温度センサ …………… 2-26
- 2-5 データの保護について …………… 2-27
 - 2-5-1 データ保護の必要性と方法 …………… 2-27
 - 2-5-2 ルートファイルシステムの保護について …………… 2-28

第3章 開発環境

3-1	クロス開発環境	3-1
3-2	開発環境インストール	3-2
3-2-1	開発環境のインストールに必要なもの	3-2
3-2-2	VirtualBox のダウンロード	3-3
3-2-3	VirtualBox のインストール	3-7
3-2-4	仮想マシンの作成	3-11
3-2-5	仮想マシンの起動	3-15
3-2-6	開発環境の各種設定について	3-17
3-2-7	Algonomix4 用開発環境のディレクトリ構成について	3-20
3-3	WideStudio/MWT によるアプリケーション開発	3-21
3-3-1	WideStudio の起動	3-21
3-3-2	プロジェクトの新規作成	3-21
3-3-3	アプリケーションウィンドウの作成	3-24
3-3-4	部品の配置	3-26
3-3-5	イベントプロシージャの設定	3-28
3-3-6	イベントプロシージャの編集	3-29
3-3-7	コンパイル	3-30
3-3-8	ファイルの転送	3-31
3-3-9	WideStudio/MWT の開発例	3-34
3-4	GDB によるデバッグ方法の詳細	3-37
3-5	VirtualBox を使用しない開発環境構築方法	3-42
3-5-1	Lubuntu 14.04.1 のインストール	3-42
3-5-2	開発環境用追加パッケージインストール	3-48
3-5-3	Algonomix4 用開発環境インストール	3-52
3-5-4	パッケージ更新の停止	3-53
3-6	パッケージについて	3-55

第4章 産業用パネル PC AP シリーズについて

4-1	汎用入出力	4-4
4-1-1	汎用入出力について	4-4
4-1-2	汎用入出力デバイスドライバについて	4-4
4-1-3	汎用入出力サンプルプログラム	4-5
4-2	シリアルポート	4-12

4-2-1	シリアルポートについて	4-12
4-2-2	シリアルポートデバイスドライバについて	4-13
4-2-3	シリアルポートサンプルプログラム	4-14
4-3	ネットワークポート	4-23
4-3-1	ネットワークポートについて	4-23
4-3-2	ネットワークソケット用システムコールについて	4-23
4-3-3	ネットワークサンプルプログラム	4-24
4-4	RAS 機能	4-34
4-4-1	汎用入力 IN0 リセットについて	4-34
4-4-2	汎用入力 IN0 リセットデバイスドライバについて	4-34
4-4-3	汎用入力 IN0 リセットサンプル	4-35
4-4-4	汎用入力 IN1 割込みについて	4-37
4-4-5	汎用入力 IN1 割込みデバイスドライバについて	4-37
4-4-6	汎用入力 IN1 割込みサンプル	4-38
4-4-7	バックアップ SRAM 機能について	4-41
4-4-8	バックアップ SRAM 機能デバイスドライバについて	4-41
4-4-9	バックアップ SRAM 制御サンプル	4-42
4-4-10	ハードウェア・ウォッチドッグタイマ機能について	4-48
4-4-11	ハードウェア・ウォッチドッグタイマデバイスについて	4-51
4-4-12	ハードウェア・ウォッチドッグタイマサンプル	4-53
4-5	タイマ割込み機能	4-60
4-5-1	タイマ割込み機能について	4-60
4-5-2	タイマ割込み機能デバイスについて	4-60
4-5-3	タイマ割込み機能サンプルプログラム	4-62
4-6	その他のサンプルプログラム	4-67
4-6-1	マルチランゲージ表示サンプルプログラム	4-67
4-6-2	テンキーボードサンプル	4-67
4-6-3	起動ランチャーサンプルプログラム	4-68
4-6-4	色選択サンプルプログラム	4-69
4-6-5	日本語入力キーボードサンプルプログラム	4-69
4-7	ストレージデバイスについて	4-72
4-7-1	外部ストレージデバイスの使用方法	4-72
4-7-2	ストレージデバイス名の割り振りについて	4-73

第5章 システムリカバリ

5-1	リカバリ DVD について	5-1
5-2	リカバリ DVD の起動・終了	5-2
5-2-1	リカバリ DVD 起動	5-2
5-2-2	リカバリ作業	5-5
5-2-3	リカバリ後処理	5-6
5-3	システムの復旧（工場出荷状態）	5-7
5-4	システムのバックアップ	5-10
5-5	システムの復旧（バックアップデータ）	5-14

付録

A-1	参考文献	5-1
-----	------	-----

はじめに

この度は、アルゴシステム製品をお買い上げいただきありがとうございます。

弊社製品を安全かつ正しく使用していただく為に、お使いになる前に本書をお読みいただき、十分に理解していただくようお願い申し上げます。

1) お願いと注意

本書では、産業用パネル PC AP-***A*シリーズ（以降 **AP シリーズ**）用 Linux ディストリビューション（以降 **Algonomix4**）に特化した部分について説明します。一般的な Linux についての詳細は省略させていただきます。Linux に関する資料および文献は、現在インターネット上や書籍など多数ございます。これらの書籍等と併せて本書をお読みください。

2) 保証について

Algonomix4 の動作は出荷パッケージのバージョンでのみ動作確認しております。Algonomix4 はお客様でソースの改変、ライブラリの追加と変更、プログラム設定の変更等を行うことができますが、これらの変更を行われた場合は動作保証することができません。

第 1 章 概要

本章では、Algonomix4 の具体的な内容を説明する前に、Algonomix4 の概要について説明します。

1-1 Algonomix4 とは

「Linux」とは、Linux カーネルのみを指す言葉です。しかし、Linux カーネルのみでは、オペレーティングシステム（以下 OS）としての役割を果たすことができません。OS として使うには、Linux カーネルのほかに、以下のような各種ソフトウェアパッケージと併せて使用する必要があります。

- シェル (bash、ash、csh、tcsh、zsh、pdksh、……)
- util-linux (init、getty、login、reset、fdisk、……)
- procps (ps、pstree、top、……)
- GNU coreutils (ls、cat、mkdir、rmdir、cut、chmod、……)
- GNU grep、find、diff
- GNU libc
- 各種基本ライブラリ (ncurses、GDBM、zlib……)
- X Window System

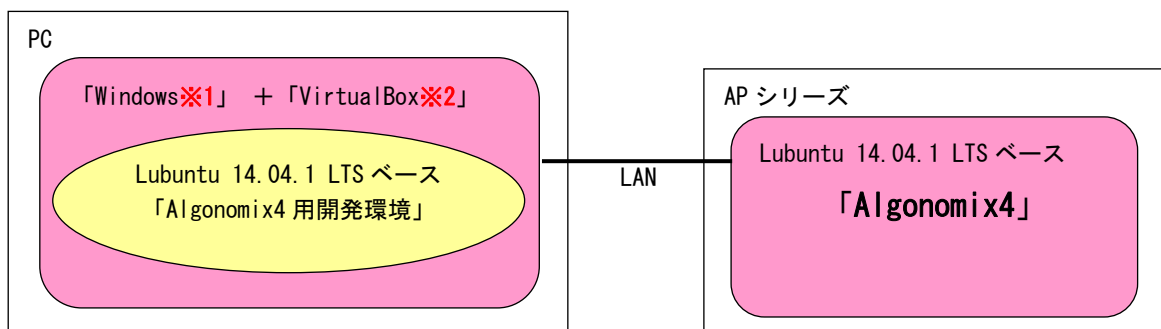
Linux カーネルといくつかの必要なソフトウェアパッケージをまとめて、OS として使えるようにしたものを Linux ディストリビューションといいます。

最初に述べましたとおり、「Linux」という言葉は、本来カーネルを指す言葉です。そのため、「カーネルとしての Linux」と「OS としての Linux」を厳密には区別する必要がありますが、本書では「Linux」とは「OS としての Linux」を指す言葉として使用します。

Algonomix4 は、「Lubuntu 14.04.1 LTS」という Linux ディストリビューションをベースにした、AP シリーズ用の Linux ディストリビューションです。Algonomix4 は、「Lubuntu 14.04.1 LTS」に AP シリーズ用の独自の I/O ドライバを組込んだものです。

パソコン上に Algonomix4 用の開発環境をインストールすることで、Algonomix4 用のソフトウェアを開発することができます。

Algonomix4 用開発環境イメージを図 1-1-1 に示します。



※注 1: Windows は米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標です。

※注 2: VirtualBox は、米国 Oracle Corporation, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

図 1-1-1. Algonomix4 の開発環境

開発環境の詳細については、『第 3 章 開発環境』を参照してください。

1-2 Linux の仕組み

Linux のソフトウェア構成を図 1-2-1 に示します。

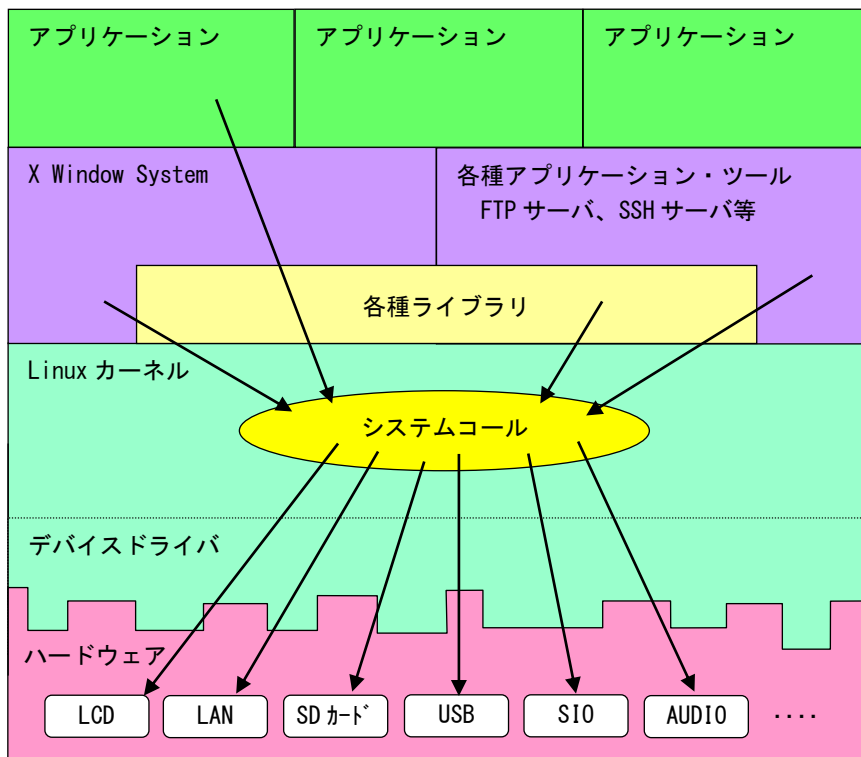


図 1-2-1. Linux ソフトウェア構成図

OS として重要な役割の一つに、ハードウェアアクセスの複雑さを隠し、統一されたプログラミングインターフェース（システムコールや API と呼ばれる）をアプリケーションに提供するというものがあります。Linux ではハードウェアを制御する為にドライバに関連付けられた「デバイスファイル」を読み書きすることで制御します。これは UNIX 系 OS の大きな特徴であり、ファイルを扱う感覚でハードウェアを制御することができます。Linux の代表的なシステムコールとして、open、close、read、write 等があります。これらのシステムコールは特別な呼び方をしてはいるわけではなく、関数の呼び出しと同じように呼び出すことができます。

もう一つ OS の重要な役割として、CPU 時間、メモリ、ネットワーク等のリソースをプログラムやプロセス、スレッドに分配するというものもあります。これは Linux カーネルが処理しており、アプリケーション作成時に特に意識する必要はありません。図 1-2-1 にあるような X Window System や、SSH サーバや FTP サーバもプロセスの一つです。CPU 時間やメモリなどのリソースには限りがある為、複数のプロセスを同時に実行すると、それぞれのパフォーマンスは落ちます。そのため、必要最低限のプロセスで実行効率のよいプログラムを作成する必要があります。

第 2 章 システム構成

2-1 Algonomix4 パッケージについて

Algonomix4 であらかじめインストールされているパッケージを表 2-1-1 に示します。ただし Lubuntu14.04.1 の基本パッケージとしてインストールされているパッケージは除きます。

表 2-1-1. プリインストールパッケージ一覧

パッケージ名	内容	バージョン
Linux Kernel	Linux Kernel 本体	3.13.11.4-1-i686
ssh	telnet よりセキュリティの高いシェルクライアントおよびサーバ	1:6.6p1-2ubuntu2
gdbserver	GNU デバッガ	7.7-1-0ubuntu5~14.04.2
vsftpd	セキュリティの高い FTP サーバ	3.0.2-1ubuntu2.14.04.1
lm-sensors	センサ監視ツール、ドライバ	1:3.3.4-2ubuntu1
aptitude	APT 用パッケージ管理ツール	0.6.8.2-1ubuntu4
apache2	Web サーバ	2.4.7-1ubuntu4.1
libjpeg62:i386	JPEG ランタイムライブラリ	6b1-4ubuntu1
chromium-browser	オープンソースのウェブブラウザ	39.0.2171.65-0ubuntu0.14.04.1.1064
pulseaudio	PulseAudio サウンドサーバ	1:4.0ubuntu11
ttf-kochi-gothic	True Type ゴシックフォント	20030809-15
ttf-kochi-mincho	True Type 明朝フォント	20030809-15

Algonomix4 および Algonomix4 開発環境では、Lubuntu14.04.1 の基本パッケージと本書に表記したパッケージが入った環境でのみ動作を確認しています。そのため、パッケージの追加に制限をかけています。詳細に関しては、「第 3 章 3-6 パッケージについて」を参照してください。

Algonomix4 でインストール済みのパッケージ一覧を表示する為には下記手順を実行します。

- ① デスクトップ左下のアイコン(以後[メニューアイコン]と表記)からメニューを呼び出す→[アクセサリ]→[LXTerminal]を選択し、図 2-1-1 のようなコンソール画面を表示します。



図 2-1-1. コンソール画面

- ② 下記のコマンドを実行することで、現在インストールされているすべてのパッケージの名前が一覧で表示されます。

```
$ dpkg -l
```

または

```
$ dpkg --list
```

一覧の表示内容は次のような形式で表示されています。

```
+++-----
ii adduser      3.113+nmu3ubuntu3 all add and remove users and groups
```

①: パッケージのインストール状況

1文字目: 要望 : (U)不明/(I)インストール/(R)削除/(P)完全削除/(H)維持

2文字目: 状態 : (N)無/(I)インストール済/(C)設定/(U)展開/(F)設定失敗

(H)半インストール/(W)トリガ待ち/(T)トリガ保留

3文字目: エラー : (空欄)無/(H)維持/(R)要再インストール/X=両方(状態, エラーの大文字=異常)

②: パッケージ名

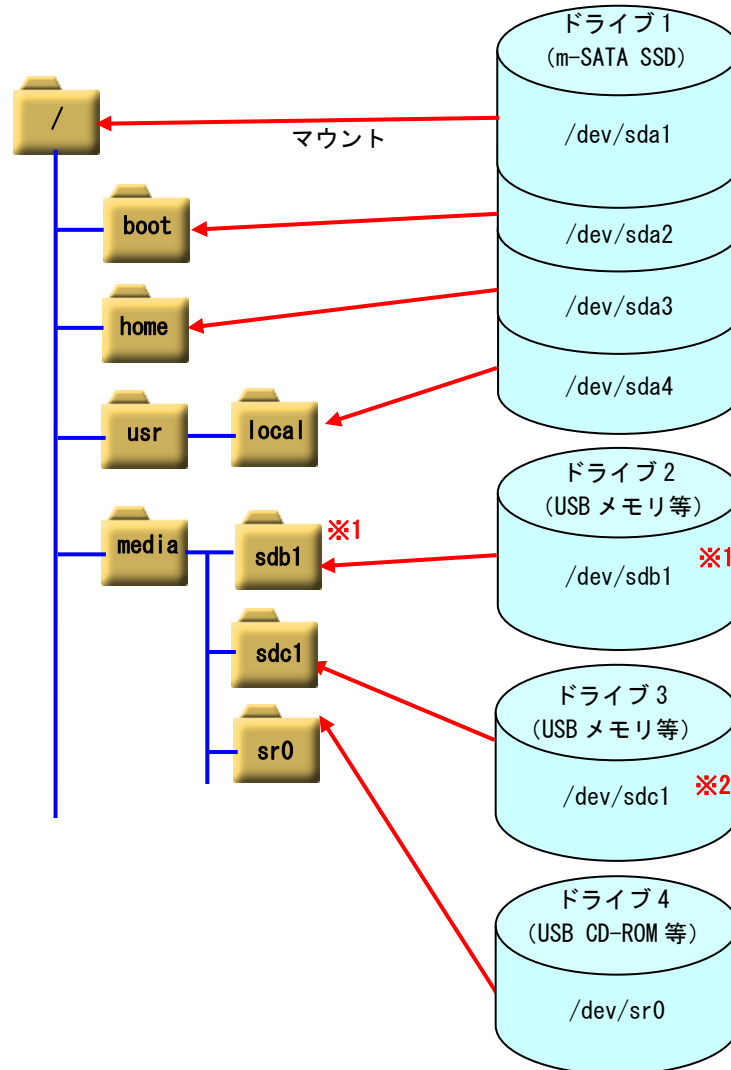
③: パッケージのバージョンおよびリビジョン

④: パッケージが対応しているアーキテクチャ

⑤: パッケージの1行説明

2-2 Algonomix4 のディレクトリ構造

Linux ではルートファイルシステムと呼ばれるツリー構造のファイルシステムを採用しています。ルートディレクトリ (/) 以下に、HDD 上に構築されたファイルシステムをマウントすることで、ルートファイルシステムとして利用できるようにしています。Algonomix4 は Lubuntu ベースとなっている為、Lubuntu のディレクトリ構造に従っています。



※注 1 : ストレージ機器をマウントするたびに sdb1、sdc1、sdd1 というようにマウントポジションが追加されていきます。

※注 2 : USB 機器は、認識順により sdb と sdc が入れ替わる可能性があります。

図 2-2-1. Lubuntu のツリー構造

AP シリーズでは、m-SATA SSD 16GByte にルートファイルシステムが構築されています。表 2-2-1 のようにパーティションが切られ、それぞれのディレクトリにマウントされています。

このパーティション構成は、m-SATA SSD を ReadOnly 化する際、保護する領域と保護しない領域を分けるために必要となります。詳細は『2-5 データの保護について』を参照してください。

AP シリーズのルートファイルシステム構成をリスト 2-2-1 に、ディレクトリ内容を表 2-2-2 に示します。

表 2-2-1. AP シリーズの初期パーティション構成 (16GByte)

ドライブ名	サイズ	使用容量	空き容量	使用%	マウントポジション
/dev/sda1	88MByte	50MByte	32MByte	61%	/boot
/dev/sda2	7.2GByte	2.3GByte	4.6GByte	33%	/
/dev/sda3	3.7GByte	8.2MByte	3.5GByte	1%	/home
/dev/sda4	3.7GByte	18MByte	3.4GByte	1%	/usr/local

リスト 2-2-1. ルートファイルシステムのディレクトリ構成

```

/
+--bin
+--boot
+--cdrom
+--dev
+--etc
+--initrd.img
+--home--+--asdusr
+--lib
+--lost+found
+--media
+--mnt
+--opt
+--proc
+--root
+--run
+--sbin
+--srv
+--sys
+--tmp
+--usr--+--bin
    +--games
    +--include
    +--lib
    +--local
    +--sbin
    +--share
    +--src
+--var
+--vmlinuz

```

表 2-2-2. ルートファイルシステムのディレクトリ内容

ディレクトリ名	内容
/	ルートディレクトリ ※注：m-SATA SSD を Read Only として使用する場合でも、この領域は読み書きすることができませんが、RAM ディスク上に書かれるため、電源を落とすと変更内容は消去されます。
/bin	システム管理者・一般ユーザ共に使用するコマンド群が格納されています。
/boot	起動時に必要とする設定ファイル群とマップインストーラが配置されています。 ※注：m-SATA SSD を Read Only として使用する場合でも、この領域は読み書きすることができません。
/dev	ハードウェアをコントロールする為のデバイスファイルが格納されています。基本的なデバイスの一覧を以下に示します。 <ul style="list-style-type: none"> ・ターミナル：/dev/tty* 例：tty0、tty1 キーボードとプリンタにより構成され、文字を入出力できます。 ・シリアルポート：/dev/ttyS* 例：ttyS0、ttyS1、ttyS2 シリアル通信することができます。 ・フレームバッファ：/dev/fb* 例：fb0 LCD に表示されるグラフィックイメージを保持する領域です。 ・SCSI ディスク：/dev/sd* 例：sdb1、sdb2、sdc USB メモリ等はこのデバイスになります。sd の後ろにつく文字がディスクを特定し、数字がパーティションを表しています。 ※注：/dev/sda*は m-SATA SSD のデバイスファイルとなりますので、新たに追加した USB メモリ等は sdb 以降になります。
/etc	設定ファイルが格納されています。 ※注：m-SATA SSD を Read Only として使用する場合でも、この領域は読み書きすることができませんが、RAM ディスク上に書かれるため、電源を落とすと変更内容は消去されます。
/home	システムに登録された通常ユーザの個人用ディレクトリが入っています。Algonomix4 では、「asdusr」というユーザが登録されています。ftp や ssh ではこのユーザに対してアクセスします。 <p style="text-align: center;">ユーザ名 : asdusr パスワード : asdusr</p> ※注：m-SATA SSD を Read Only として使用する場合でも、この領域は読み書きすることができません。
/lib	システム起動時や、/bin や /sbin のコマンドを実行する時に使用される共有ライブラリが格納されています。
/media	CD-ROM やフロッピーディスクなどの外付けメディア用のディレクトリです。
/mnt	一時的なファイルシステム用ディレクトリです。
/opt	オプションのソフトパッケージコピー、インストールファイルが格納されているディレクトリです。
/proc	バーチャルファイルシステム用の特別なディレクトリです。
/root	システムの管理者権限を持ったユーザのホームディレクトリです。
/run	実行プロセス関連データが格納されています。
/sbin	管理用バイナリファイル用のディレクトリです。例えば、reboot、shutdown、ifconfig、lsmod などが格納されています。
/srv	HTTP、FTP などのサービス用のデータが格納されています。
/sys	デバイスの情報が格納されているディレクトリです。
/tmp	一時ファイルを格納するディレクトリです。起動時に内容が消去されます。
/usr/bin	一般的なコマンドが格納されています。
/usr/include	C 言語で使用する組込みファイルが格納されています。

/usr/lib	一般的なライブラリファイルが格納されています。
/usr/local	ユーザで作成されたプログラムを格納する領域です。 ※注：m-SATA SSD を Read Only として使用する場合でも、この領域は読み書きすることができます。
/usr/sbin	システム関連のコマンドが格納されています。
/usr/share	デフォルト設定ファイル、イメージ、ドキュメント等の共有ファイルが格納されています。
/usr/src	ソースコードが格納されます。
/var	頻繁に変更されるデータが格納されています。
/var/cache	アプリケーションのキャッシュデータが格納されています。
/var/lib	アプリケーションの状態や APT の dpkg が管理されているパッケージ情報が格納されています。
/var/log	システムやアプリケーションのログが格納されています。

2-3 Algonmix4 設定ツール「ASD Config」について

本項では、AP シリーズ用の各種設定ツール「ASD Config」について説明します。

ASD Config Menu を起動する方法は以下の3通りの方法があります。

1. 出荷時状態で起動したとき、自動的に起動されます。
2. GRUB 起動画面で、AsdConfigMenu モードを選択します。(『2-5-2 ルートファイルシステムの保護について』を参照してください。)
3. コンソールを起動させ、下記のコマンドを実行します。

```
$ sudo AsdConfigMenu
```

ASD Config Menu が起動すると、図 2-3-1 のような画面が現れます。この画面から、各種設定ツールを起動します。

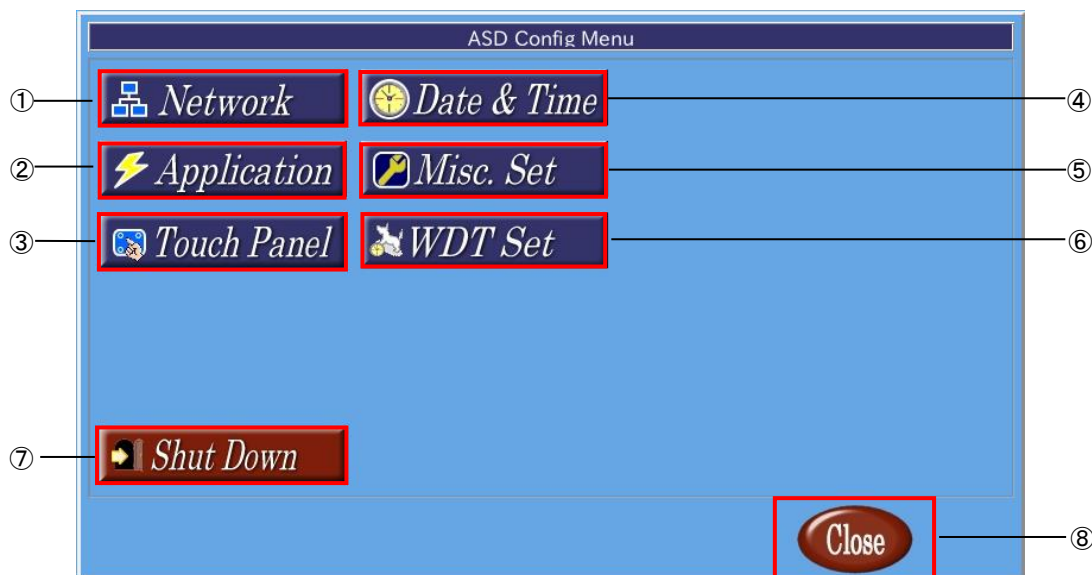


図 2-3-1. ASD Config Menu

ASD Config Menu から起動できる各ツールについて説明します。

- ① ASD Network Config
ASD Network Config は、有線 LAN の設定を行うためのツールです。
詳細は『2-3-1 ASD Network Config について』で説明します。
- ② ASD Application Config
ASD Application Config は、ユーザアプリケーションのアップデートを行うためのツールです。
詳細は『2-3-2 ASD Application Config について』で説明します。
- ③ ASD Touch Panel Config
ASD Touch Config は、タッチパネルのキャリブレーションを行うためのツールです。
詳細は『2-3-3 ASD ASD Touch Panel Config について』で説明します。
- ④ ASD Date Config
ASD Date Config は、時計を設定するためのツールです。
詳細は『2-3-4 ASD Date Config について』で説明します。
- ⑤ ASD Misc Setting
ASD Misc Setting は、画面の輝度調節や、ブザー、シリアルポートの設定を行うためのツールです。
また、AP シリーズの製品情報を確認することもできます。

詳細は『2-3-5 ASD Misc Setting について』で説明します。

⑥ ASD WatchdogTimer Config

ASD WatchdogTimer Config は、ハードウェア・ウォッチドッグタイマの設定を行うためのツールです。

詳細は『2-3-6 ASD WatchdogTimer Config について』で説明します。

⑦ 電源オプション

シャットダウン、再起動を行います。

詳細は『2-3-7 ASD Shutdown Menu について』を参照してください。

⑧ ASD Config Menu の終了

ASD Config Menu を終了します。

2-3-1 ASD Network Config について

AP シリーズは、有線 LAN ポートを搭載しています。有線 LAN ポートの出荷時段階での設定を、表 2-3-1-1 に示します。

表 2-3-1-1. 有線 LAN の出荷時段階での設定

ネットワークポート	ポート名	速度
有線 LAN1	eth0	1000 【Mbps】
有線 LAN2	eth1	1000 【Mbps】
有線 LAN3	eth2	1000 【Mbps】

有線 LAN ポートは、出荷時状態では、IP アドレス、サブネットマスクが設定されていません。そのため、有線 LAN を使用するには、これらの値を設定する必要があります。

ASD Network Config は、有線 LAN の設定を行うためのツールです。

ASD Network Config を起動するには、メニュー画面から [Network] を選択します。

● IP アドレスの設定

ASD Network Config の [IP Setting] タブを選択することで、有線 LAN の IP アドレスを設定できます。

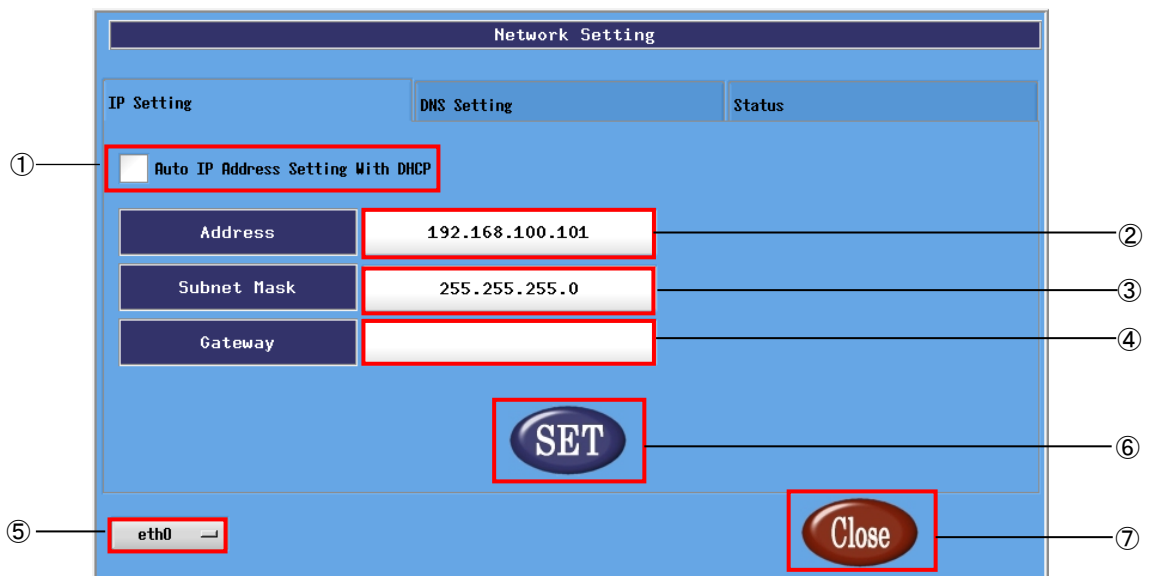


図 2-3-1-1. IP アドレスの設定

- ① DHCP による自動 IP アドレス割当て
チェックボックスにチェックを入れることで DHCP により自動的に IP アドレスが割当てられます。手動で IP アドレスを設定する場合は、チェックを外します。
- ② IP アドレスの設定
IP アドレスを手動で設定します。
IP アドレスを DHCP により自動的に割当てる場合には、この項目は選択できません。
- ③ サブネットマスクの設定
サブネットマスクを設定します。
IP アドレスを DHCP により自動的に割当てる場合には、この項目は選択できません。
- ④ ゲートウェイの設定
ゲートウェイを設定します。
IP アドレスを DHCP により自動的に割当てる場合には、この項目は選択できません。
- ⑤ 設定する LAN ポートの変更
設定する有線 LAN ポートを変更します。

押下することで、認識している有線 LAN ポートのデバイス名一覧が表示されますので、設定したい LAN ポートを選択します。

- ⑥ 設定の反映
[SET] ボタンを押下することで設定が反映されます。
- ⑦ 終了
ASD Network Config を終了します。
[SET] ボタンを押下せずに終了した場合、変更は破棄されます。

● DNS の設定

ASD Network Config の [DNS Setting] タブを選択することで、DNS サーバを設定できます。

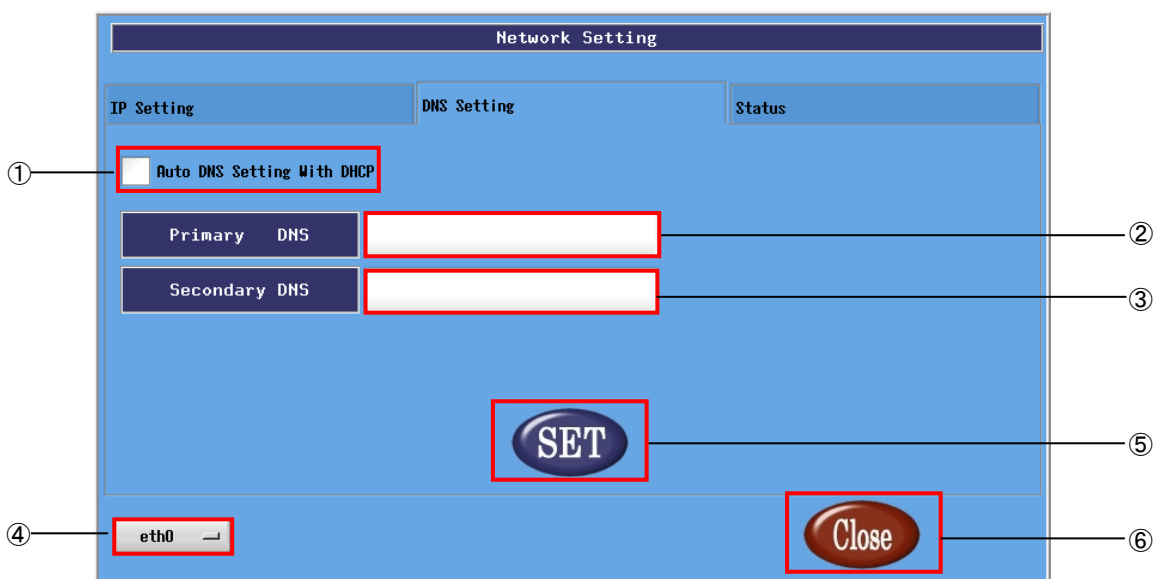


図 2-3-1-2. DNS の設定

- ① DHCP による DNS 自動割当て
チェックボックスにチェックを入れることで DHCP サーバにより DNS が自動的に割当てられます。DNS サーバを手動で設定する場合にはチェックを外します。
- ② プライマリ DNS サーバの設定
プライマリ DNS サーバを設定します。
DNS を DHCP により自動的に割当てるときにはこの項目は選択できません。
- ③ セカンダリ DNS サーバの設定
セカンダリ DNS サーバを設定します。
DNS を DHCP により自動的に割当てるときにはこの項目は選択できません。
- ④ LAN ポートの選択
設定する LAN ポートを変更します。
押下することで、認識している LAN ポートのデバイス名一覧が表示されますので、設定したい LAN ポートを選択します。
- ⑤ 設定の反映
[SET] ボタンを押下することで設定が反映されます。
- ⑥ 終了
[Close] ボタンを押下することで ASD Network Config を終了します。
[SET] ボタンを押下せずに終了した場合、変更は破棄されます。

●状態の表示

ASD Network Config の [Status] タブを選択することで、LAN ポートの状態を表示します。また、ネットワークの有効・無効を切替えることができます。

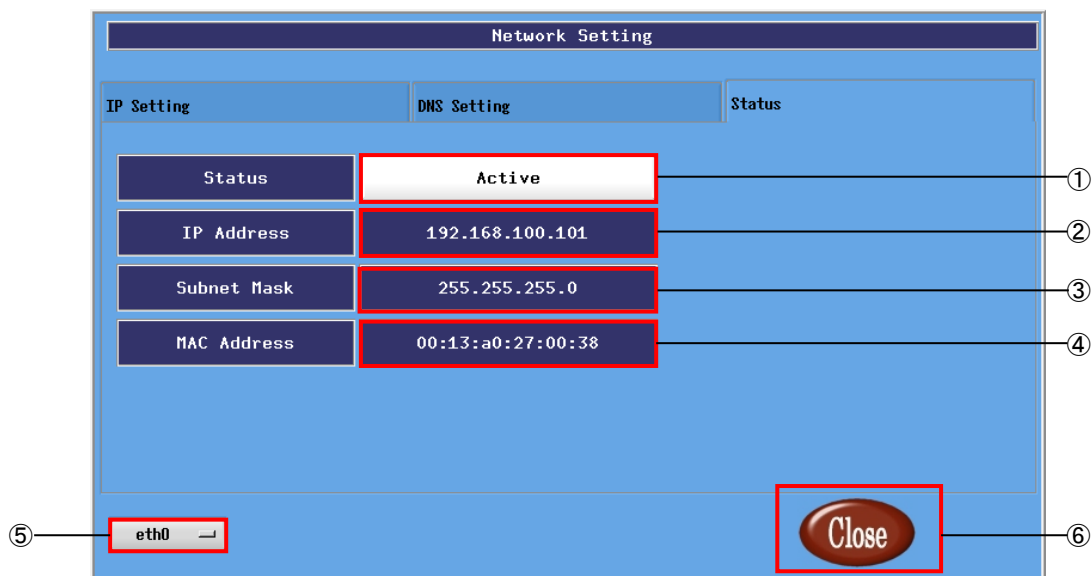


図 2-3-1-3. ネットワーク状態

- ① 状態の選択
ネットワークの有効・無効を表示します。[Active]なら有効、[Inactive]なら無効です。また、この項目を押下することで有効・無効を切替えることができます。
- ② IP アドレス
IP アドレスを表示します。
- ③ サブネットマスク
サブネットマスクを表示します。
- ④ MAC アドレス
LAN ポートの MAC アドレスを表示します。
- ⑤ LAN ポートの選択
状態を表示する LAN ポートを変更します。押下することで認識されている LAN ポートが表示されますので、設定を行う LAN ポートを選択してください。
- ⑥ 終了
ASD Network Config を終了します。

2-3-2 ASD Application Config について

ASD Application Config は、USB メモリを用いたアップデートを行うためのツールです。
ASD Application Config を起動するには、メニュー画面から [Application] を選択します。

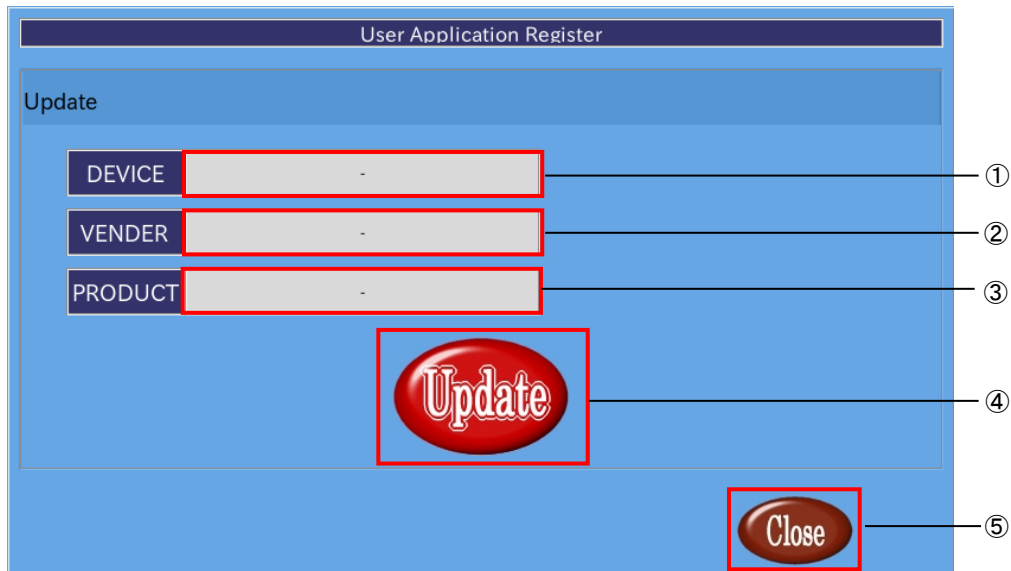


図 2-3-2-1. アップデート画面

- ① デバイス名の表示
USB メモリが認識されている場合、[usb-storage]と表示されます。
USB メモリが認識されていない場合、[-]が表示されます。
- ② ベンダ名の表示
USB メモリが認識されている場合、USB メモリの製造元が表示されます。
USB メモリが認識されていない場合、[-]が表示されます。
- ③ プロダクト名の表示
USB メモリが認識されている場合、USB メモリの種類が表示されます。
USB メモリが認識されていない場合、[-]が表示されます。
- ④ アップデート
[Update]ボタンを押下することで、USB メモリ内にある「download.sh」が実行されます。
「download.sh」はシェルスクリプトである必要があります。
- ⑤ 終了
[Close]ボタンを押下することで、ASD Application Config を終了します。

2-3-3 ASD Touch Panel Configについて

ASD Touch Panel Config はタッチパネルの設定やキャリブレーションを行うためのツールです。
ASD Touch Panel Config を起動するには、メニュー画面から [Touch Panel] を選択します。

● ASD Touch Panel Config 各種設定画面

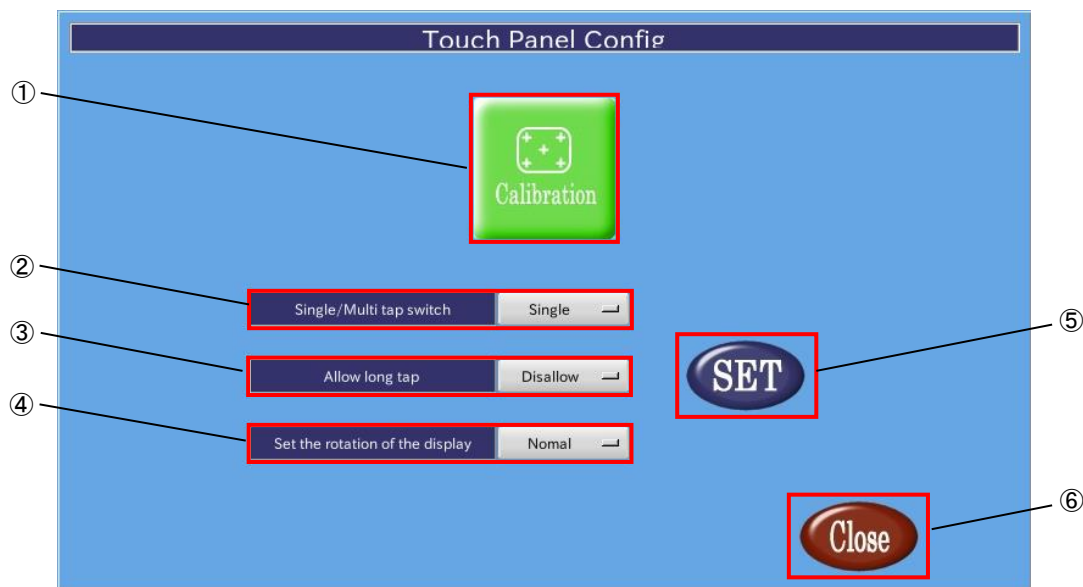


図 2-3-3-1. ASD Touch Panel Config 各種設定画面

- ① キャリブレーションソフト起動
タッチパネルキャリブレーションソフトを起動します。
キャリブレーション時、ディスプレイの向きが強制的に Normal に切り替わります。
- ② シングル/マルチタップ切り替え
シングルタップモード、マルチタップモードを切り替えます。設定内容を表 2-3-3-1 に示します。
- ③ ロングタップ許可
ロングタップの禁止、許可を切り替えます。設定内容を表 2-3-3-2 に示します。
禁止にすると、ロングタップした時強制的に手を放す判定が発生します。
- ④ ディスプレイとタッチパネルの回転
ディスプレイとタッチパネルの回転方向を設定します。設定内容を表 2-3-3-3 に示します。
- ⑤ 設定反映
②③④で行った設定を反映し、保存します。
- ⑥ 終了
タッチパネルの設定を終了します。

表 2-3-3-1. シングル/マルチタップ設定

名称	内容
Multi	指2本までのマルチタッチを認識します。
Single	シングルタッチのみ認識します。

表 2-3-3-2. ロングタップ許可設定

名称	内容
Allow	ロングタップを許可します。
Disallow	ロングタップを禁止します。

表 2-3-3-3. ディスプレイの向きの設定

名称	内容
Normal	デフォルトの画面の向きです。
Left	反時計回りに90°回転します。
Inverted	180°回転します。
Right	時計回りに90°回転します。

●タッチパネルのキャリブレーション

図 2-3-3-1 の①[Calibration]を押すことで図 2-3-3-2 のような画面になります。
ここでは、タッチパネルのキャリブレーションが可能です。

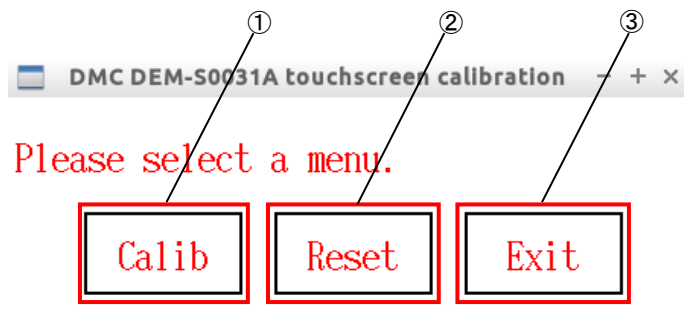


図 2-3-3-2. キャリブレーションメニュー画面

- ① キャリブレーション開始
タッチパネルキャリブレーションを開始します。
- ② ソフトウェアリセット
タッチパネルコントローラのキャリブレーション値に基準値をセットします。
- ③ キャリブレーション終了
タッチパネルキャリブレーションを終了します。

●キャリブレーション開始

図 2-3-3-2 の①を選択し、タッチパネルキャリブレーションが起動されると図 2-3-3-3 のような画面になります。ここで、十字の中心を順に押下することでタッチパネルがキャリブレーションされます。

Time left ゲージはタッチをせずにいると減っていきます。Time left ゲージがなくなるとキャリブレーションはキャンセルされます。

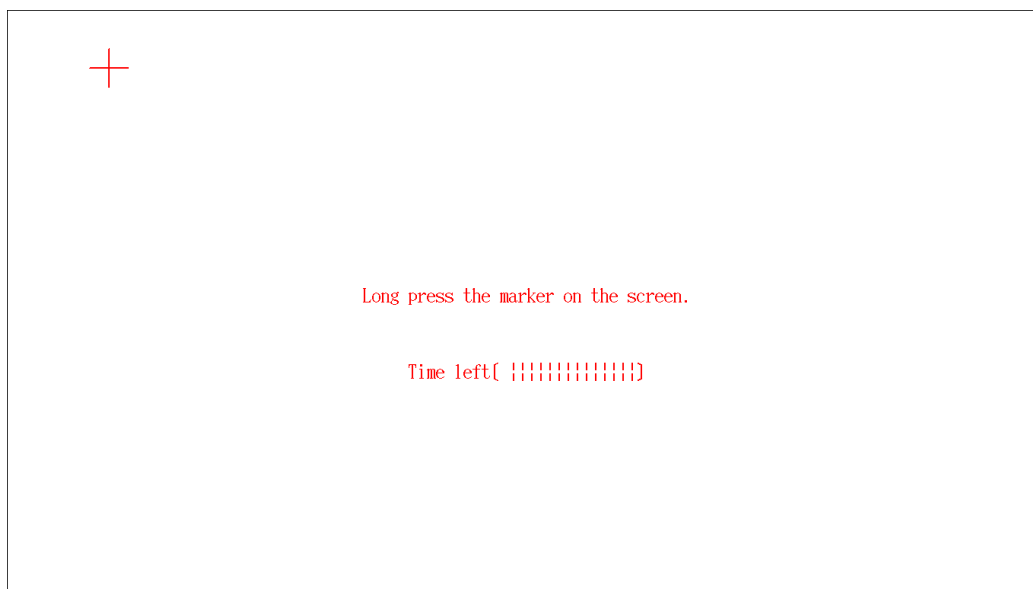


図 2-3-3-3. キャリブレーション画面

全てのポイントをタッチし終わると図 2-3-3-4 のような画面が表示されます。

画面をタッチするとタッチした点を中心に赤い丸が描画され、キャリブレーションに成功しているか確認することができます。キャリブレーションに成功していたら [OK] ボタンを選択してください。

もしキャリブレーションに失敗した場合、[Cancel] を選択することでキャリブレーション開始前の状態に戻すことができます。

Time left ゲージはタッチをせずにいると減っていきます。Time left ゲージがなくなるとキャンセルボタンを押したときと同じくキャリブレーション開始前の状態に戻ります。キャリブレーションに失敗し、[Cancel] をタッチするのも困難な場合は、マウスを使って [Cancel] を押すか、Time left ゲージがなくなるまでタッチせずにお待ちください。



図 2-3-3-4. キャリブレーション結果画面

2-3-4 ASD Date Config について

ASD Date Config は時計を設定するためのツールです。NTP サーバを設定し、自動的に時計を調整することもできます。

ASD Date Config を起動するには、メニュー画面から [Date & Time] を選択します。

●時計の手動設定

ASD Date Config の [Date & Time] タブを選択することで、手動で時計を設定できます。

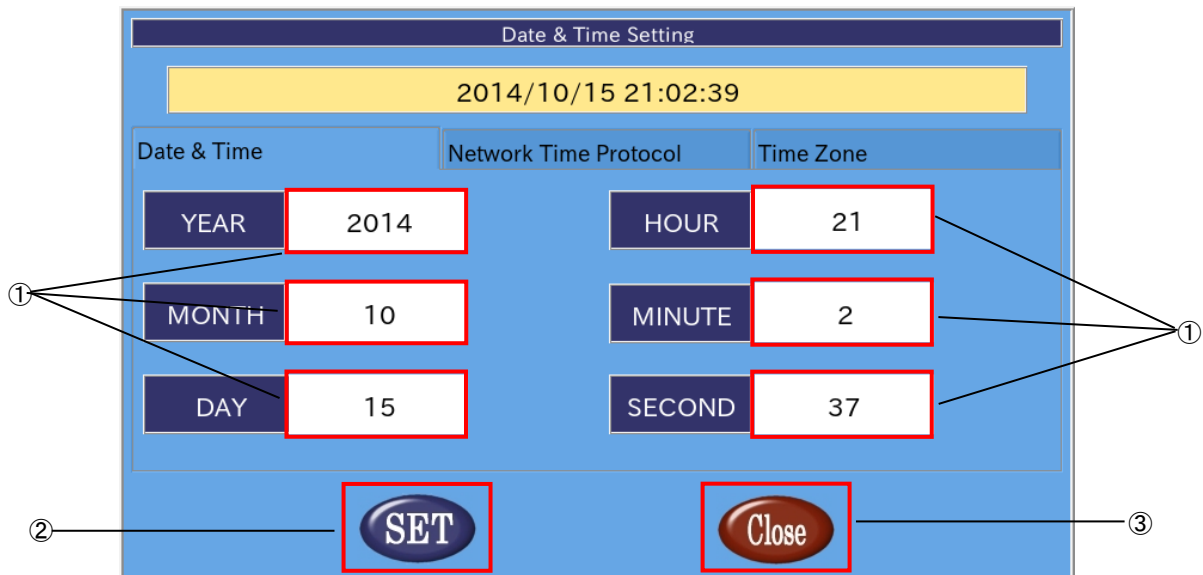


図 2-3-4-1. 時計の設定

- ① 日付、時刻を設定
白い部分を押下することで、入力画面があらわれ、日付、時間を設定できます。
年、月、日、時、分、秒単位で指定できます。
ntp を有効にした場合、これらの項目は変更できません。
- ② 設定の反映
[SET] ボタンを押下することで設定を反映します。
- ③ 終了
[Close] ボタンを押下することで ASD Date Config を終了します。
[SET] ボタンを押下せずに、[Close] ボタンを押下した場合、設定は破棄されます。

●NTP サーバの設定

NTP は、時計を自動的に調整するためのプロトコルです。ネットワークに接続した状態で、NTP を用いると AP シリーズの時計が NTP サーバの時計に同期されます。

ASD Date Config の [Network Time Protocol] タブを選択することで、NTP サーバを設定できます。

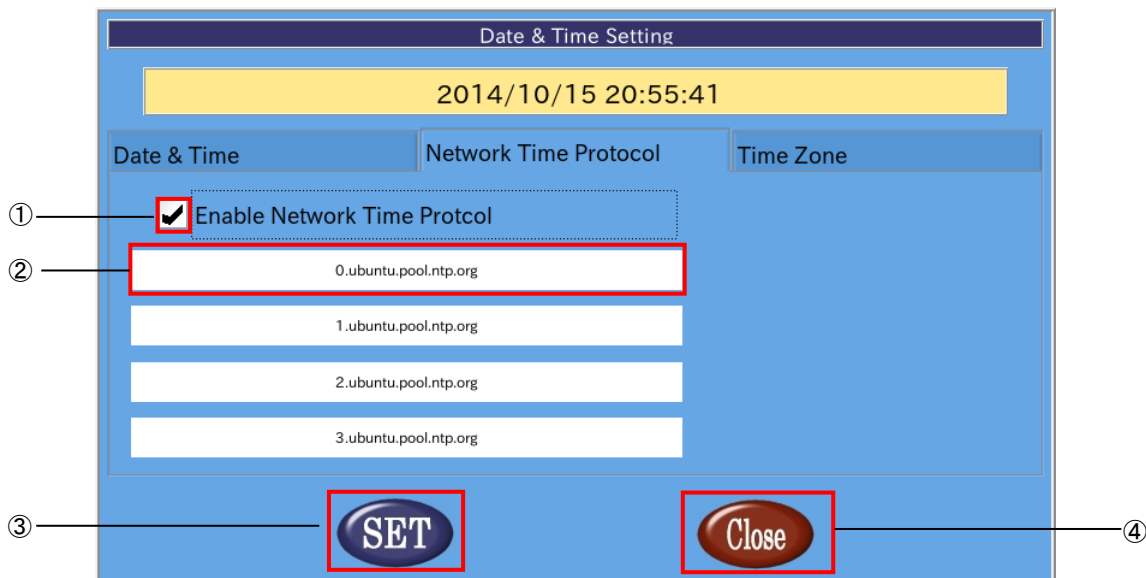


図 2-3-4-2. NTP サーバの設定

- ① NTP の有効、無効の切替え
 チェックボックスにチェックを入れることで NTP を有効にします。
 チェックを外すと NTP は無効になります。
- ② ntp サーバの設定
 現在設定されている NTP サーバを表示します。
 NTP を有効にした場合、この項目を押下することで入力画面が表示され、NTP サーバを設定できます。
 NTP サーバは最大 4 個まで設定できます。
- ③ 設定の反映
 [SET] ボタンを押下することで設定を反映します。
- ④ 終了
 [Close] ボタンを押下することで ASD Date Config を終了します。
 [SET] ボタンを押下せずに、[Close] ボタンを押下した場合、設定は破棄されます。

※注： AP シリーズの時計と NTP サーバの時計が大きすぎて、NTP デーモンが終了することがあります。その際は、一旦 NTP を無効にし、手動で時刻を設定後、再起動してください。

●タイムゾーンの設定

ASD Date Config の[Time Zone]タブを選択することで、タイムゾーンを設定できます。

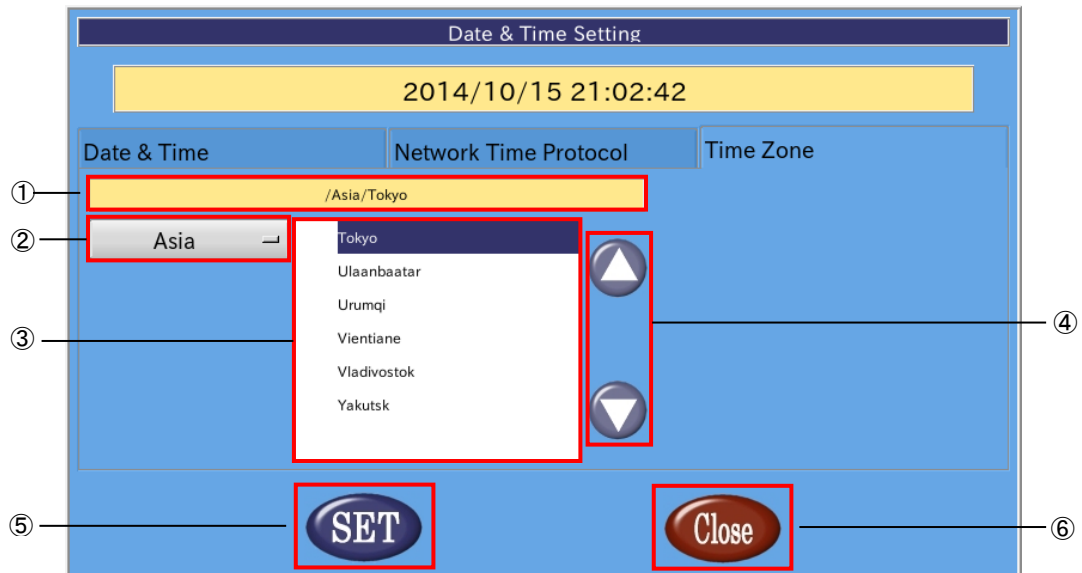


図 2-3-4-3. タイムゾーンの設定

- ① タイムゾーンの表示
現在設定されているタイムゾーンを表示します。
- ② 地域を選択
設定するタイムゾーンの地域を選択します。タイムゾーンの都市を東京に設定する場合は「Asia」を選択します。
- ③ 都市を選択
設定するタイムゾーンの都市を選択します。タイムゾーンの都市を東京に設定する場合は「Tokyo」を選択します。
- ④ タイムゾーンの都市リストの変更
都市のリストをスクロールします。
- ⑤ 設定の反映
[SET]ボタンを押下することで設定を反映します。
- ⑥ 終了
[Close]ボタンを押下することで ASD Date Config を終了します。
[SET]ボタンを押下せずに、[Close]ボタンを押下した場合、変更は破棄されます。

2-3-5 ASD Misc Setting について

ASD Misc Setting はバックライト、ブザー、シリアルポートの設定や、製品情報の読み出しを行うためのツールです。

ASD Misc Setting を起動するには、メニュー画面から [Misc. Set] を選択します。

●バックライトの調節と、タッチパネルのブザーの設定

ASD Misc Setting の [Backlight & Buzzer Setting] タブを選択することで、図 2-3-5-1 の画面になります。

ここでは、バックライトの調節とブザーの設定を行うことができます。

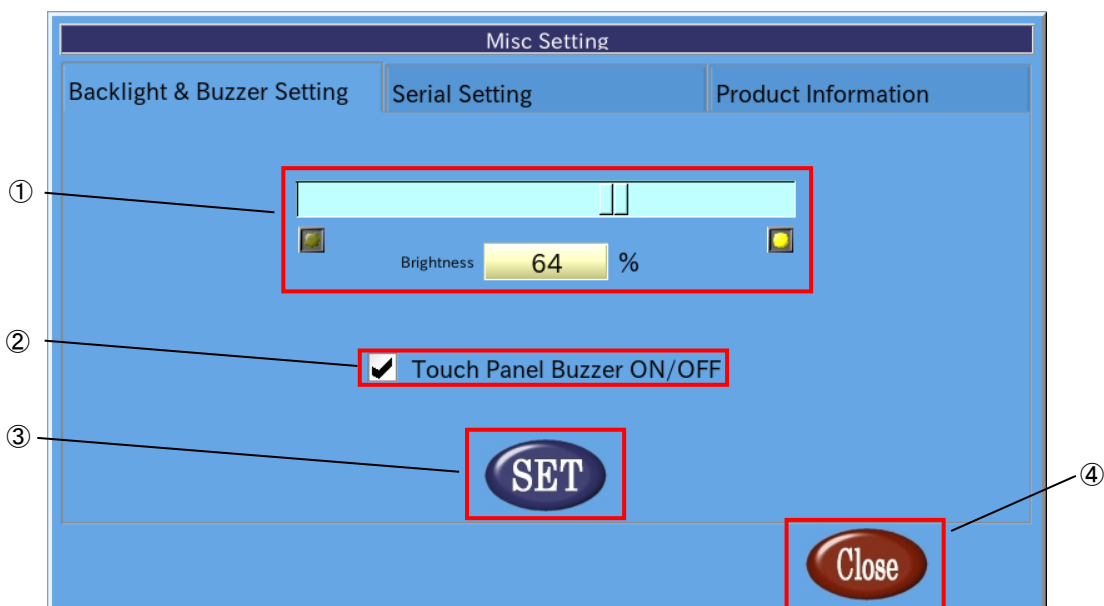



図 2-3-5-1. バックライトとブザーの設定

① バックライトの明るさの調整

スクロールバー上の  をドラッグすることで、バックライトの光量を調節できます。

② タッチパネルブザーの ON/OFF 設定

チェックボックスをチェックすることでタッチパネルをタッチする時にブザーを鳴らすことができます。チェックが外れていればタッチパネルをタッチしてもブザーは鳴りません。

③ 設定の保存

「SET」ボタンを押下することで、現在の設定を保存します。

④ 終了

「Close」ボタンを押下することで ASD Misc Setting を終了します。

「SET」ボタンを押下せずに「Close」ボタンを押下した場合、設定は破棄されます。

●シリアルポート設定

AP シリーズには汎用的なシリアルポートデバイスが用意されています。汎用のシリアルポートデバイスは、「RS232C」、「RS422」、「RS485」の 3 タイプを切替えることができます。

シリアルポートデバイスの詳細については『4-2 シリアルポート』を参照してください。

ASD Misc Setting の[Serial Setting]タブを選択することで、シリアルポートの種類を切替えることができます。

※注：SIO ポート設定スイッチでも選択したタイプに設定する必要があります。

※注：AP シリーズでは ttyS1、ttyS2 のみ使用可能です。

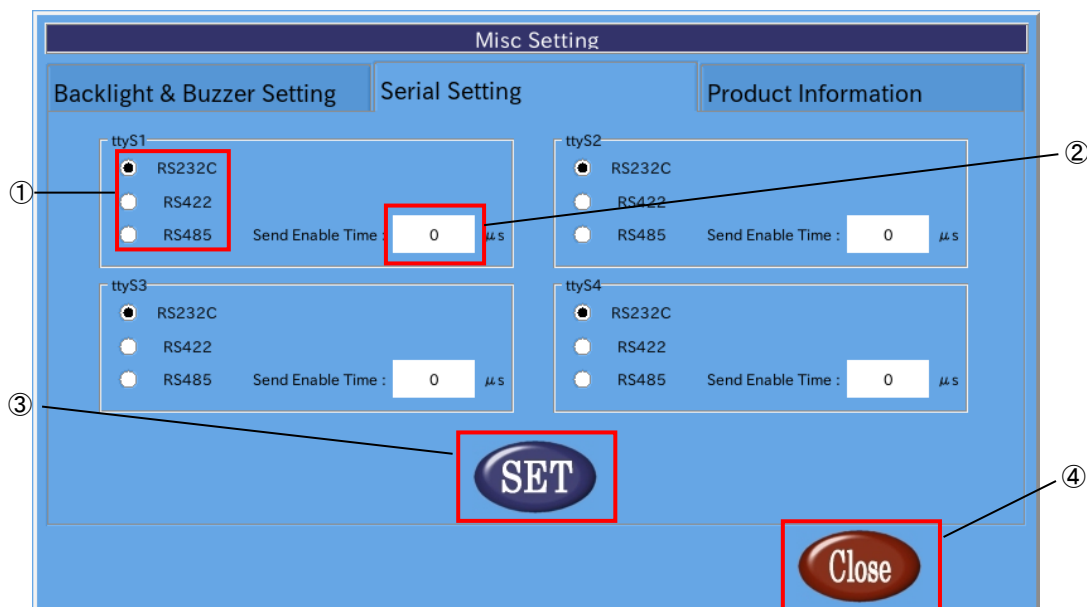


図 2-3-5-2. シリアルポートの設定

- ① シリアルポートのタイプを設定
チャンネル毎にシリアルポートのタイプを選択します。
- ② 送信イネーブル時間を設定（RS485 のみ有効）
RS485 の場合、送信と受信が共通線なため、送信開始から送信イネーブルを OFF するまでの時間を設定します。数値入力部分を押し下し、数値を【μ sec】単位で指定してください。
- ③ 設定の反映および保存
[SET] ボタンを押し下することで設定を反映します。
- ④ 終了
[Close] ボタンを押し下することで ASD Misc Setting を終了します。
[SET] ボタンを押し下せずに [Close] ボタンを押し下した場合、設定は破棄されます。

●製品情報読み出し

ASD Misc Setting の [Product Information] タブを選択することで、基板情報や FPGA バージョン、Linux カーネルビルドバージョンの情報を読み出すことができます。

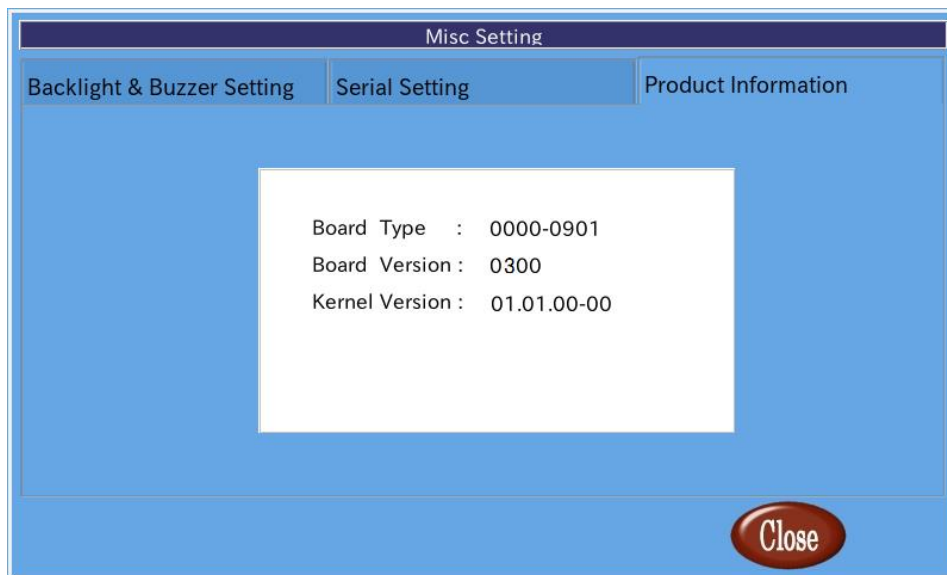


図 2-3-5-3. 製品情報

表 2-3-5-1. 製品情報

項目名	内容
Board Type	基板型番
Board Version	FPGA のバージョン
Kernel Version	Linux カーネルのビルドバージョン
Backup Battery is low	バックアップバッテリーの残量が低い時のみ表示

2-3-6 ASD WatchdogTimer Configについて

ASD WatchdogTimer Config は、ハードウェア・ウォッチドッグタイマの設定の取得、変更を行うためのツールです。

ASD WatchdogTimer Config を起動するには、メニュー画面から[WDT Set]を選択します。

●ハードウェア・ウォッチドッグタイマの設定

ASD WatchdogTimer Config の[Hardware Watchdog Timer]タブを選択することで、ハードウェア・ウォッチドッグタイマを設定できます。

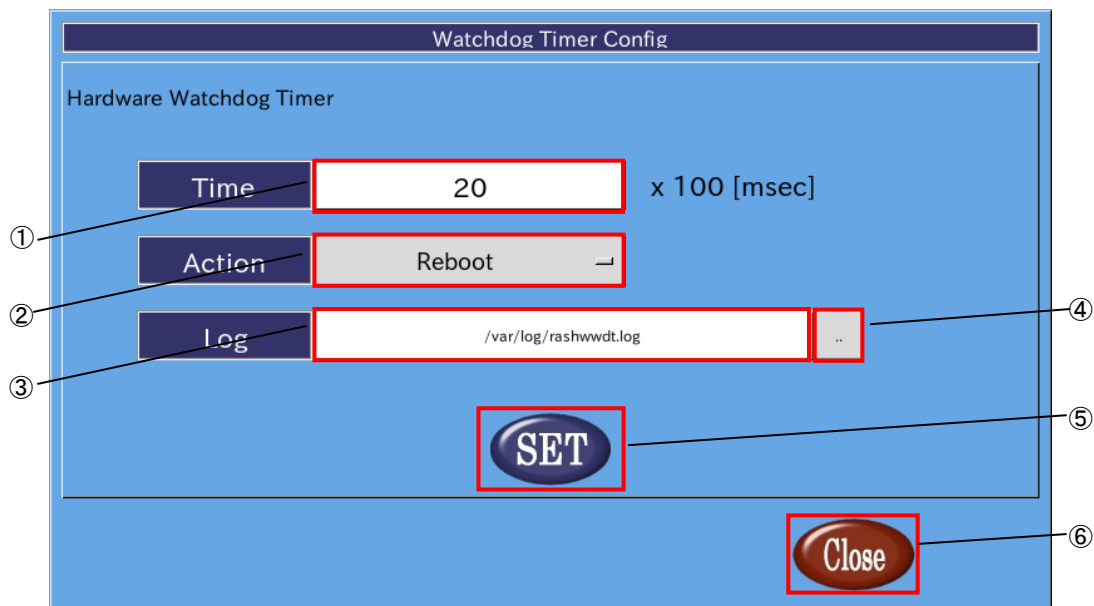


図 2-3-6-1. ハードウェア・ウォッチドッグタイマの設定

① タイマ時間の設定

ハードウェア・ウォッチドッグタイマがタイムアウトするまでのタイマ時間を設定します。有効設定値は 1~65535、タイマ時間は設定値×100【msec】になります。デフォルト値は 20 です。

② 動作の設定

ハードウェア・ウォッチドッグタイマがタイムアウトした際の動作を設定します。選択できる動作を表 2-3-6-1 に示します。デフォルトでは Reboot が選択されます。

表 2-3-6-1. ハードウェア・ウォッチドッグタイマのタイムアウト時の動作

名称	動作
Shutdown	shutdown コマンドを実行します。
Reboot	reboot コマンドを実行します。
Popup	ポップアップメッセージを表示します。
Event	ユーザアプリケーションにイベント発生を通知します。
PowerOff	強制的に電源を切ります。
Reset	強制的に再起動します。

※注：PowerOff および Reset は、ハードウェア的に電源をオフするため、システムがハンガアップしても動作しますが、データが破損する可能性があります。

- ③ ログファイルパスの設定
ハードウェア・ウォッチドッグタイマが起動時、タイムアウト時に出力するログファイルのパスを指定します。デフォルトでは、`/var/log/rashwwdt.log` にログを出力します。
- ④ ファイル選択
ファイル選択ダイアログを表示します。
- ⑤ 設定の反映
[SET] ボタンを押下することで、設定を反映します。
- ⑥ 終了
[Close] ボタンを押下することで、ASD WatchdogTimer Config を終了します。
[SET] ボタンを押下せずに [Close] ボタンを押下した場合、設定は破棄されます。

2-3-7 ASD Shutdown Menu について

ASD Shutdown Menu によって、AP シリーズの再起動、シャットダウンを行うことができます。また、起動時のメニューを変更することもできます。ASD Shutdown Menu を起動するには、メニュー画面から [Shut Down] を選択します。

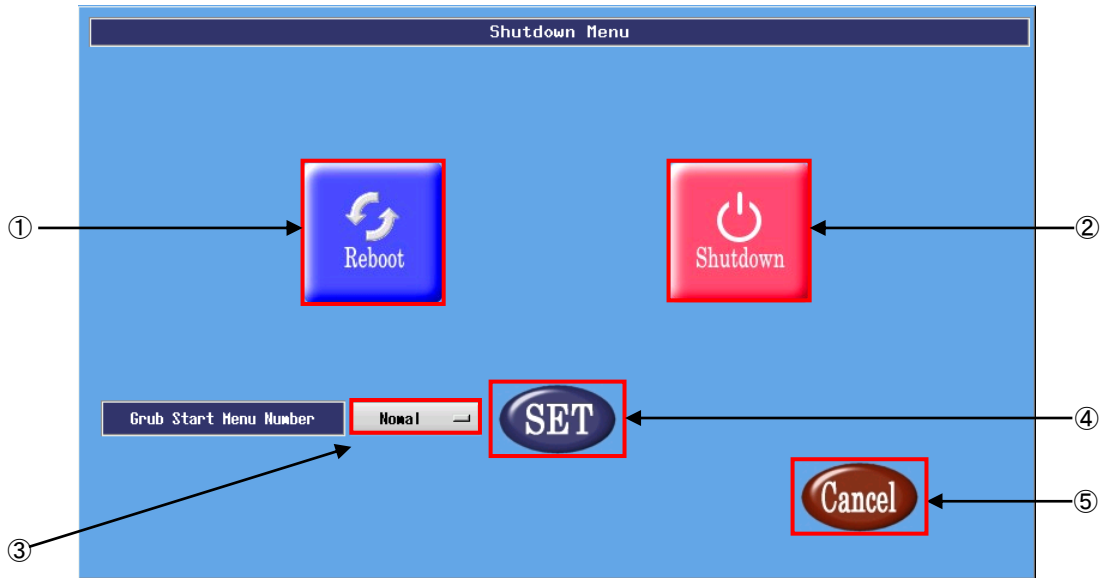


図 2-3-7-1. ASD Shutdown Menu

- ① 再起動
[Reboot] ボタンを押下することで、AP シリーズが再起動します。
- ② シャットダウン
[Shutdown] ボタンを押下することで、AP シリーズがシャットダウンします。
- ③ Grub Menu の選択
[Grub Start Menu Number] の項目を選択することで、起動モードを変更できます。選択できるモードを表 2-3-7-1 に示します。各項目の詳細については、『2-5-2 ルートファイルシステムの保護について』を参照してください。

表 2-3-7-1. 起動モード

項目名	内容
Normal	通常モードです。 全てのディレクトリを読書きできます。
AsdConfigMenu	起動時に ASD Config Menu が起動する場合は、Normal と同じです。
ReadOnly	/boot、/home、/usr/local 以外のディレクトリを書き込み不可で起動します。

- ④ 設定の反映
[SET] ボタンを押下することで、Grub Start Menu Number で選択した起動モードを反映します。[SET] ボタンを押下しないと設定が反映されないのご注意ください。
- ⑤ 終了
ASD Shutdown Menu を終了して ASD Config Menu に戻ります。

2-4 sysfs ファイルシステム

Linux2.6 カーネルから導入された sysfs ファイルシステムは、proc、devfs、devpty のファイルシステムの統合だと言えます。sysfs ファイルシステムは、システムに接続されているデバイスとバスを、ユーザースペースからアクセスできるファイルシステム内に階層的に列記します。

sysfs ファイルシステムは /sys/ でマウントされ、いくつか異なる方法でシステムに接続されたデバイスを構成する複数のディレクトリを含んでいます。

AP シリーズの固有デバイスとして以下のデバイス制御が可能です。

2-4-1 タッチパネルの設定

タッチパネルの設定を確認・変更することができます。

表 2-4-1-1. sysfs のタッチパネルオプションを変更する項目

sysfs ファイル名	データ	内容
/sys/kernel/dmc_ts/singletouch_sw	0 or 1	1 を Write することでシングルタッチモードになります。初期値は 0 です。また、Read することで現在の状態を確認することができます。
/sys/kernel/dmc_ts/longtap_sw	0 or 1	1 を Write することでロングタップが無効になります。初期値は 0 です。また、Read することで現在の設定を確認することができます。
/sys/kernel/dmc_ts/longtap_fuzz	0 ~ 30	データを Write することでロングタップと判定する範囲を設定することができます。データが大きいくほどロングタップと判定されやすくなります。また、Read することで現在の設定を読み出すことができます。

2-4-2 基板情報

基板情報を管理します。

表 2-4-2-1. sysfs の基板情報を制御する項目

sysfs ファイル名	データ	内容
/sys/devices/platform/mainboard/boardversion	0XXX	Read することで FPGA バージョンが読み出せます。
/sys/devices/platform/mainboard/buildversion	XXXXXXXX	Read することでカーネルのビルドバージョンが読み出せます。
/sys/devices/platform/mainboard/machcode	0000XXXX	Read することでマシンコードが読み出せます。
/sys/devices/platform/mainboard/battery	X	Read することでバックアップバッテリーの状態が読み出せます。残量が少ないと 1 を返します。
/sys/devices/platform/mainboard/dipswitch	X0XXX00000000	Read することで PCI デバイス側のマシンコードが読み出せます。

2-4-3 温度センサ

基板上の温度センサの情報を取得します。

表 2-4-3-1. sysfs の基板上温度センサの情報を取得する項目

sysfs ファイル名	データ	内容
/sys/bus/i2c/devices/8-004c/temp1_input	XX000	Read することで基板上の温度センサチップ内部の温度を読み取ります。
/sys/bus/i2c/devices/8-004c/temp2_input	XXXXX	Read することで基板上の温度センサチップ外の温度を読み取ります。

2-5 データの保護について

2-5-1 データ保護の必要性と方法

Linux ではハードディスクや CF カード、SD カード、USB メモリ等のストレージ上にファイルを Write する際、一端書き込みデータをキャッシュ領域に保存して、Write 処理を完了し、OS のアイドル時間に実際のストレージへ書き込むことで CPU リソースの有効活用を行っています。

このため、キャッシュ領域にデータがあり、実際のストレージ上に書込まれる前に電源を落としたりした場合、そのファイルまたは書き込み途中のセクタが破損する可能性があります。これを防ぐ為に、sync というコマンドがあります。このコマンドを実行することで、キャッシュ内にたまっているデータを実際のストレージ上にすべて書き出すことができます。ストレージにファイルを書込んだ際は電源を落とす前に sync コマンドを実行してください。

また、SD カードや USB メモリ等の抜き差しが可能なデバイスの取扱いには注意が必要となります。使用中にデバイスが抜かれた場合などは、デバイス内のファイルが破損してしまう場合があります。

また、デバイスにファイルを書込んだ場合は、sync コマンドなどを使用して書込んだ内容が確実にデバイスに書込まれるようにしてください。また、デバイスを抜く際には、必ずデバイスをアンマウントしてから抜くようにしてください。

- sync コマンドの使用

Linux でファイル操作を行った場合、ファイルデータがファイルキャッシュとしてシステムメモリに保存され、実際の SD カードなどのデバイスには反映されていないことがあります。デバイスのファイル操作後、変更されたデータがデバイスに確実に反映されるようにするには、sync コマンドを使用してキャッシュとデバイスのデータの同期をとるようにしてください。

デバイスにファイルコピー後、sync コマンドで同期

```
# cp /home/asdusr/FILE.dat /media/asdusr/デバイス名
# sync
```

- USB メモリの書き込み不可/可能の切り替え

USB メモリを書込み不可状態でマウントし、書き込み可否の切り替えを行います。書き込み不可状態では、ファイルの書き込みを行えませんがファイルの読み出しは行うことができます。

USB メモリを書込み不可でマウントします。

```
# mount -o ro /dev/sdb1 /mnt
```

書き込み不可でマウントされている USB メモリを書込み可能にします。

```
# mount -o remount, rw /mnt
```

書き込み可能でマウントされている USB メモリを書込み不可にします。

```
# mount -o remount, ro /mnt
```

2-5-2 ルートファイルシステムの保護について

AP シリーズでは、ルートファイルシステムは 16GByte の m-SATA SSD 上に構築されています。パーティション構成については、『2-2 Algonomix4 のディレクトリ構成』の表 2-2-1 を参照してください。

2 番目のパーティションにマウントされている「/boot」には、AP シリーズを起動するときに最初に実行される GRUB と呼ばれるブートローダが格納されています。

このブートローダで Linux の起動方法を選択することができます。ブートローダの起動メニュー画面を図 2-5-2-1 に示します。キーボード入力が無い場合、3 秒後に選択されているモードで自動起動します。

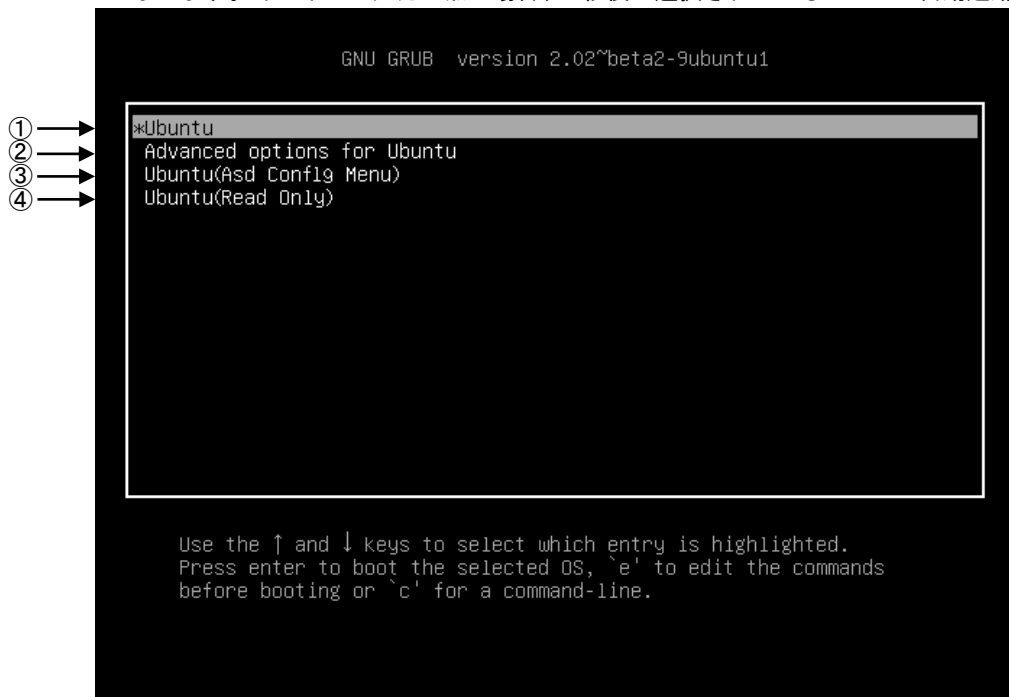


図 2-5-2-1. GRUB 起動メニュー画面

- ① 通常モード
すべてのディレクトリを読み書きできるモードで起動します。(出荷時設定)
アプリケーションのインストールや、/etc の設定ファイルの変更等を行うときはこのモードで起動してください。
- ② オプション
リカバリーモードが選択できます。通常モードまたは ReadOnly モードで正常に起動しなくなったときに、復旧用として用意しています。
- ③ AsdConfigMenu モード
起動時に「/home/asdusr/autostart.sh」に記述されたプログラムのかわりに、ASD Config Menu が立ち上がるほかは、通常モードと同様です。
- ④ ReadOnly モード
「/boot」と「/home」と「/usr/local」以外のディレクトリをすべて ReadOnly として起動します。「/home/asdusr/autostart.sh」に記述されたプログラムが自動的に起動します。

④の ReadOnly モードとして起動した後、「/bin」や「/lib」といったディレクトリに書き込みを行うと、書き込みができませんというエラーメッセージが表示されます。通常モードで再起動しない限り、重要なシステム領域は破壊されることはありません。

「/etc」以下の設定ファイルについては、一見、変更できているように見えます。しかし、実際には RAM ディスク上に「/etc」がマウントされており、m-SATA SSD 内の「/etc」には変更が反映されていません。そのため、電源を落とすと ReadOnly モード時に行った設定はすべて元の設定値に戻ります。これは、「/etc」以下が完全に書き込みができないようになっていると、アプリケーション起動時にエラーとなる場合があるためです。

アプリケーションが完成し、通常運用とする場合には、ReadOnly モードで起動されることをおすすめします。

第 3 章 開発環境

本章では、Algonomix4 の開発環境について説明します。

3-1 クロス開発環境

プログラムを開発する場合に必要なのが、ソースコードを記述するエディタ、ソースコードをコンパイルするコンパイラ、コンパイルされたプログラムを実行する為の実行環境です。

例えば、Microsoft 社の Windows 上で動作するアプリケーションを開発する場合、エディタでソースを書き、Visual Studio 等のコンパイラでコンパイルを行い、作成された exe ファイルを実行します。これで作成したアプリケーションが Windows 上で実行されます。

Linux の場合でも同じです。Linux マシン上で動作するエディタでソースを書き、gcc でコンパイル後に生成された実行ファイルを実行します。

両者とも、コンパイルと実行を同じパソコン環境上で行うことができます。このような開発方式をセルフ開発といいます。

AP シリーズでは、クロス開発方式を採用しています。クロス開発とは、コンパイル環境と実行する環境が異なる方式です。ソースコードの記述やコンパイルはパソコン上でを行い、LAN 等で実行ファイルをターゲットに送って実行することになります。(図 3-1-1 参照)。

AP シリーズはターゲットマシンとして開発された商品である為、セルフコンパイル環境は用意していません。

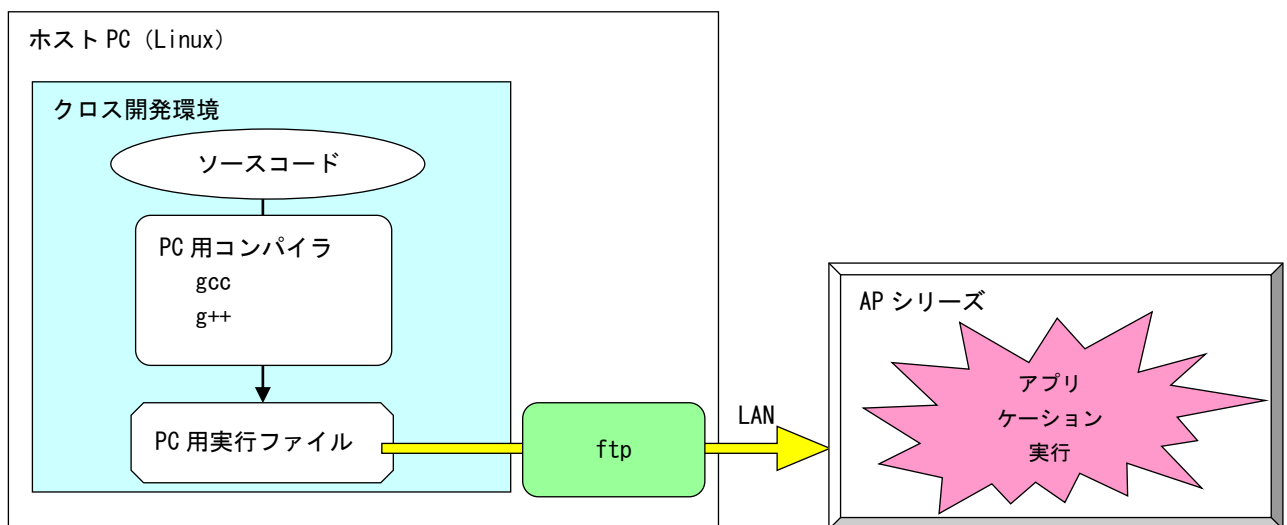


図 3-1-1. クロス開発方式イメージ図

このような開発環境を構築するには、表 3-1-1 に示すような開発環境ツールが必要となります。

表 3-1-1. クロス開発に必要なツール

ツール名	説明
GCC	GNU C コンパイラ
binutils	リンカ、アセンブラ等のソフトウェア開発ツール
GDB	デバッガ
glibc	GNU C ライブラリ

Algonomix4 開発環境は、Ubuntu14.04.1 に表 3-1-1 のような開発ツールをあらかじめ組込んだものです。

VirtualBox という仮想マシン上で Algonomix4 開発環境を起動すれば、AP シリーズ用のアプリケーションを開発することが可能です。

3-2 開発環境インストール

AP シリーズ用アプリケーション開発環境である **Algonomix4 用開発環境**を Oracle Corporation 製の VirtualBox 4.3.14 を用いて、Windows パソコン上で構築する手順について説明します。

3-2-1 開発環境のインストールに必要なもの

開発環境のインストールに必要なものは下記の 3 点です。

1. Algonomix4 用開発環境 DVD-ROM

AP シリーズ用アプリケーション開発環境一式です。

DVD-ROM の内容を表 3-2-1-1 に示します。

※注：通常、開発環境 DVD-ROM は AP シリーズご購入時には添付しておりません。営業までお問い合わせいただきますと、無償で配布いたします。

表 3-2-1-1. Algonomix4 用開発環境 DVD-ROM の構成

DVD-ROM のディレクトリ	内容
doc	Algonomix4 の取扱い説明書が格納されています。 ・ AP Series Algonomix4 Software Manual.pdf 本書のことです。
development	VirtualBox を使用せずに直接、パソコン上に開発環境を構築する場合の Algonomix4 用パッケージが格納されています。 ・ Algonomix4-tools-0010.tar.gz
VirtualBox	VirtualBox 用の OS イメージファイルが格納されています。 ・ Algonomix4_development.exe インストール方法は『3-2-4 仮想マシンの作成』を参照してください。

2. VirtualBox Ver4.3.14

本書で使用しているものは VirtualBox ver4.3.14 です。VirtualBox のバージョンによっては、本書の画面表示と異なる可能性があります。VirtualBox は Oracle Corporation 社の製品です。VirtualBox の使用にあたっては Oracle Corporation 社の使用許諾条件に従ってご使用ください。

3. 開発環境インストール用 Windows PC

Windows7 が動作しており、VirtualBox がインストール可能なパソコンが必要です。VirtualBox のインストールおよび Algonomix4 開発環境 OS イメージを動作させる為に、最低限必要な環境として表 3-2-1-2 の PC スペックが必要になります。

表 3-2-1-2. 必須 PC スペック

CPU	X86 または X64 (1GHz 以上を推奨) Intel, AMD
メモリ	256MByte 以上 (2GByte 以上推奨) ※注: VirtualBox はメモリ領域が 256MByte 未満の場合、正常に動作しない場合があります。その為、必須環境を満たしているパソコンでも、ホスト OS 上で他のソフトウェアを同時に起動している場合、メモリ不足により VirtualBox が正常に動作しない事があります。その場合は他のソフトウェアを一度停止させメモリ領域を開放した上で、もう一度 VirtualBox を起動してください。
HDD 空き領域	10GByte 以上 (20GByte 以上推奨) ※注: Algonomix4 開発環境では、ゲスト OS のイメージファイルは最大容量 20GByte の可変長の OS イメージとなっています。初期状態では OS イメージファイルは 8GByte ほどの大きさですが、開発をしていくにつれこのサイズは大きくなる為、ゲスト OS の空き領域を超えてしまう場合、正常に動作しなくなる場合があります。その場合はホスト OS の空き領域を増やすか、ゲスト OS 内の不要なファイルを消去し、空き領域を確保してください。
OS	Windows 7
ファイルシステム	NTFS ※注: ファイルシステムが FAT32 の環境では単独でファイルサイズが 4GByte を超えるファイルは使用できません。Algonomix4 開発環境のゲスト OS のイメージファイルは 8GByte を超えてしまう為、FAT32 上の環境では Algonomix4 開発環境は使用できません。
その他	DVD-ROM ドライブ (インストールディスク読み用)、 USB ポート、LAN ポート (AP シリーズとパソコンの接続に最低でもいずれかひとつが必要になります)

Algonomix4 開発環境をインストールするパソコンで動作している OS (Windows 7) と VirtualBox 上で動作する OS (Lubuntu 14.04.1) を区別する為、パソコン側の OS を「ホスト OS」、VirtualBox 上の OS を「ゲスト OS」と表記しています。

3-2-2 VirtualBox のダウンロード

VirtualBox のインストーラは <http://www.virtualbox.org/> よりダウンロードします。

- ① VirtualBox 公式ページの左メニューから [Downloads] を選択します。



- ② 図 3-2-2-2 の使用するホスト OS の環境を選択する画面に変わります。
[VirtualBox older builds] を選択します。
なお、この画面は VirtualBox のバージョンアップに伴い、変化する可能性があります。



図 3-2-2-2. VirtualBox ダウンロードページ

- ③ 最新版が 4.3.14 でない場合、Virtual Box 4.3 をクリックしてください。Virtual Box 4.3 系のリストが並んでいますので、『VirtualBox 4.3.14 for Windows hosts x86/AMD64』という項目をクリックしてください。

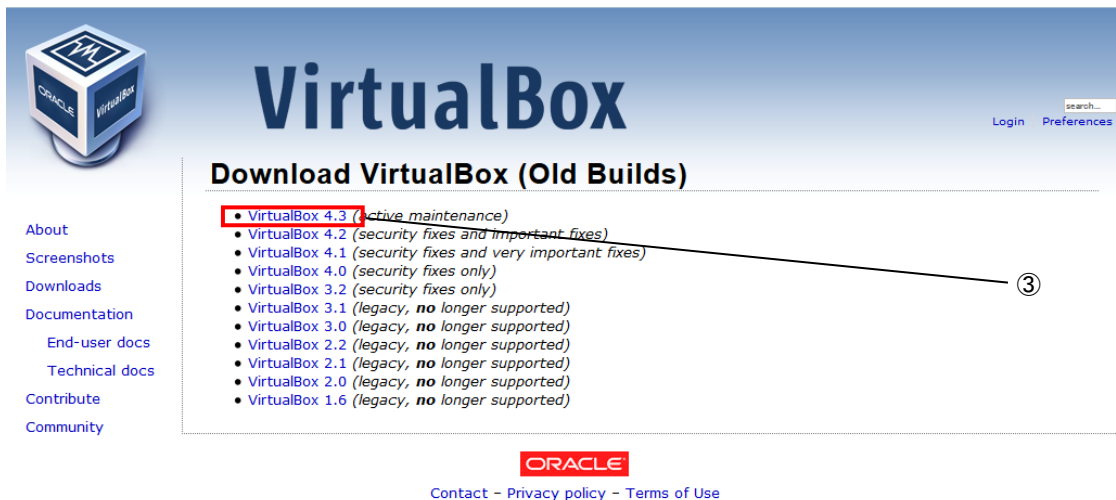


図 3-2-2-3. Virtual Box Old Builds ダウンロードページ



図 3-2-2-4. 古いバージョンの VirtualBox ダウンロードページ

- ④ Windows のダウンロード確認画面が表示されるので、任意のフォルダを指定し、[保存(S)]を選択します。ダウンロードが開始されます。

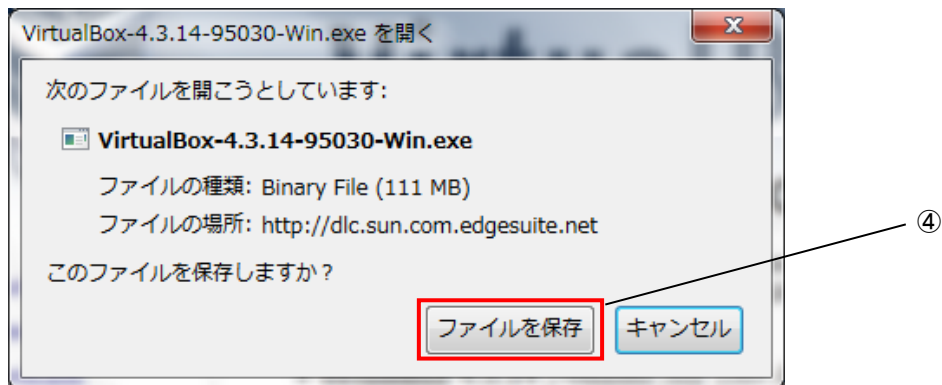


図 3-2-2-5. ダウンロード確認画面

3-2-3 VirtualBox のインストール

- ① 『3-2-2 VirtualBox のダウンロード』でダウンロードした、VirtualBox-4.3.14-XXXXX-Win_x86.msi のアイコンをダブルクリックします。
- ② 図 3-2-3-1 のセキュリティ警告画面が開きますので、[実行する(R)]をクリックします。

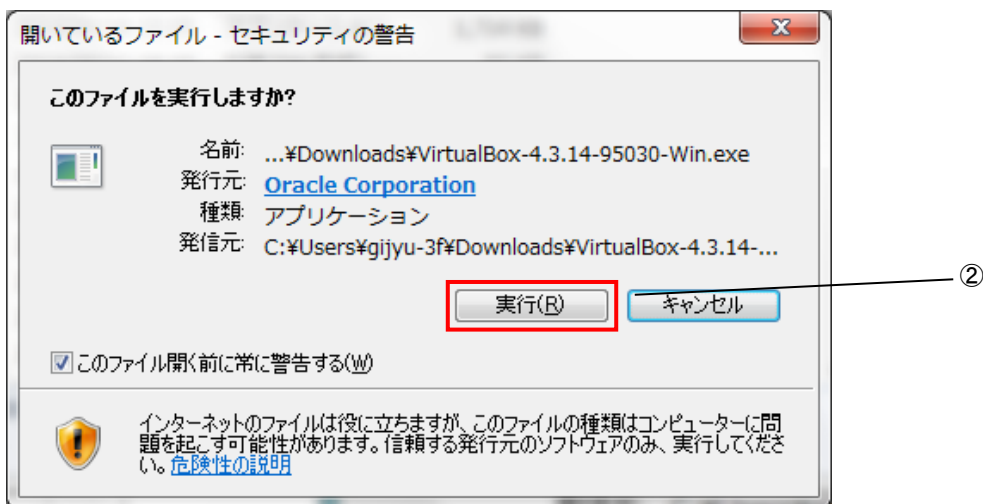


図 3-2-3-1. セキュリティ警告画面

- ③ 図 3-2-3-2 のような画面が表示されるので、[Next>]をクリックします。

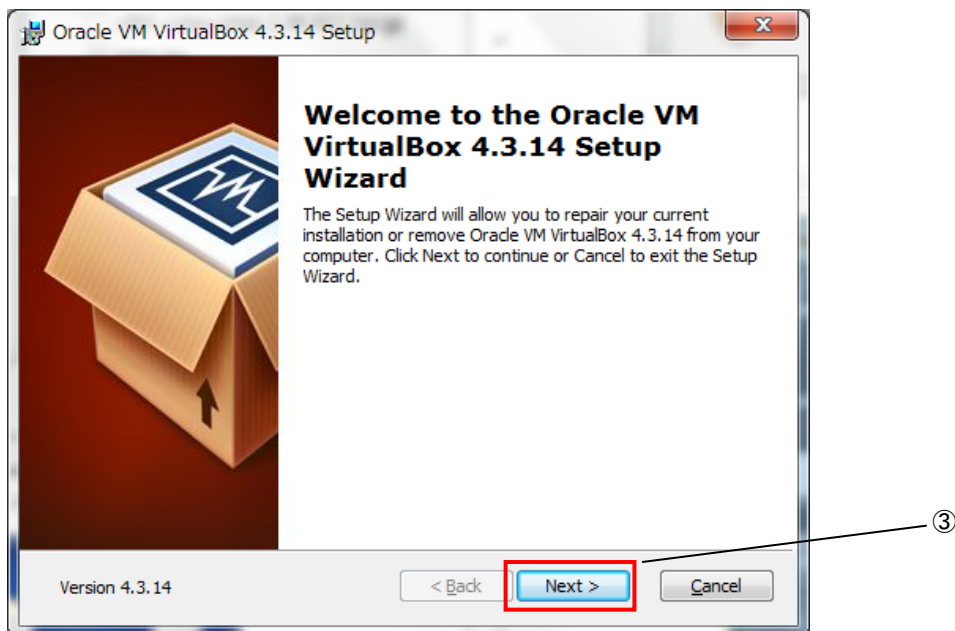


図 3-2-3-2. ダウンローダー起動後の画面

- ④ 図 3-2-3-3 のカスタムセットアップ画面に変わります。ここでは VirtualBox に追加するプラグイン機能を選択します。
- ・ VirtualBox USB Support : VirtualBox 上で USB 機能を使えるようにするプラグインです。
 - ・ VirtualBox Networking : VirtualBox 上でネットワークへ接続する為のプラグインです。
- 本製品を使用するに当たって、両方のプラグインをインストールする必要があります。デフォルトではインストールする設定になっています。
- ⑤ [Next>] をクリックします。

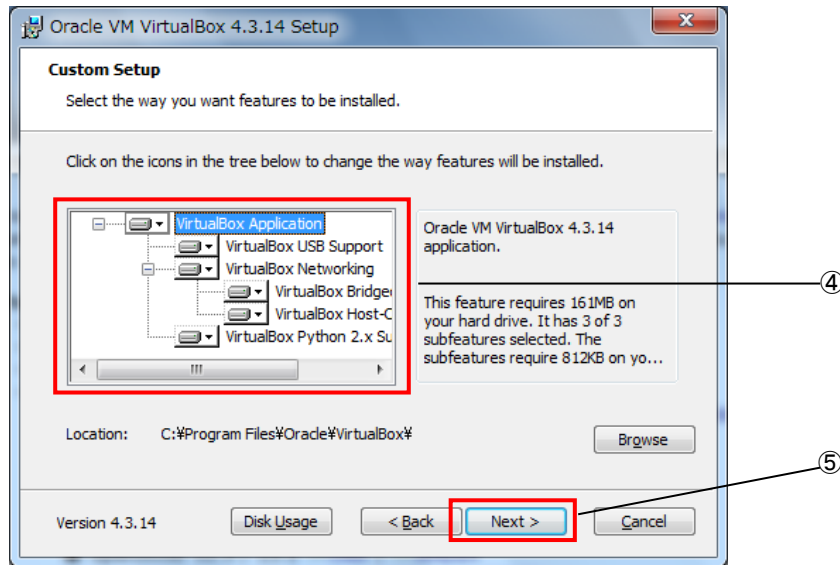


図 3-2-3-3. カスタムセットアップ画面

- ⑥ 図 3-2-3-4 のインストールオプション設定画面に切り替わります。インストールオプションを設定できます。[Next>] をクリックします。
- ・ Create a shortcut on the desktop : ショートカットをデスクトップに配置します。
 - ・ Create a shortcut in the Quick Launch Bar : ショートカットをクイックランチャーに配置します。
 - ・ Register file associations : ファイルの関連付けを登録します。

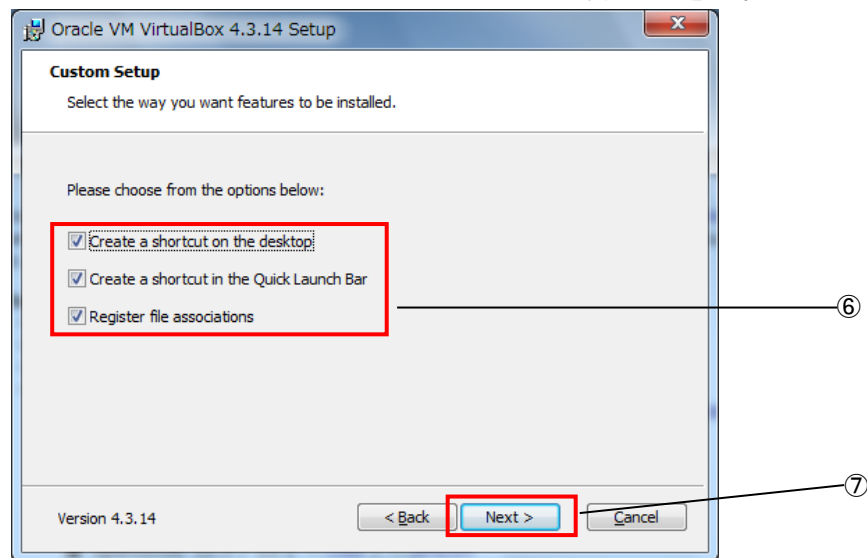


図 3-2-3-4. インストールオプション設定画面

- ⑦ 図 3-2-3-5 のネットワークインストール確認画面に切り替わりますので、[Yes]をクリックします。



図 3-2-3-5. ネットワークインストール確認画面

- ⑧ 図 3-2-3-6 のインストール確認画面に切り替わりますので、[Install]をクリックします。

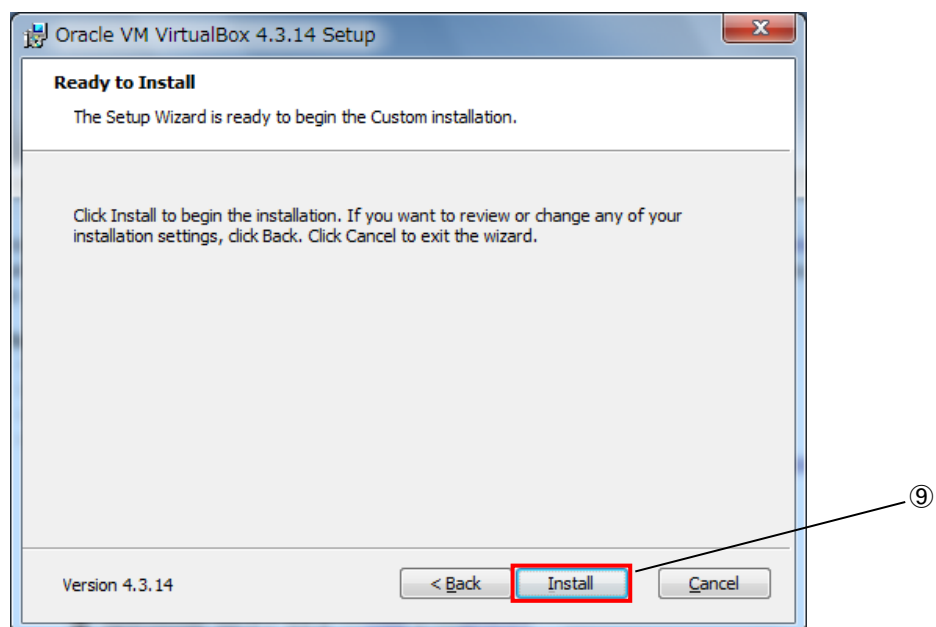


図 3-2-3-6. インストール確認画面

- ⑨ インストール中、図 3-2-3-7 のようなデバイスドライバのインストールの実行を確認する画面が開きますが、いずれも [インストール] をクリックします。

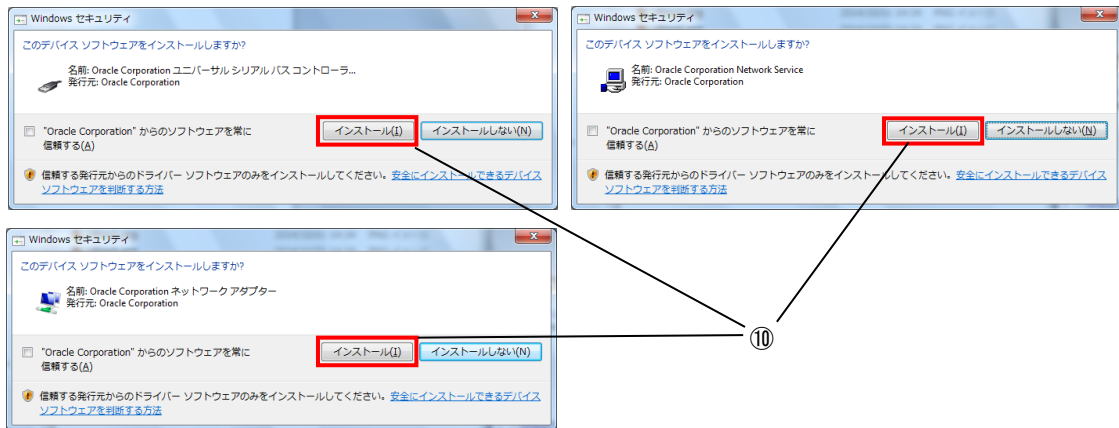


図 3-2-3-7 ドライバのインストール警告画面

- ⑩ インストールが完了すると、図 3-2-3-8 が表示されます。[Finish] をクリックします。



図 3-2-3-8 インストール完了画面

3-2-4 仮想マシンの作成

作成する仮想マシンの構成を指定します。

- ① [スタート]→[全てのプログラム]→[Oracle VM VirtualBox]→[Oracle VM VirtualBox]を選択します。

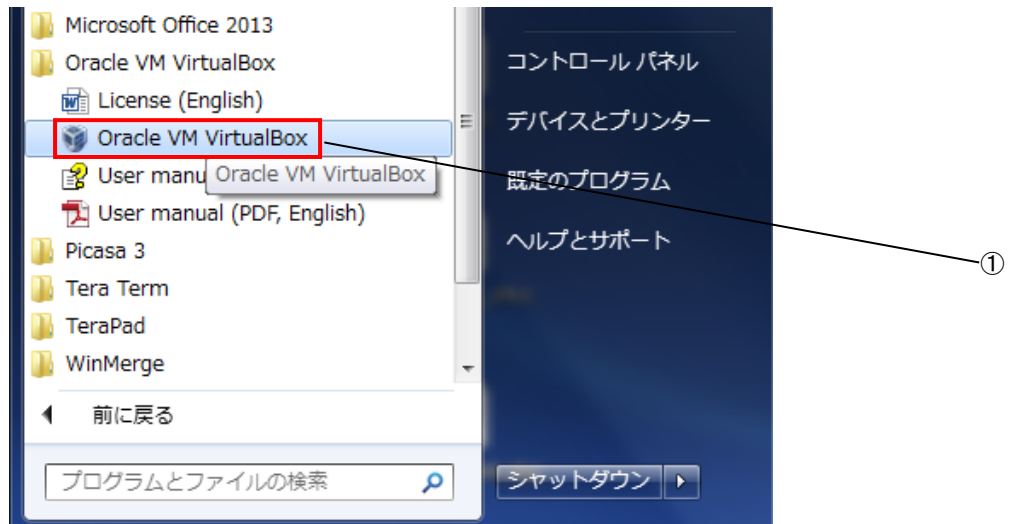


図 3-2-4-1. VirtualBox 起動

- ② VirtualBox の初回起動時に下記のような設定ファイルが作成されます。

C:\%User%\<ユーザ名>\.VirtualBox

このフォルダは VirtualBox の OS イメージであるファイルを格納するフォルダです。弊社より配布されている DVD の<DVD>%VirtualBox%Algonomix4_development.exe をこのフォルダに展開します (Algonomix4_development.exe を実行することで、展開できます)。

Algonomix4_development.exe を展開することで Algonomix4_development.vdi が作成されます。

- ③ VirtualBox が起動し、図 3-2-4-2 のような VirtualBox メイン画面が表示されるので、「新規(N)」をクリックします。

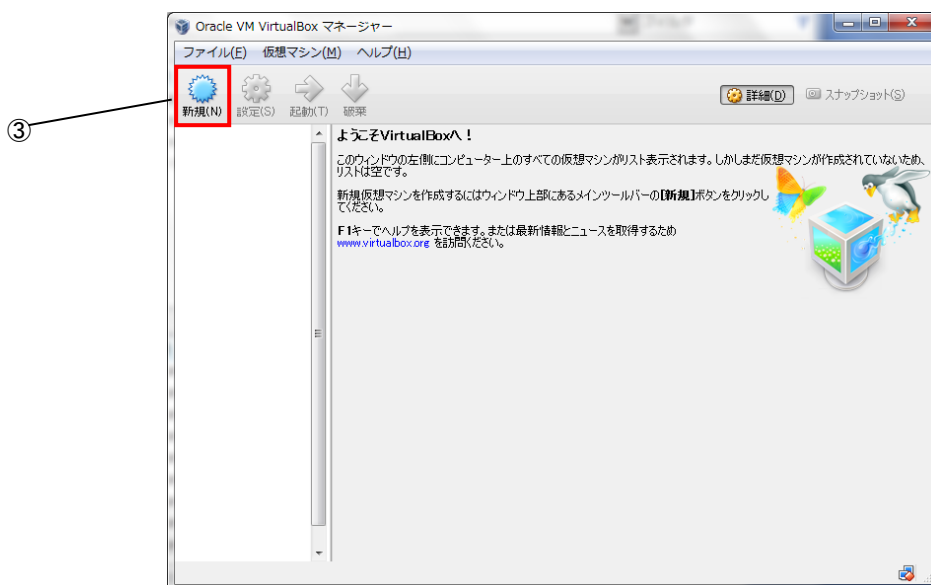


図 3-2-4-2. VirtualBox メイン画面

- ④ 図 3-2-4-3 のマシン名と OS 種類選択画面に変わるので、[名前(N)]には[Algonomix4_development]と入力します。
- ⑤ [OS タイプ(T)]では[Linux][Ubuntu(32bit)]を選択します。
- ⑥ [次へ(N)]をクリックします。

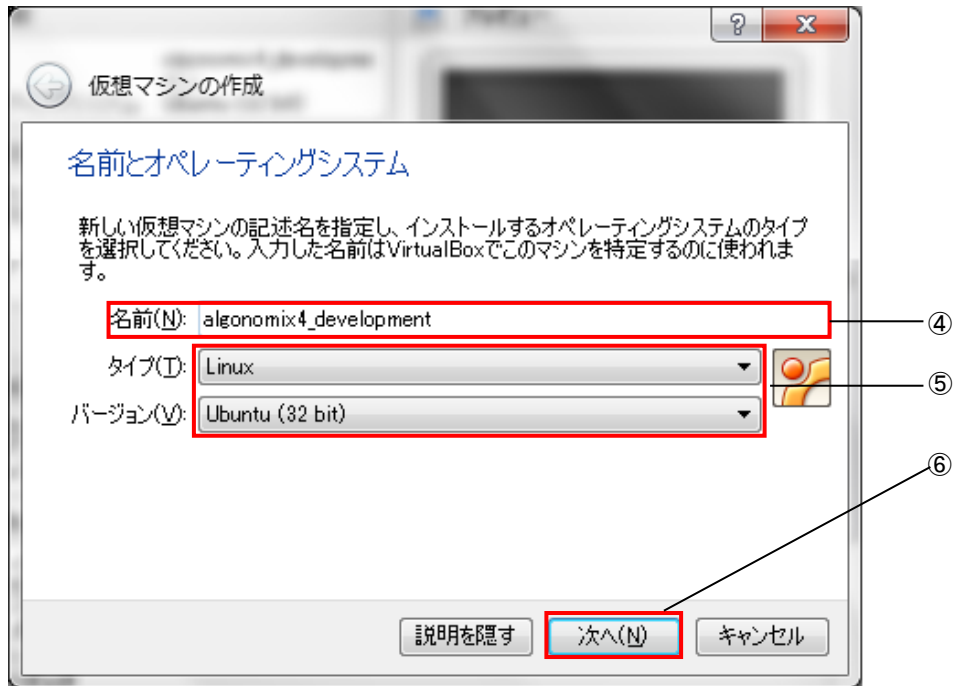



図 3-2-4-3. マシン名、OS タイプの設定

- ⑦ 図 3-2-4-4 のようなメモリ設定画面に変わります。仮想マシンのメモリサイズを入力します。
※注：ご使用のパソコンに応じてご指定ください。必須環境は 512MByte 以上です。
- ⑧ [次へ(N)]をクリックします。



図 3-2-4-4. メモリの設定

- ⑨ 図 3-2-4-5 の仮想ハードディスクのイメージ選択画面へ変わるので、[すでにある仮想ハードドライブを使用する]をクリックしてください。
- ⑩ プルダウンメニューに `algonomix4_development.vdi` がない場合、 をクリックして⑪に進みます。プルダウンメニューに `algonomix4_development.vdi` がある場合、[作成]をクリックし、⑬へ進んでください。

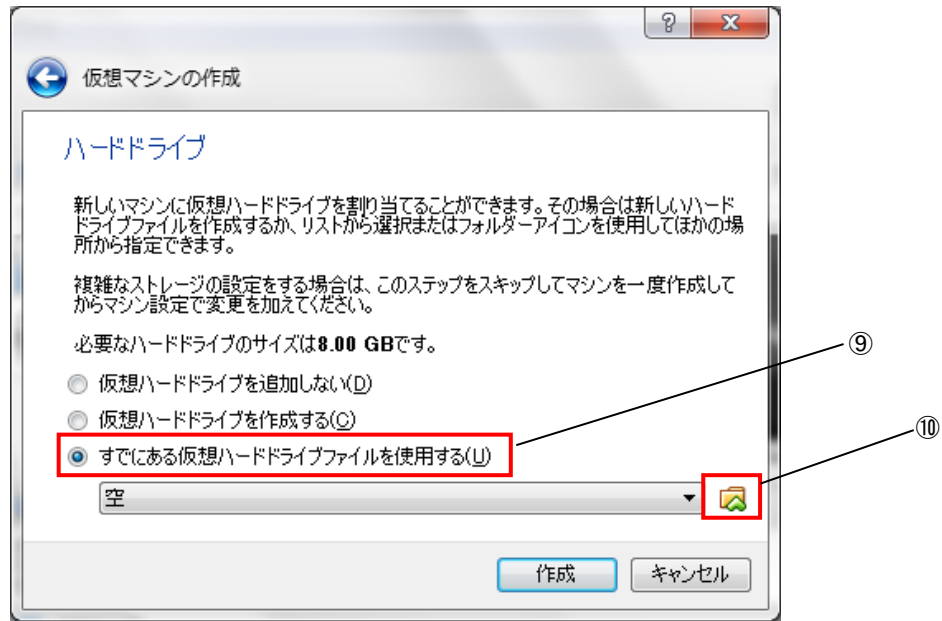


図 3-2-4-5. 仮想ハードディスクのイメージ選択画面

- ⑪ 図 3-2-4-6 のように仮想ディスク選択画面が開きます。
- ②であらかじめ展開しておいた `Algonomix4_development.vdi` を選択し、[開く (O)]を押してください。

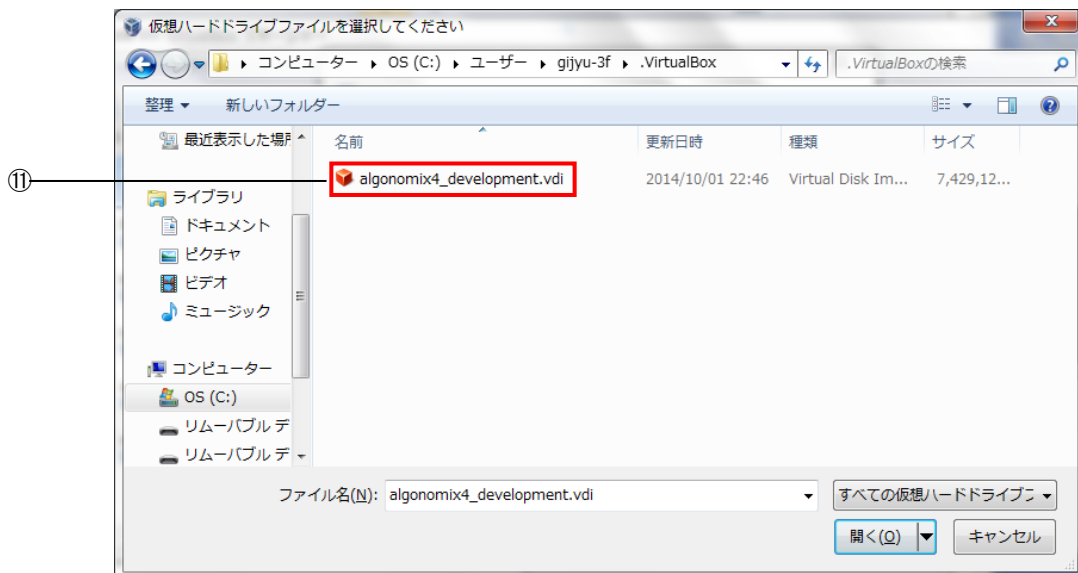


図 3-2-4-6. 仮想ディスク選択画面

- ⑫ 仮想ハードディスクのイメージ選択画面に戻ります。[作成]を押してください。

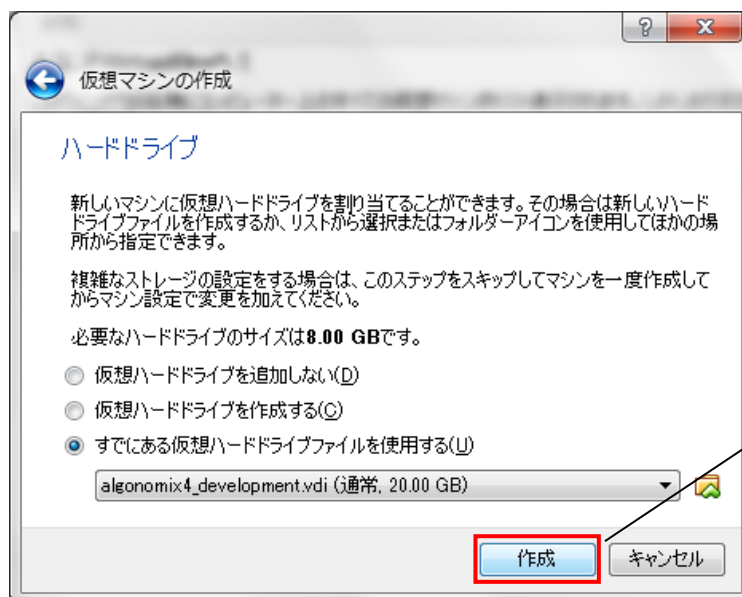


図 3-2-4-7. 仮想ハードディスクのイメージ選択画面

3-2-5 仮想マシンの起動

弊社配布の OS イメージ、Algonomix4_development.vdi は既に Algonomix4 開発環境がインストールされています。なお、Algonomix4_development.vdi のユーザ名とパスワードは、初期状態では下記のように設定されています。ログイン時やシステム変更時にユーザ名、パスワードの入力を求められるので、下記のユーザ名とパスワードを入力します。

ユーザ名 : asdusr

パスワード : asdusr

- ① VirtualBox メイン画面左側の List の中から Algonomix4_Development を選択します。
- ② [起動(T)]をクリックします。

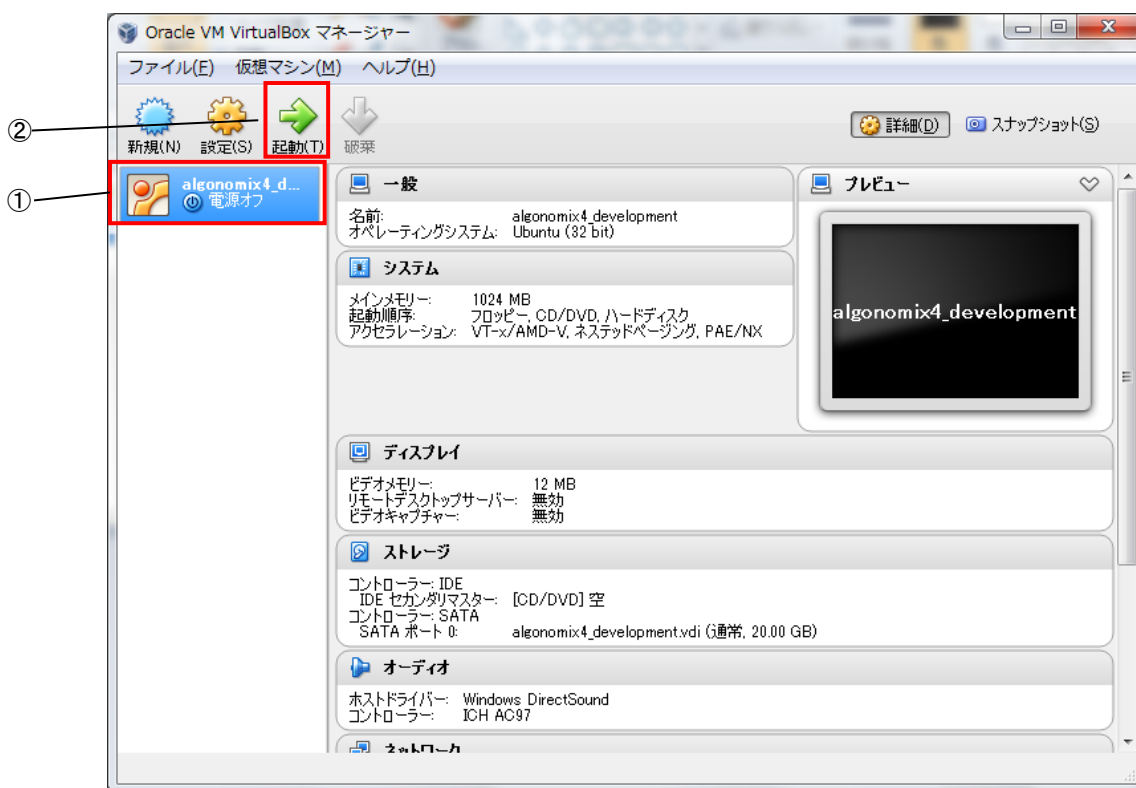


図 3-2-5-1. 仮想マシンの起動

図 3-2-5-2 のような仮想マシンのユーザ名、パスワード入力画面が起動します。

- ③ ユーザ名とパスワードの入力を求められるので、下記のユーザ名とパスワードを入力します。

ユーザ名 : asdusr

パスワード : asdusr

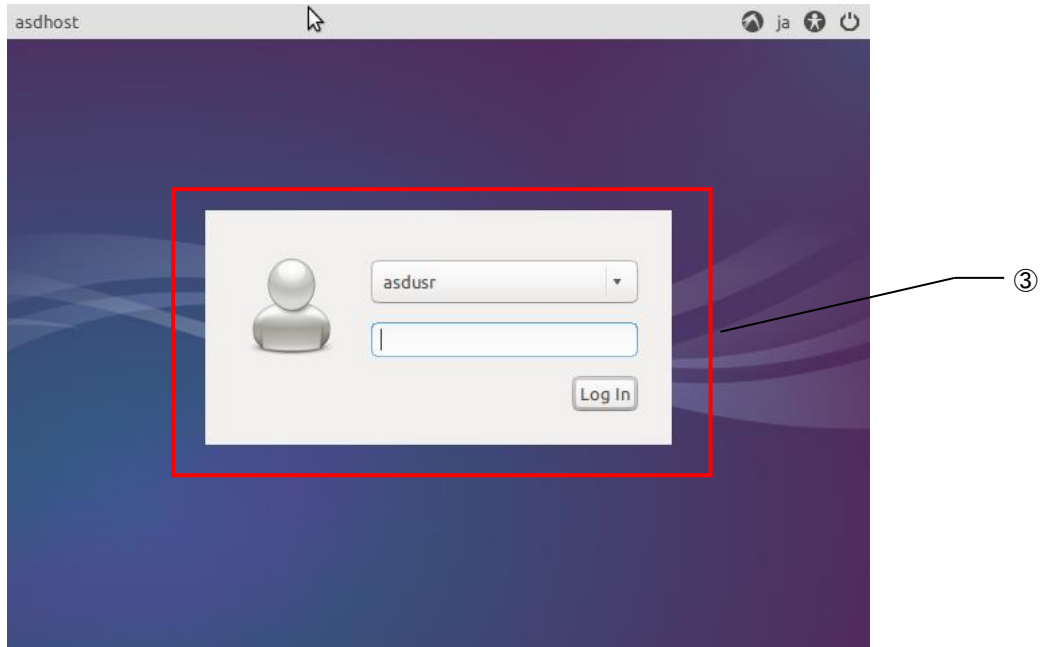


図 3-2-5-2. ユーザ名、パスワード入力画面

図 3-2-5-3 のような仮想マシンのデスクトップ画面になり、ゲスト OS が使用できるようになります。

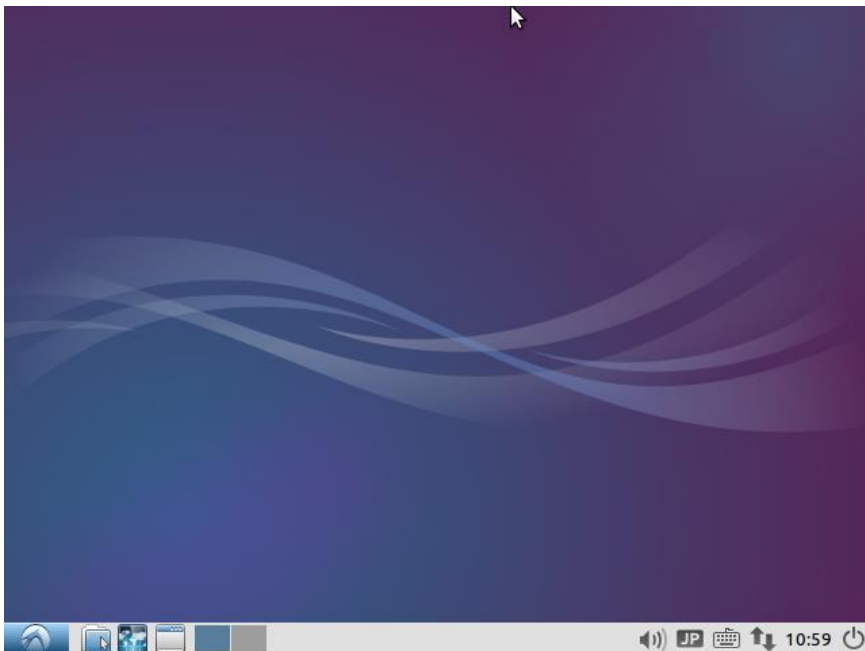


図 3-2-5-3. デスクトップ画面

3-2-6 開発環境の各種設定について

ここでは、開発環境を起動後に設定する項目について説明します。

● ネットワーク設定

ゲスト OS でネットワークを使用する際、もし接続できない場合や、IP 固定で使用したい場合は下記の方法で設定してください。

- ① [メニューアイコン]→[設定]→[ネットワーク接続]を選択します。

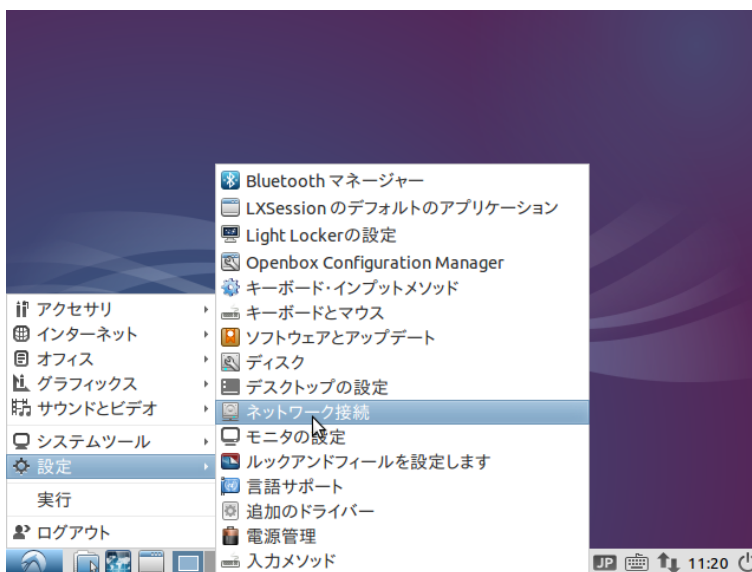


図 3-2-6-1. ネットワーク設定画面の起動

- ② 図 3-2-6-2 のようなネットワーク設定画面が起動します。認識している LAN の一覧が表示されています。設定したい接続を選択して[編集]ボタンをクリックします。

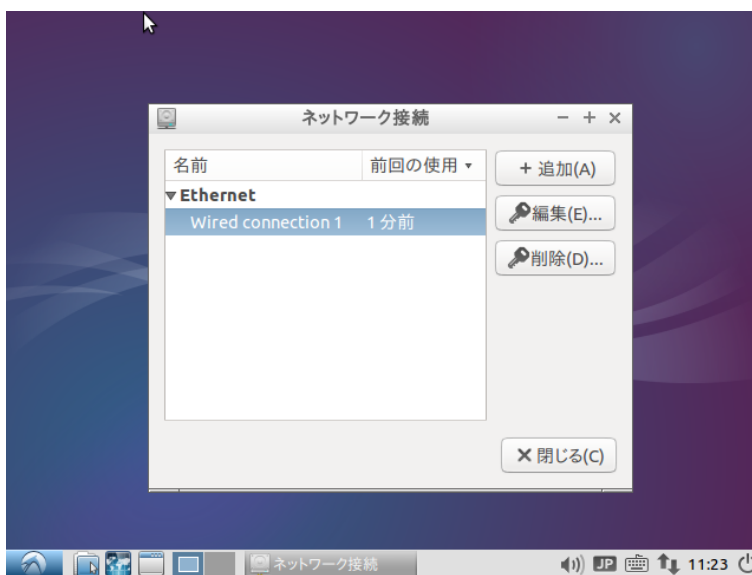


図 3-2-6-2. ネットワーク設定画面

- ③ 図 3-2-6-3 のような有線 LAN の設定画面が起動します。
接続しているネットワークの環境に合わせた設定を行ってください。



図 3-2-6-3. 有線 LAN 設定画面

- ④ 「OK」をクリックすることで、自動的に再接続されます。設定されている IP アドレスを確認する場合は、コンソールウィンドウを起動して下記のコマンドを実行してください。

・現在の設定を見る場合

```
$ sudo su
パスワード:asdusr
# ifconfig
```

※注：パスワードは出荷時のものです。また、パスワードは実際には表示されません。

正常に接続されない場合は、下記のコマンドで一端接続を切断し、再接続してみてください。

・指定したデバイスを切断する場合

```
# ifconfig eth0 down
```

・指定したデバイスを接続する場合

```
# ifconfig eth0 up
```

※注：eth0 はデバイス名です。認識しているデバイスの状態は、「ifconfig」コマンドで確認できます。

● USB の認識

仮想マシン上で USB 機器を使用する為には、ゲスト OS を起動する前に、Windows 上で使用する USB 機器のドライバがインストールされており、正常に動作している必要があります。

ゲスト OS が起動している状態で新規の USB 機器を接続されると、その USB 機器は正常に動作しません。一度、ゲスト OS をシャットダウンし、USB 機器を挿入しなおして、Windows 用のドライバをインストールしてください。その後、ゲスト OS を起動することで、新規の USB 機器を使用することができます。

VirtualBox で認識している USB 機器は[デバイス (D)]→[USB デバイス (U)]をクリックすることで一覧表示されます(図 3-2-7-5 参照)。チェックが付いているものはゲスト OS が認識しているものです。このチェックを ON/OFF することで、ゲスト OS から USB 機器を抜き差しすることができます。

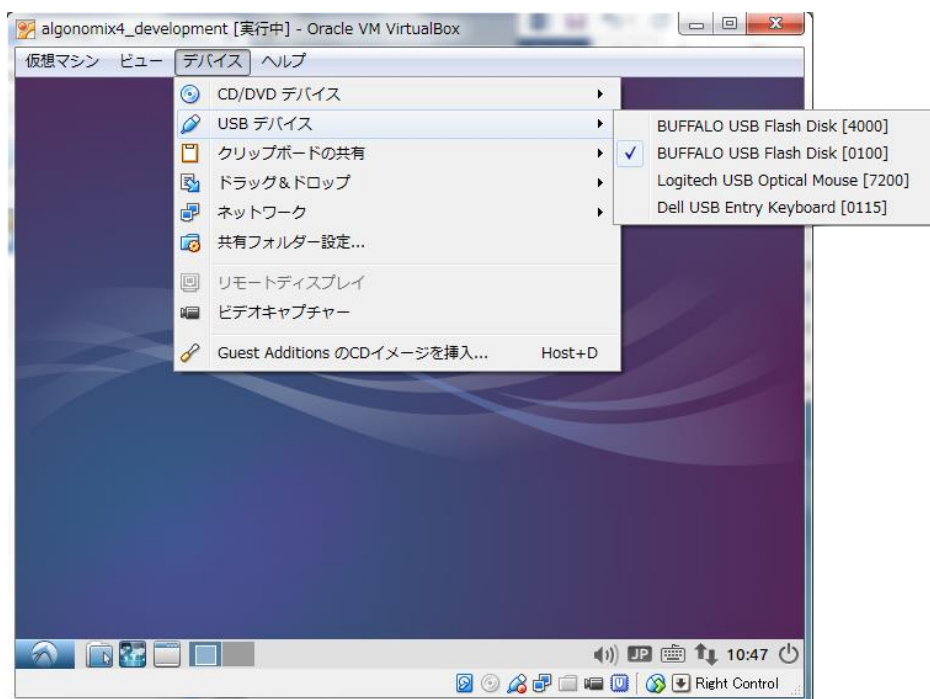


図 3-2-6-4. USB デバイス一覧

3-2-7 Algonomix4 用開発環境のディレクトリ構成について

Algonomix4 用開発環境のディレクトリ構成について説明します。Algonomix4 用開発環境のディレクトリ構成をリスト 3-2-7-1 に示します。

リスト 3-2-7-1. Algonomix4 用開発環境のディレクトリ構成

```
usr--+--local|---tools-0010--+--src--+--apl
                        +--kernel
                        +--pci
                        :
                    +--samples+--sampleConsole
                        +--sampleWideStudio

                    +--ws
```

また、これらのディレクトリの内容を表 3-2-7-1 に示します。

表 3-2-7-1. ディレクトリの内容 (抜粋)

ディレクトリ名	内容
/usr/local/tools-0010	Algonomix4 用の開発環境が格納されています
/usr/local/tools-0010/src	AP シリーズ用のドライバ等のソースファイルが格納されています。
/usr/local/tools-0010/src/apl	AP シリーズ用のアプリケーションです。 ASD コンフィグツールのソースが格納されています。
/usr/local/tools-0010/src/kernel	Algonomix4 用のカーネルソースです。
/usr/local/tools-0010/src/widestudio	本開発環境にインストールしている WideStudio ソースおよび Algonomix4 用のライブラリです。
/usr/local/tools-0010/src/pci	AP シリーズ用の PCI ドライバです。
/usr/local/tools-0010/samples	Algonomix4 用のサンプルプログラムです。
/usr/local/ws	WideStudio 本体です。

3-3 WideStudio/MWT によるアプリケーション開発

WideStudio/MWT はデスクトップアプリケーションを迅速に作成することのできる統合開発環境です。詳細は WideStudio ホームページ (<http://www.widestudio.org/index.html>) を参照してください。

Algonomix4 用開発環境に組込まれている WideStudio/MWT は V3.98-6 をベースに Algonomix4 用の環境設定を加えてコンパイルしたものです。ここで、WideStudio/MWT で簡単なプログラムをコンパイルして実際に動作させます。

3-3-1 WideStudio の起動



デスクトップ上の WideStudio のアイコンをダブルクリックすることで WideStudio が起動します。

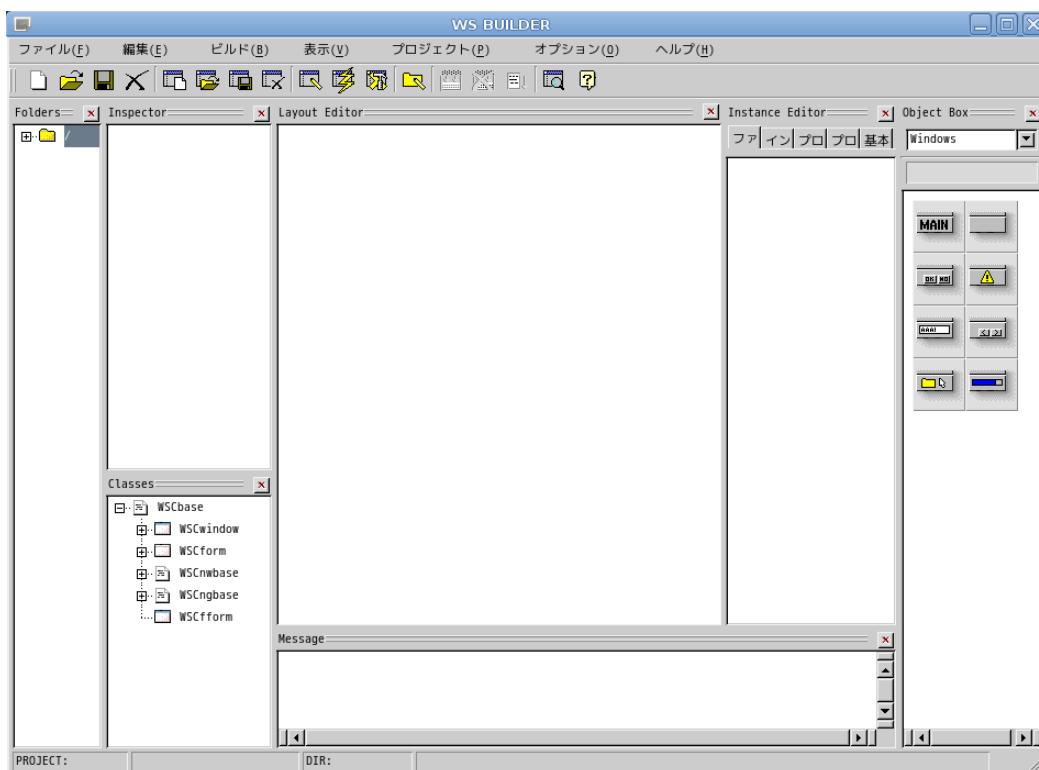



図 3-3-1-1. WideStudio 起動

3-3-2 プロジェクトの新規作成

アプリケーションを作成するためのプロジェクトを以下の手順で作成します。



図 3-3-2-1. 新規プロジェクト作成

 をクリックするか、メニューの「プロジェクト(P)」→「新規プロジェクト(N)」をクリックすることで、
図 3-3-2-2 のような画面が表示されます。ここでプロジェクト名称を記入してください。本項ではデフォルト
の newproject とします。

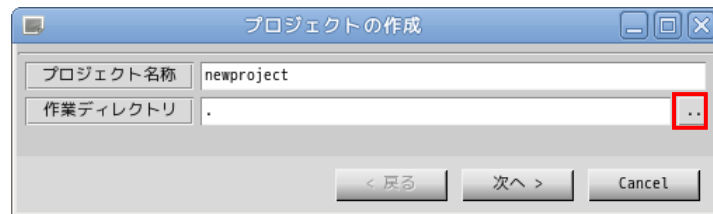



図 3-3-2-2. プロジェクト作成画面

 をクリックすることで、図 3-3-2-3 のようなファイル選択ダイアログが表示されます。

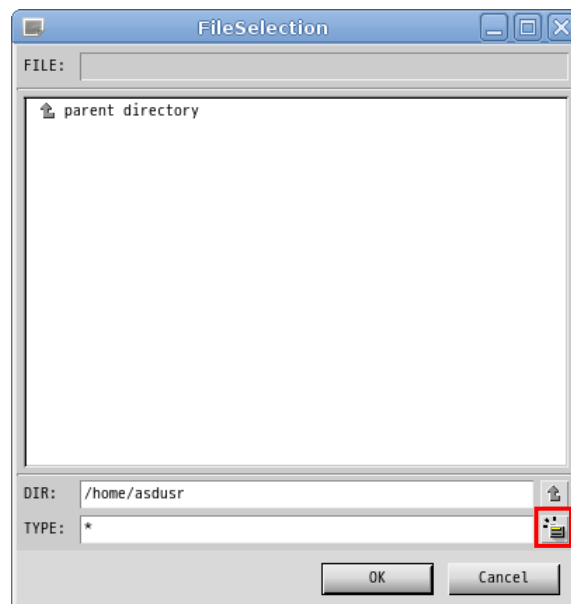



図 3-3-2-3. ファイル選択画面

DIR に「/home/asdusr」を指定します。sample というディレクトリを作成するために、 をクリックし、
「sample」と入力し「OK」ボタンをクリックします。

※注：入力はマウスカースールを入力ダイアログ上に持っていった上で行ってください。

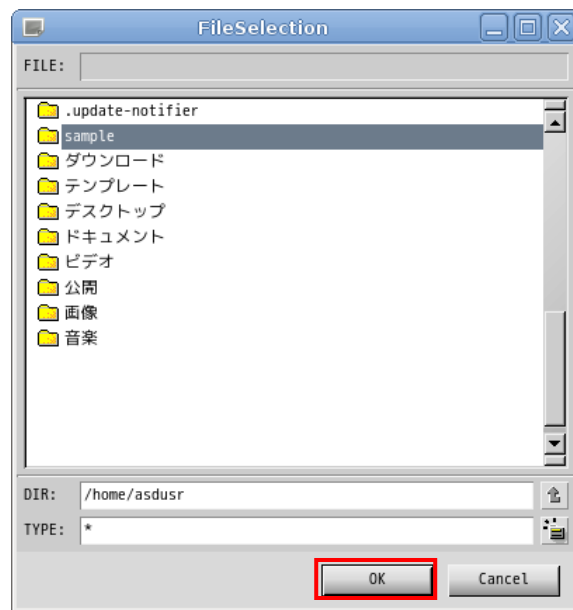


図 3-3-2-4. sample ディレクトリの作成

sample ディレクトリをダブルクリックし、DIR が「/home/asdusr/sample」と指定されたことを確認して「OK」ボタンをクリックします。

プロジェクト名と作業ディレクトリの指定が完了しましたので「次へ」ボタンをクリックします。

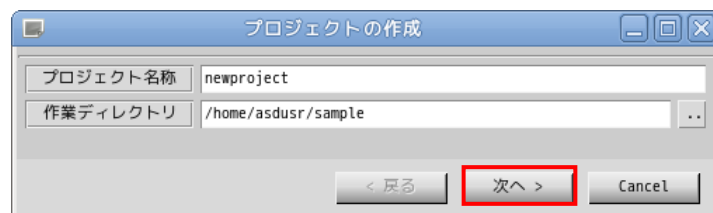


図 3-3-2-5. プロジェクト名と作業ディレクトリの設定完了

プロジェクトの種別を選択します。通常のアプリケーションを作成するので、そのまま「次へ」をクリックします。

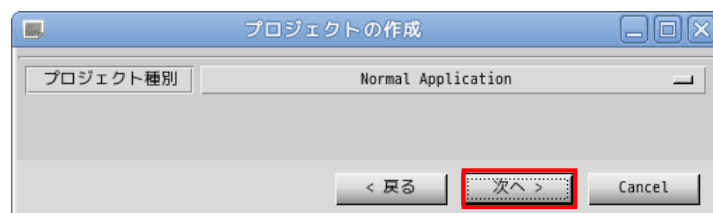


図 3-3-2-6. プロジェクト種別の選択

アプリケーションで使用するロケール種別（文字コード）、言語種別（プログラミング言語）を選択します。本項では、ロケール種別に「UTF8」を、言語種別に「C/C++」を選択します。

Algonomix4 で動作確認したロケール種別は、ユニコード (UTF8) と日本語 (EUC) と日本語 (SJIS) のみです。また、言語種別は C/C++ のみサポートしています。

※注：ロケール種別については注意が必要です。例えば、シリアル通信を通して、SJIS の文字列が送られてきてそれを表示する場合、ここでのロケール種別は SJIS にします。

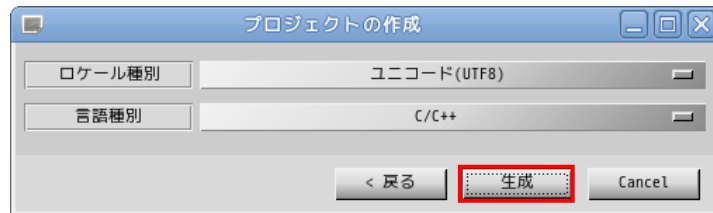


図 3-3-2-7. ロケール種別と言語種別を選択

以上でプロジェクトの作成は完了です。

3-3-3 アプリケーションウィンドウの作成

前項でプロジェクトの作成が完了しましたので、次にアプリケーションウィンドウを作成します。

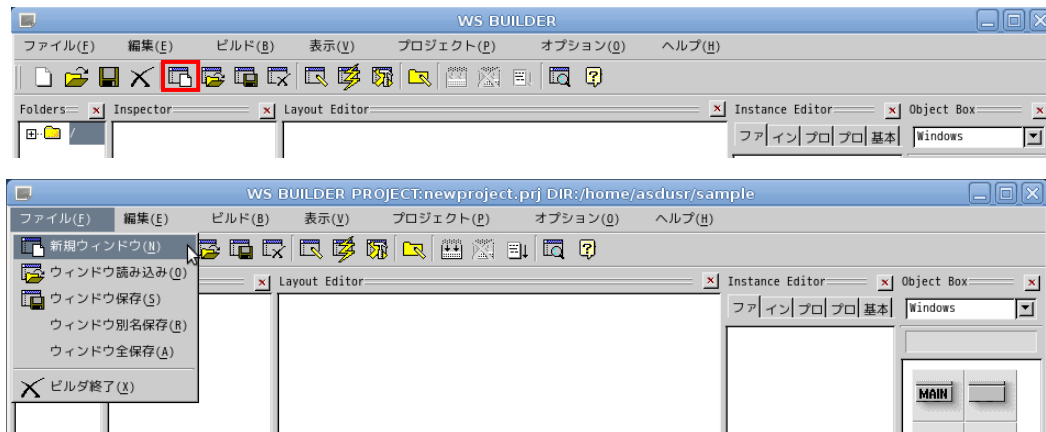



図 3-3-3-1. 新規ウィンドウ作成

 をクリックするか、メニューの「ファイル (F)」→「新規ウィンドウ (N)」をクリックすることで、図 3-3-3-2 の画面が表示されます。「通常のウィンドウ」を選択し、「次へ >」ボタンをクリックします。

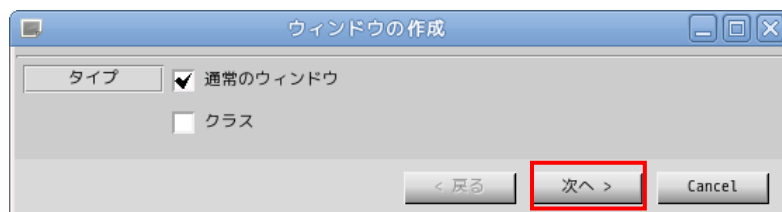


図 3-3-3-2. アプリケーションウィンドウタイプ選択

アプリケーションウィンドウの名称とプロジェクトに登録するかを選択します。名称は変数として使われるので空白のない英数字のみ有効です。ここではデフォルト設定のままとします。設定を変更せずに「次へ >」をクリックします。

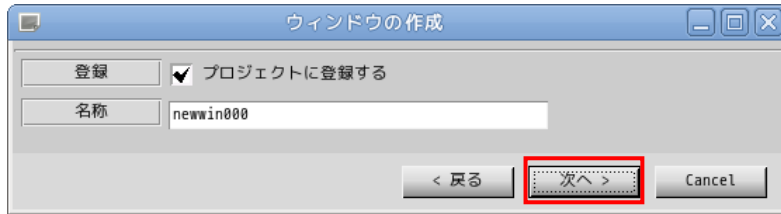


図 3-3-3-3. アプリケーションウィンドウ名称設定

テンプレートの選択を行います。あらかじめ用意されたテンプレートを選択することで、標準的なメニューやツールバーを持つアプリケーションウィンドウを作成することができます。今回はメニューを持たないウィンドウを作成するので、「なし」を選択して「生成」ボタンをクリックします。

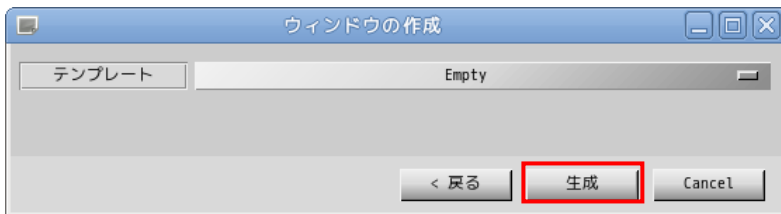


図 3-3-3-4. テンプレートの選択

これで、アプリケーションウィンドウが作成できました。作成したアプリケーションウィンドウをクリックし、「Instance Editor」の「プロパティ」タブをクリックすることで、アプリケーションウィンドウのプロパティが設定できるようになります。表 3-3-3-1 を参考にプロパティを変更してください。

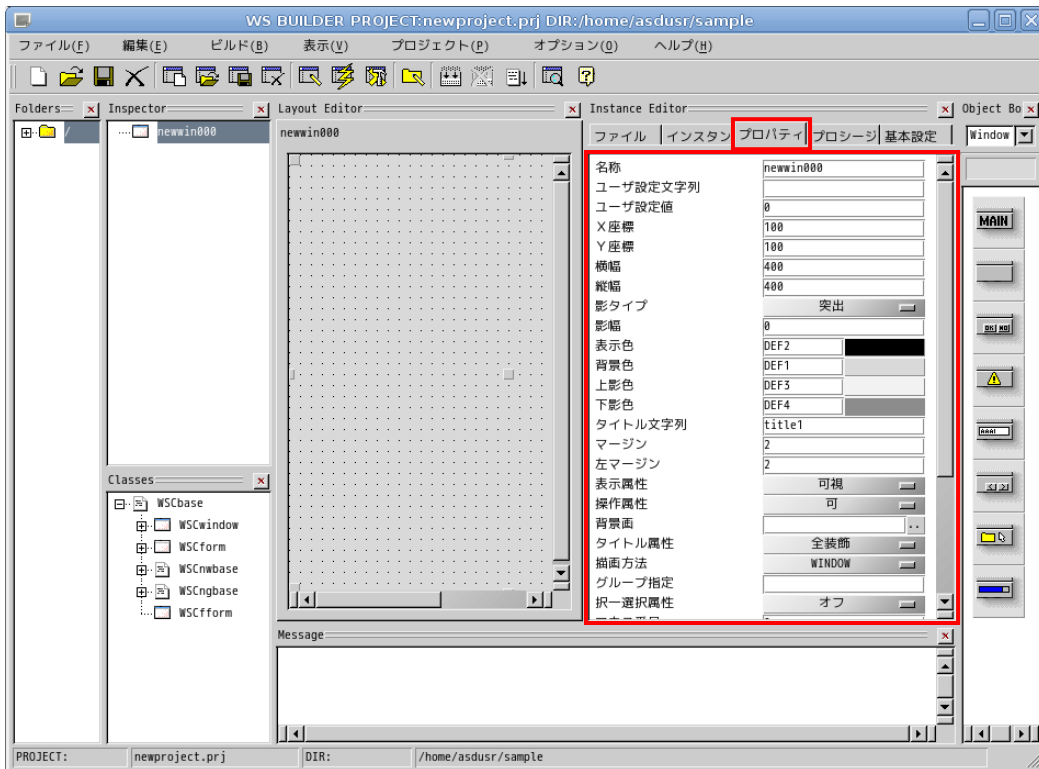


図 3-3-3-5. アプリケーションウィンドウの生成

表 3-3-3-1. アプリケーションウィンドウのプロパティ変更

プロパティ名	説明	設定値
X 座標	ウィンドウの初期起動 X 位置	0
Y 座標	ウィンドウの初期起動 Y 位置	0
横幅	ウィンドウの横幅	200
縦幅	ウィンドウの縦幅	200

以上で、アプリケーションウィンドウの作成は完了です。

3-3-4 部品の配置

アプリケーションウィンドウの上に部品を配置します。

ボタンを配置しますので、「Object Box」の「Commands」を選択し、ボタンオブジェクトをアプリケーションウィンドウにドラッグ&ドロップで配置します。

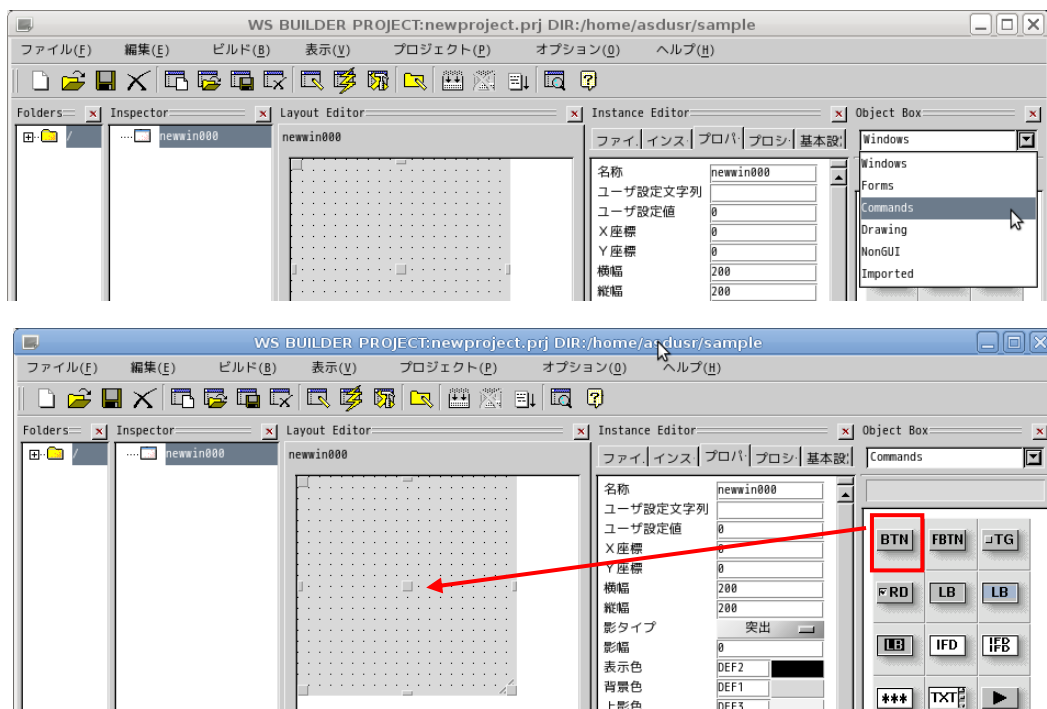


図 3-3-4-1. ボタンの配置

図 3-3-4-2 のようにボタンが配置されます。他の部品も同じようにオブジェクトボックスから目的のアイコンを選び出し、ドラッグ&ドロップすることでウィンドウ上に配置できます。

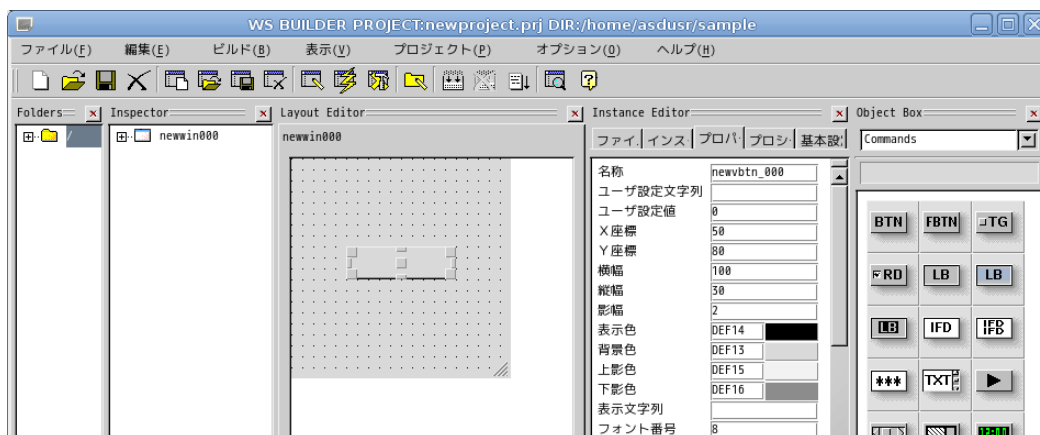


図 3-3-4-2. アプリケーションウィンドウに配置されたボタン

ボタンのプロパティを変更します。アプリケーションウィンドウ上に配置されたボタンをクリックし、「Instance Editor」の「プロパティ」タブをクリックすることで、ボタンのプロパティを設定できるようになります。表 3-3-4-1 を参考に値を変更してください。

表 3-3-4-1. ボタンのプロパティ変更

プロパティ名	説明	設定値
表示文字列	ボタンに表示される文字列の設定	PUSH

※注：ここでは、例としてウィンドウにボタンオブジェクトを貼り付けただけのテストサンプルを作成しています。他の部品の詳細については、ヘルプや WideStudio の書籍を参照してください。

※注：Algonomix4 に組込まれていないライブラリを使用している部品についてはコンパイルできません。組込まれているライブラリと組込まれていないライブラリについては表 3-3-4-2 を参照してください。

表 3-3-4-2. WideStudio コンフィグ時に組込まれるライブラリ

ライブラリ名	状態	内容
OpenGL	No	3D グラフィックスのためのプログラムインターフェイス
JpegLib	HAS	JPEG ファイルを圧縮・伸張するためのライブラリ
PngLib	HAS	PNG ファイルを圧縮・伸張するためのライブラリ
XpmLib	HAS	XPM ファイルを圧縮・伸張するためのライブラリ
ODBC library	No	Open DataBase Connectivity の仕様に基づいたデータベースにアクセスするためのライブラリ
PostgreSQL development library	No	PostgreSQL と呼ばれる、オープンソース系データベースにアクセスするためのライブラリ
MySQL development library	No	MySQL と呼ばれる、オープンソース系データベースにアクセスするためのライブラリ
Python	HAS	Python と呼ばれる、オブジェクト指向スクリプト言語を扱うためのライブラリ
Python header	No	Python を扱うためのヘッダファイル
Ruby	No	Ruby と呼ばれる、オブジェクト指向スクリプト言語を扱うためのライブラリ
Perl	HAS	Perl と呼ばれる、インタプリタ形式のプログラム言語を扱うためのライブラリ

※注：No となっているライブラリは出荷時状態では組込まれていません。

3-3-5 イベントプロシージャの設定

ボタンのクリックという動作で実行されるプログラムを記述するには、ボタンオブジェクトにプロシージャと呼ばれるプログラムを設定します。

アプリケーションウィンドウ上のボタンをクリックし、「Instance Editor」の「プロシージャ」タブを選択することで、図 3-3-5-1 のような画面が起動します。

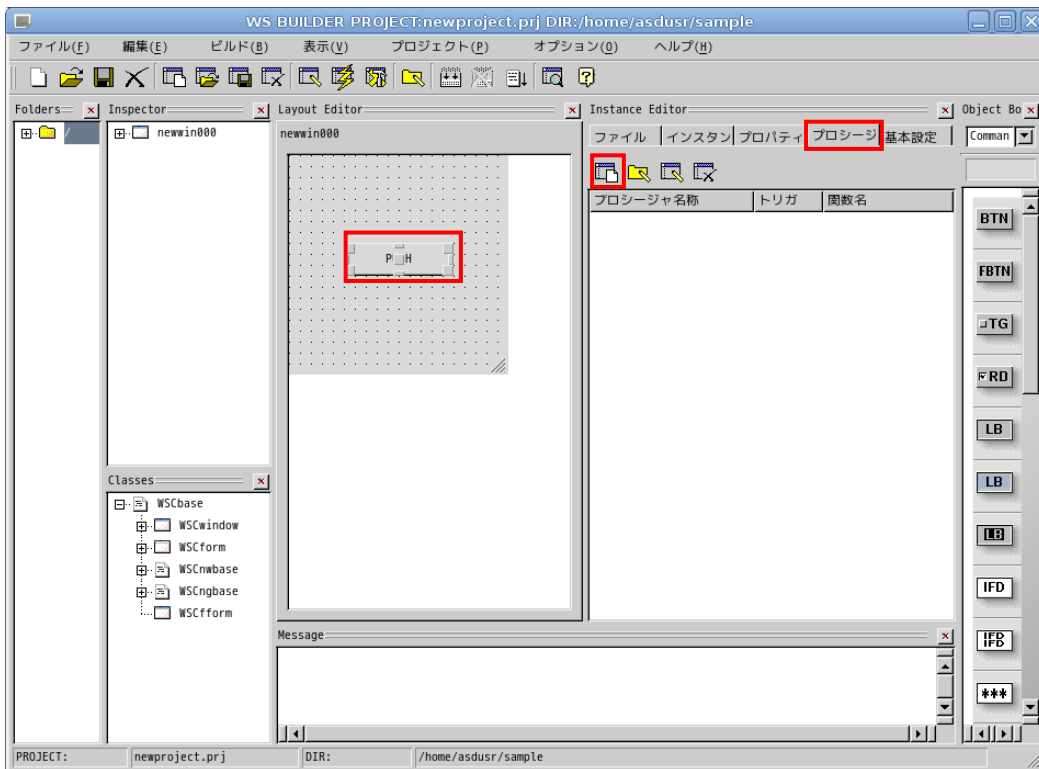


図 3-3-5-1. イベントプロシージャの作成



をクリックすることで、図 3-3-5-2 のようなイベントプロシージャ作成ダイアログが表示されます。

プロシージャ名は、イベントプロシージャを識別するための名前です。今回は、「Btn_Click」と入力します。起動関数名は、イベント発生時に起動される C/C++の関数名です。この関数に処理を記述します。今回はプロシージャ名と同じ「Btn_Click」と入力します。

起動トリガは、イベントの発生条件を選択します。今回は、ボタンを押して、離されたときに発生するイベントとして「ACTIVATE」を選択します。

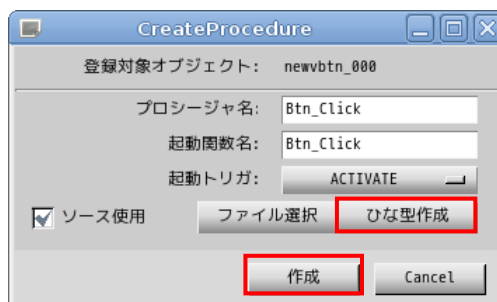


図 3-3-5-2. イベントプロシージャ作成ダイアログ

「ひな型作成」ボタンをクリックすることで、確認ダイアログが表示されるので「OK」ボタンをクリックします。これで、イベントプロシージャのソースコードが自動的に生成されます。「作成」ボタンをクリックします。この操作でイベントプロシージャを作成します。

図 3-3-5-3 のように「Instance Editor」の「プロシージャ」画面に、作成したイベントプロシージャが表示されます。プロシージャ名をダブルクリックすることで、エディタを起動し、処理を記述することができます。

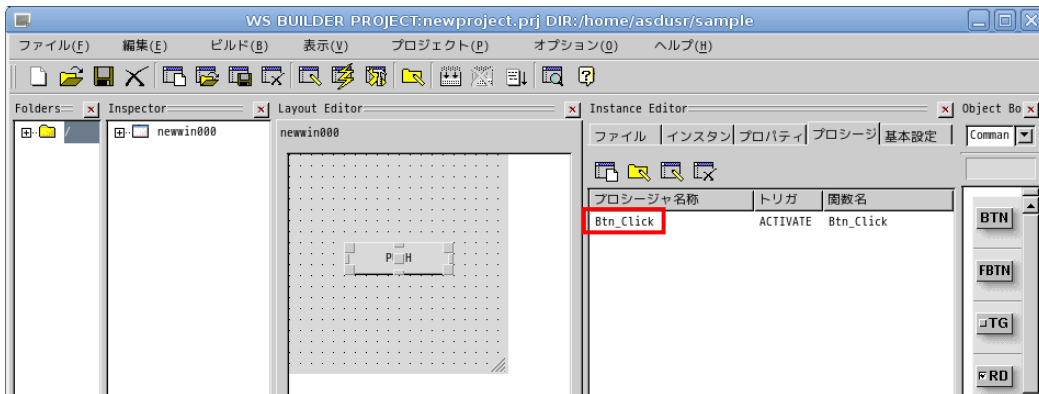


図 3-3-5-3. 作成されたイベントプロシージャ

3-3-6 イベントプロシージャの編集

ボタンをクリックしたときに、ボタンの表示文字列を変更するコードを記述します。イベントプロシージャの初期状態は図 3-3-6-1 のようになっています。

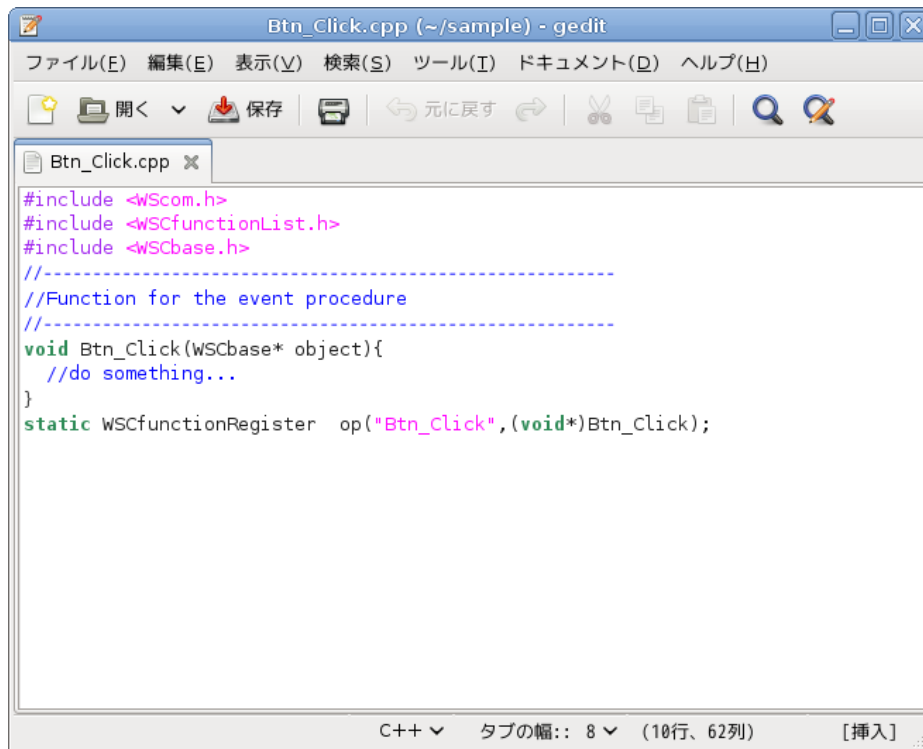


図 3-3-6-1. イベントプロシージャ初期ソースコード

リスト 3-3-6-1 のようにコードを変更します。

リスト 3-3-6-1. 表示文字列を変更するコード

```
#include <WScom.h>
#include <WSCfunctionList.h>
#include <WSCbase.h>
//-----
//Function for the event procedure
//-----
void Btn_Click(WSCbase* object) {
    object->setProperty (WSNlabelString, "HELLO!");    //表示文字列変更
}
static WSCfunctionRegister op("Btn_Click", (void*)Btn_Click);
```

これで、ボタンをクリックしたら、「PUSH」が「HELLO!」となるプログラムができます。保存してエディタを終了します。以上でコーディングは完了です。

3-3-7 コンパイル

サンプルプログラムのビルドを行います。メニューの「ビルド(B)→リビルド(R)」をクリックしてください。プログラムのコンパイルが始まります。

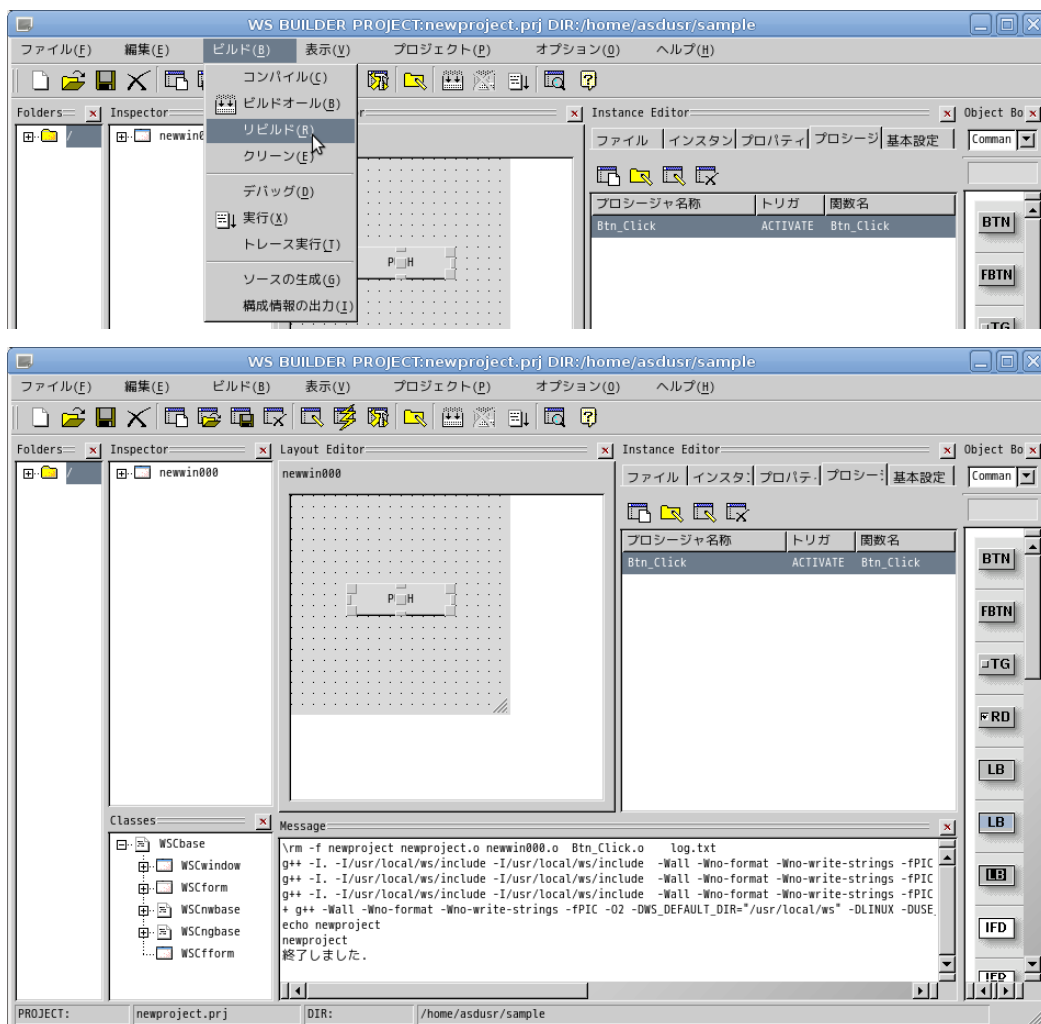


図 3-3-7-1. サンプルプロジェクトのコンパイル

コンパイル完了後、メニューの「ビルド (B)→実行 (X)」をクリックしてください。サンプルプログラムが開発環境上で実行されます。「PUSH」ボタンをクリックして、「HELLO!」と表示されることを確認してください。

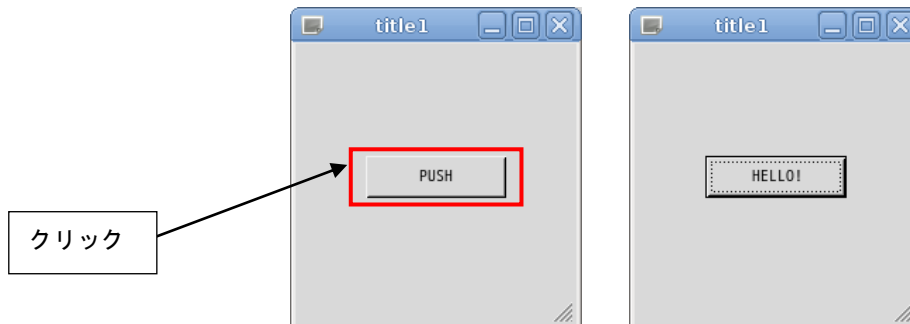


図 3-3-7-2. プログラム実行画面

動作確認後、プログラムを終了させてください。メニューの「ビルド (B)→実行中止 (X)」で終了できます。「終了」または「X」をクリックした場合でも、メニューの「ビルド (B)→実行中止 (X)」をクリックしてください。上記の開発手法は、開発環境 PC 上でコンパイルし、開発環境 PC 上で実行するセルフコンパイル方式です。AP シリーズでは x86 互換の Atom と呼ばれる CPU を採用しているため、開発環境 PC で動作したプログラムはそのまま AP シリーズ上でも動作します。この場合、開発環境 PC と実行環境 PC が異なるのでクロスコンパイル方式といいます。

3-3-8 ファイルの転送

開発環境にて作成した実行プログラムを AP シリーズに移して実行します。

実行プログラムだけでなく、設定ファイルや画像データ等、AP シリーズにデータを転送するには USB メモリでの転送と、ftp での転送の 2 種類の方法があります。

●USB メモリでの転送

- ① 開発環境パソコンに USB メモリを挿入します。正常に認識されるとデスクトップ上にハードディスクのアイコンが表示され、内容が表示されます。
- ② 転送するデータ (サンプルプログラム) を USB メモリにコピーします。
- ③ ハードディスクアイコンを右クリックし「アンマウント」をクリックします。正常に USB メモリがアンマウントされれば、アイコンが消えますので、USB メモリを抜いてください。
- ④ 転送するデータが保存された USB メモリを AP シリーズに挿入します。
- ⑤ USB メモリが自動でマウントされます。ホームディレクトリ上で、以下のコマンドを実行します。
***の部分は USB メモリのデバイス名です。

```
# cp /media/asdusr/**/newproject
# ./newproject
```

- ⑥ ⑤の最後のコマンドで、作成したサンプルプログラムが実行されます。
「PUSH」ボタンを押下したら、「HELLO!」となることを確認してください。
- ⑦ USB メモリを抜くときは、以下のコマンドを入力します。

```
# sync
# umount /media/asdusr/**/
```

これで USB メモリがアンマウントされます。

※注：アンマウントせずに USB メモリを抜くとファイルが破損する可能性があります。

●LAN 経由で ftp 転送

- ① LAN ケーブルを AP シリーズに接続します。
AP シリーズと開発環境を HUB 無しで接続する場合、クロスケーブルが必要です。

シリーズ側の OS である Algonomix4 のネットワークを設定するには、ASD Network Config を用います。『2-3-1 ASD Network Config について』を参考にして設定してください。また、接続する Algonomix4 の IP アドレスを確認しておいてください。

※注：AP シリーズと開発環境の IP アドレスは、同一のネットワークアドレスと異なるホストアドレスを指定する必要があります。

- ② ゲスト OS のデスクトップ上の「アプリケーション」ツールバーから「インターネット」→「gFTP」を選択することで「gFTP」という FTP クライアントが起動されます。

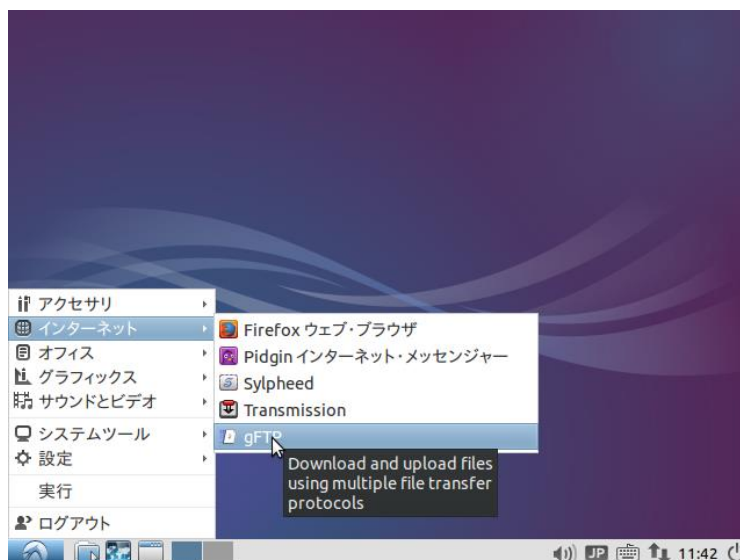


図 3-3-8-1. FTP クライアントの起動

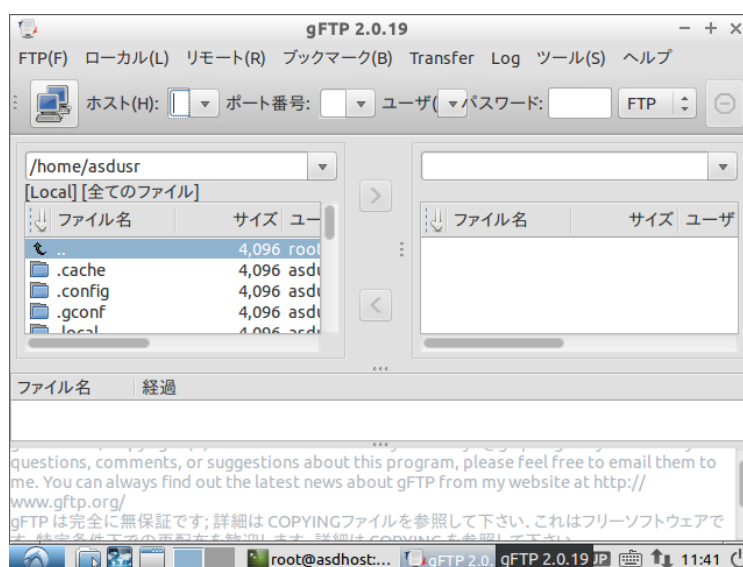


図 3-3-8-2. FTP クライアント画面

- ③ 接続先である AP シリーズの IP アドレスを指定します。



- ④ ポート番号は空で大丈夫です。



- ⑤ AP シリーズへの FTP 接続ユーザ名を指定します。デフォルトでは「asdusr」となっています。



- ⑥ AP シリーズへの FTP 接続パスワードを指定します。デフォルトでは「asdusr」となっています。



- ⑦ 通信タイプを指定します。「FTP」としてください。

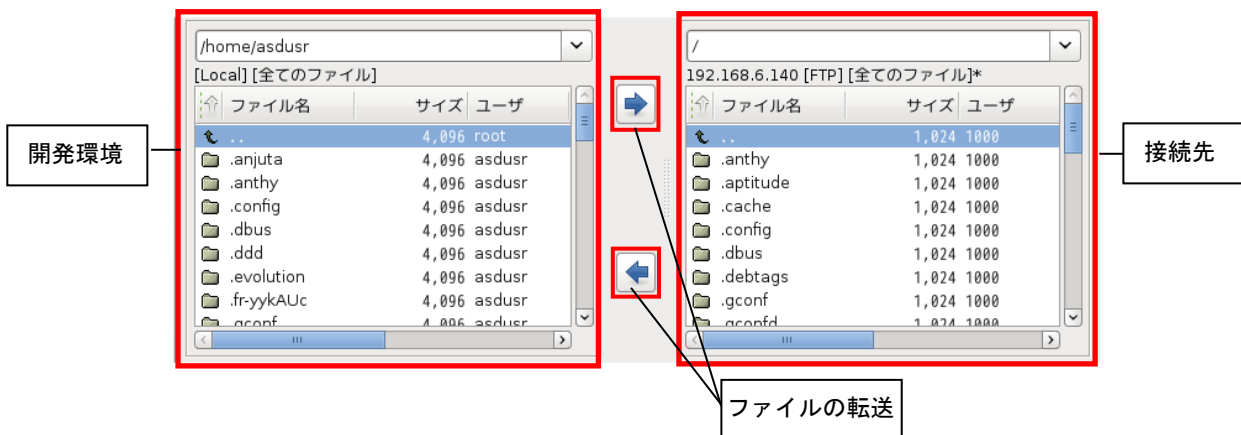


- ⑧ Algonomix4 上で起動している FTP サーバに対して、接続と切断を行います。



- ⑨ 正常に接続されると、Algonomix4 の「/home/asdusr」ディレクトリがルートディレクトリとしてリスト表示されます。Algonomix4 の FTP サーバ (vsftpd) のデフォルト設定ではセキュリティ上「/home/asdusr」ディレクトリより上のディレクトリには移動できないように設定されています。

移動したいファイルを選択して、矢印キーをクリックすることで、開発環境側と Algonomix4 側でファイルの転送が可能です。



以上でアプリケーション開発の説明は終了です。

3-3-9 WideStudio/MWT の開発例

本項では、弊社が行った開発事例を列挙します。アプリケーション開発の参考資料としてご使用ください。

● X Window System 上で全画面表示させる方法

X Window System 上でアプリケーションを実行する場合、起動された GUI アプリケーションには必ずタイトルバーがつけられます。これは、X Window System 上で Window Manager が動作しており、Window Manager がタイトルバーをつけ、複数のアプリケーションを管理しているためです。組み込み用途で使用する場合、メイン画面はタイトルバーをつけずに全画面表示させる場合があります。表 3-3-9-1 のプロパティを変更することで、タイトルバーのついていないアプリケーションを開発することができます。この場合、起動したプログラムが常に前に表示されるので、アプリケーションウィンドウの表示、非表示を切り替えて使用する必要があります。

表 3-3-9-1. アプリケーションウィンドウのプロパティ変更

プロパティ名	説明	設定値
タイトル属性	ウィンドウのタイトルバー属性の設定	WM 管理外
終了	ウィンドウを非表示にしたとき終了する/しないの設定	オフ

サンプルとして作成した、HELLO プログラムを修正して試してみます。アプリケーションウィンドウのプロパティを表 3-3-9-1 に書かれているように変更してください。Btn_Click のイベントプロシージャをリスト 3-3-9-1 のように記述してください。

このプログラムをコンパイルして実行すると、タイトルバーが付いていない画面が起動されます。ボタンを押下することで、メイン画面が非表示になり、xeyes というプログラムが起動されます。xeyes が終了されると、再度メイン画面が表示されます。

リスト 3-3-9-1. 別アプリケーションの起動サンプル

```
#include "stdlib.h"
#include <WScom.h>
#include <WSCfunctionList.h>
#include <WSCbase.h>
#include "newwin000.h"
//-----
//Function for the event procedure
//-----
void Btn_Click(WSCbase* object) {
    newwin000->setVisible(False);           //アプリケーションウィンドウの非表示
    system("xeyes");                       //xeyes というプログラムを起動する
    newwin000->setVisible(True);           //アプリケーションウィンドウの表示
}
static WSCfunctionRegister op("Btn_Click", (void*)Btn_Click);
```

●WideStudio のフォント設定について

WideStudio には次の 4 系統のフォント設定があります。

■X11 系の設定

FONT0: サイズ フォント名 Weight(0: 無し 1: bold) slant(0: 無し 1: イタリック)

[例] FONT0: 10 * 0 0

FONT1: 12 * 0 0

Algonimix4 の/etc/xunicoderc にて詳細なフォントを定義

■T-Engine 系の設定

FONT0: サイズ フォント ID

[例] FONT0: 10 60c6

FONT1: 12 60c6

■DirectFB 系 Linux フレームバッファ系、T-Engine フレームバッファ系

FONT0: font0

[例] FONT0: font0

FONT1: font1

/etc/wsfnts にてフォントファイルを定義

■Windows 系の設定

Windows フォントパラメータをカンマ区切りで列挙

WideStudio のフォント設定は、プロジェクト設定のフォント設定タブで設定します。また、「prj ファイル」に記録されているフォント設定の値を直接変更することでフォント設定を行うこともできます。

※注: Algonimix4 上のフォントと開発環境上のフォントは設定が変更されている可能性があるため、開発時に見えているフォントと実際に動作させたときのフォントが違う可能性があります。

●X Window System の場合

Algonimix4 上で WideStudio アプリケーションを動作させる際のフォント設定方法を以下に示します。

リスト 3-3-9-2. X11 用のフォント設定例 (prj ファイル)

```
#FONT0
12 東風ゴシック 0 0 /* サイズ 12 フォント名 東風ゴシック Weight 無し slant 無し */
#FONT1
14 東風ゴシック 0 0 /* サイズ 14 フォント名 東風ゴシック Weight 無し slant 無し */
#FONT2
16 東風ゴシック 0 0 /* サイズ 16 フォント名 東風ゴシック Weight 無し slant 無し */
#FONT3
18 東風ゴシック 0 0 /* サイズ 18 フォント名 東風ゴシック Weight 無し slant 無し */
#FONT4
24 東風ゴシック 0 0 /* サイズ 24 フォント名 東風ゴシック Weight 無し slant 無し */
#FONT5
30 東風ゴシック 0 0 /* サイズ 30 フォント名 東風ゴシック Weight 無し slant 無し */
#FONT6
34 東風ゴシック 0 0 /* サイズ 34 フォント名 東風ゴシック Weight 無し slant 無し */
#FONT7
36 東風ゴシック 0 0 /* サイズ 36 フォント名 東風ゴシック Weight 無し slant 無し */
```

prj ファイル

#FONT0

12 * 0 0

サイズ 12 フォント名 * Weight 0: 無し slant 0: 無し
1: 太字 1: 斜体

WideStudio Ver3.98-4 から XFT ライブラリを利用し、アンチエイリアスの効いたフォント表示を行うことができます。

Algonomix4 に標準実装されているフォントは「東風ゴシック」のみです。

WideStudio Ver3.98-6 時点ではボールド設定 (Weight) とイタリック設定 (slant) は使用することが出来ません。

Algonomix4 開発環境では、文字マップというプログラムを使用することで TrueType フォントを確認することができます。起動方法と画面を図 3-3-9-1 に示します。

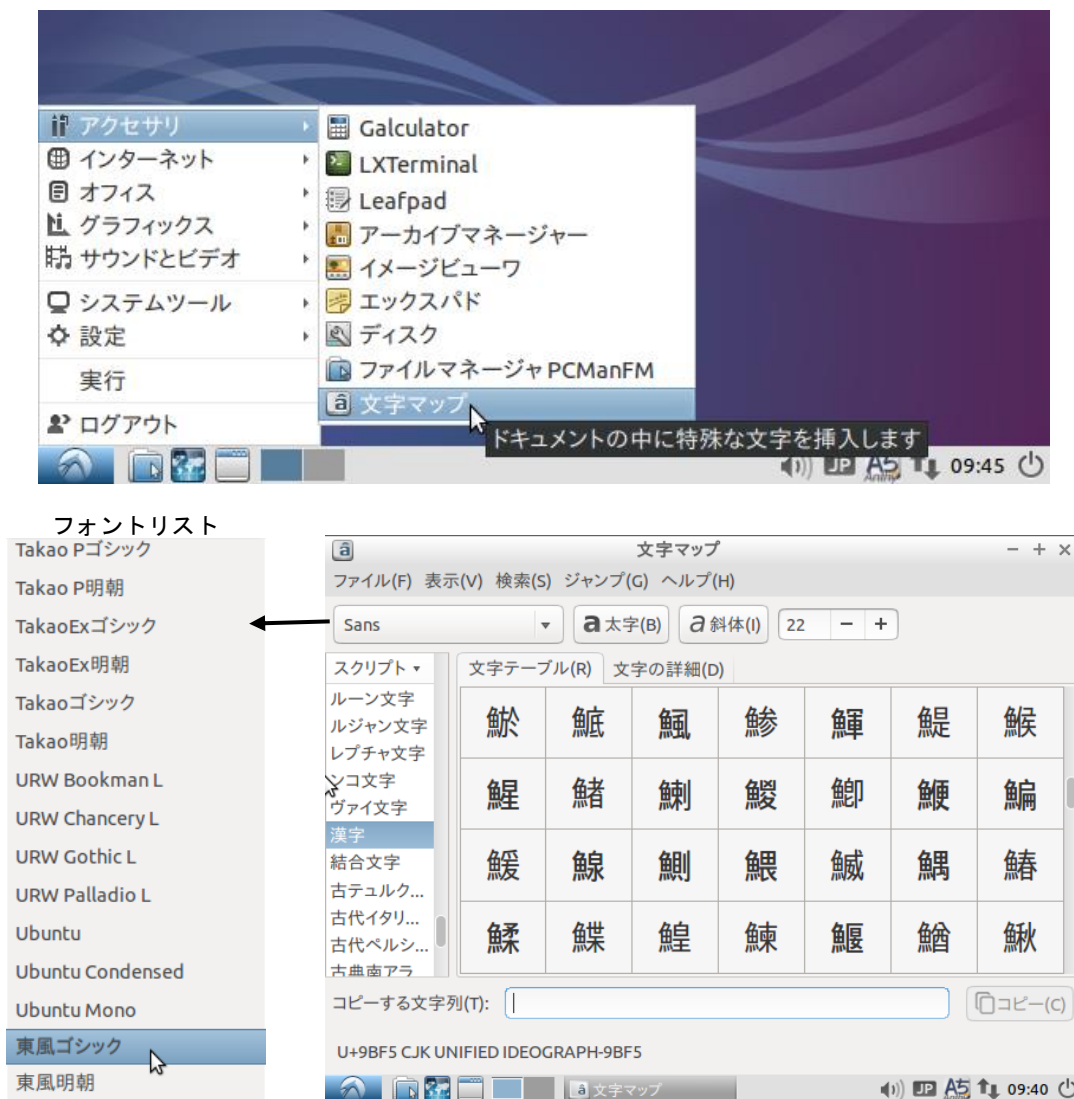


図 3-3-9-1. 文字マップツール

3-4 GDB によるデバッグ方法の詳細

Algonomix4 上で実行されるプログラムのデバッグには GDB や GDB サーバを使用します。Algonomix4 上では GDB サーバを実行させ、開発環境側では GDB を実行します。開発環境側で GDB 用のコマンドを実行することによりブレークやステップ実行などを行うことができます。

本項では簡単な使い方について説明します。詳細な使用方法については、GDB のマニュアルや解説書などを参照ください。

Algonomix4 では、ネットワークポートを使用したデバッグ方法を標準としています。

以下より『3-3 WideStudio/MWT によるアプリケーション開発』でサンプルプログラムとして作成したプログラムを使用して、GDB にてデバッグする方法を示します。

① デバッグモードでのコンパイル


デバッグ過程がよくわかるように、Hello! と表示するボタンのプロシージャ関数のコードをリスト 3-4-1 のように変更します。

リスト 3-4-1. 表示文字列を変更するコード（デバッグ確認用）

```
#include <WScom.h>
#include <WSCfunctionList.h>
#include <WSCbase.h>
//-----
//Function for the event procedure
//-----
void Btn_Click(WSCbase* object) {
    int i, j, k;

    k=0;
    for (i=0; i<10; i++) {
        for (j=0; j<10; j++) {
            k++;
        }
    }
    object->setProperty (WSNlabelString, k);           //表示文字列変更 (k の値を表示)
}
static WSCfunctionRegister op("Btn_Click", (void*)Btn_Click);
```

GDB を使用する場合、コンパイルオプションとして「-g」や「-ggdb」を付加してコンパイルする必要があります。

WideStudio の場合は、をクリックする、またはメニューの「プロジェクト(P)」→「プロジェクト設定(E)」をクリックします。「コンパイル」タブをクリックすることで、図 3-4-1 のようなプロジェクト設定画面が表示されます。

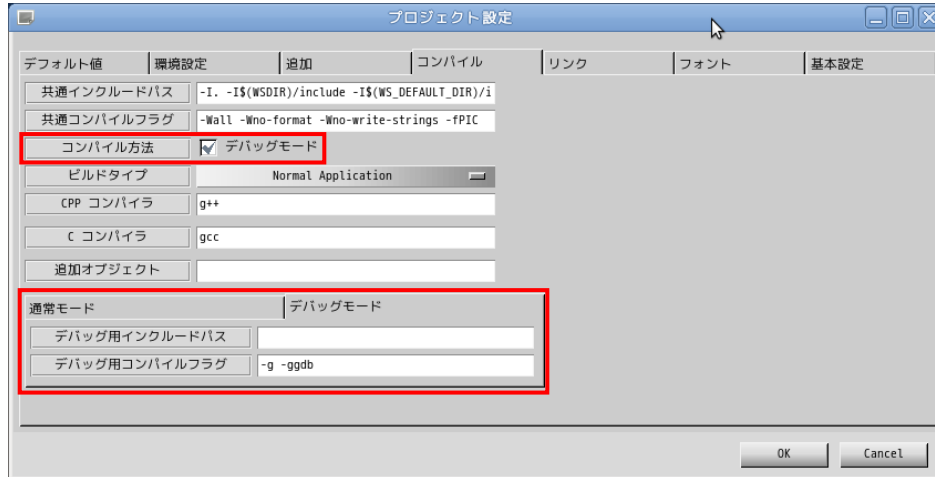


図 3-4-1. プロジェクト設定画面（コンパイルタブ）

「コンパイル方法」項目の、「デバッグモード」のチェックボックスにチェックを入れた場合は、デバッグモードのコンパイルフラグが使用されるようになります。デバッグモードのタブに「-g -ggdb」デバッグ用コンパイルフラグが設定されていますので確認してください。

「OK」ボタンをクリックし、プロジェクト全体をコンパイルします。通常モードで作成される実行プログラム名に「d」が付いた実行プログラムが作成されます。（「newproject」→「newprojectd」）

② GDB サーバの起動

Algonomix4 で「gdbserver」を起動します。『3-3-8 ファイル転送』の「LAN 経由で ftp 転送」の項目を参考に、①でコンパイルした「newprojectd」を AP シリーズに転送します。以下のコマンドを実行して「gdbserver」を起動します。

```
# chmod 755 newprojectd
# gdbserver host1:2345 ./newprojectd
Process ./newprojectd created; pid = 21507
Listening on port 2345
```

③ GDB の起動

開発環境のデスクトップ上の「アプリケーション」ツールバーから「アクセサリ」→「端末」をクリックし、別のコンソールを起動します。デバッグするプログラムのソースディレクトリへ移動します。

```
# cd /home/asdusr/sample
```

GDB を起動し、Algonomix4 の GDB サーバと接続します。

```
# gdb ./newprojectd
GNU gdb (GDB) 7.0.1-debian
Copyright (C) 2009 Free Software Foundation, Inc.
License GPLv3+: GNU GPL version 3 or later <http://gnu.org/licenses/gpl.html>
This is free software: you are free to change and redistribute it.
There is NO WARRANTY, to the extent permitted by law. Type "show copying"
and "show warranty" for details.
This GDB was configured as "i484-linux-gnu".
For bug reporting instructions, please see:
<http://www.gnu.org/software/gdb/bugs/>...
Reading symbols from /home/asdusr/sample/newprojectd... done.
(gdb) target remote 192.168.0.1:2345
Remote debugging using 192.168.0.1:2345
[New Thread 3009]
0x295568c0 in ?? () from /lib/ld-linux.so.2
(gdb)
```

ここまでで、GDB の起動は完了しました。

④ デバッグ

ブレークポイントを指定します。ここではボタンのプロシージャ関数でブレークするようにします。

```
(gdb) b Btn_Click(WSCbase*)
Breakpoint 1 at 0x401904: file Btn_Click.cpp, line 10.
(gdb)
```

コンティニュー実行します。Algonomix4 上にサンプルプログラムの画面が表示されます。

```
(gdb) c
Continuing.
```

「PUSH」 ボタンをクリックすることで、以下のメッセージがでてブレークされます。

```
Breakpoint 1, Btn_Click (object=0x452d08) at Btn_Click.cpp:10
10          k=0;
Current language: auto
The current source language is "auto; currently c++".
(gdb)
```

監視する変数を指定します。

```
(gdb) display k
1: k = 152474568
(gdb) display i
2: i = -1076372104
(gdb) display j
3: j = -1207467296
(gdb)
```

ステップ実行します。

```
(gdb) n
11          for (i=0; i<10; i++) {
3: j = -1207467296
2: i = -1076372104
1: k = 0
(gdb) n
12          for (j=0; j<10; j++) {
3: j = -1207467296
2: i = 0
```

```

1: k = 0
(gdb) n
13                               k++;
3: j = 0
2: i = 0
1: k = 0
(gdb) n
12                               for (j=0; j<10; j++) {
3: j = 0
2: i = 0
1: k = 1
(gdb)

```

リストを表示します。入力された数値を中心に 10 行表示されます。

```

(gdb) list 13
8           int i, j, k;
9
10          k=0;
11          for (i=0; i<10; i++) {
12              for (j=0; j<10; j++) {
13                  k++;
14              }
15          }
16          object->setProperty (WSNLabelString, k);
17      }
(gdb)

```

16 行目にブレークを張り、コンティニュー実行します。

```

(gdb) b 16
Breakpoint 2 at 0x40193a: file Btn_Click.cpp, line 16.
(gdb) c
Continuing.

Breakpoint 2, Btn_Click (object=0x452d08) at Btn_Click.cpp:16
16          object->setProperty (WSNLabelString, k);
3: j = 10
2: i = 10
1: k = 100
(gdb)

```

この時点で、ボタンの表示が変更される直前まで実行しました。さらにコンティニュー実行を行うとボタンに 100 と表示されます。サンプルプログラムを終了し、GDB を終了します。

```

(gdb) c
Continuing.

Program exited normally.
(gdb) q
#

```

以上で GDB によるデバッグ方法について簡単に説明しました。ここで紹介したコマンド以外にもいろいろなコマンドが用意されています。比較的よく使うと思われるコマンドについて表 3-4-1 に示します。

表 3-4-1. GDB コマンド (抜粋)

コマンド (省略)	書式	説明	
実行	continue (c)	c	停止中のプログラムを再開します。
	next (n)	n	実行する行が関数の場合、関数の中へ入らずに次の行まで実行します。
	step (s)	s	実行する行が関数の場合、関数の中に入って実行します。 ※注: 実行する関数が WideStudio の関数の場合はライブラリがデバッグ対応でないためステップ実行することができません。
中断	break (b)	b <関数名> b <行番号> b <ファイル名>:<行番号>	ブレークポイントを設定します。
変数	display (disp)	disp <変数名>	監視する変数を設定します。 プログラムが停止するたびに値が表示されます。
	print (p)	p <変数名>	変数の値をモニタします。
	set	set <変数名>=<値>	変数の値を変更します。
その他	list (l)	l <行番号> l <関数名>	指定した箇所のソースを 10 行表示します。
	delete (d)	d <ブレークポイント> d <監視中の変数>	指定した番号のブレークポイントや監視中の変数を削除できます。
	info (i)	i breakpoints i local i func	デバッグ中の情報を表示します。他のサブコマンドについては「help info」を参照してください。 breakpoints : 現在、張っているブレークポイントの表示 local : ローカル変数の表示 func : 関数の表示
	quit (q)	q	デバッグを終了します。

3-5 VirtualBox を使用しない開発環境構築方法

本項では、パソコンに直接 Ubuntu 14.04.1 をインストールし、Algonomix4 の開発環境を構築する方法について説明します。

3-5-1 Ubuntu 14.04.1 のインストール

Ubuntu 14.04.1 をインストールするパソコンの推奨スペックを表 3-5-1-1 に示します。

表 3-5-1-1. Ubuntu 14.04.1 インストール必須パソコンスペック

CPU	Pentium4 1GHz 以上
メモリ	256MByte 以上 (512MByte 以上推奨)
HDD 空き領域	8GByte 以上

Algonomix4 では Ubuntu 14.04.1 を使用しています。バージョンが違くと不整合が起こる可能性がありますので、弊社で Algonomix4 を構築するときには使用した、Ubuntu 14.04.1 のインストールディスクを配布します。ネットワークアップデート等は利用しないようにしてください。

下記に示す Ubuntu 14.04.1 のインストール方法はパソコンによって若干変化する可能性があります。基本的には画面の指示通りにインストールしてください。

- ① 「Ubuntu 14.04.1」の DVD-ROM をパソコンに入れ、DVD-ROM から起動します。
DVD-ROM から起動するには、インストールするパソコンの BIOS 設定を行う必要があります。
- ② 正常に DVD-ROM から起動されると、図 3-5-1-1 のようなインストーラの言語選択画面が表示されます。使用する言語を選択して、「Enter」キーを押します。ここでは[日本語]を選択しています。

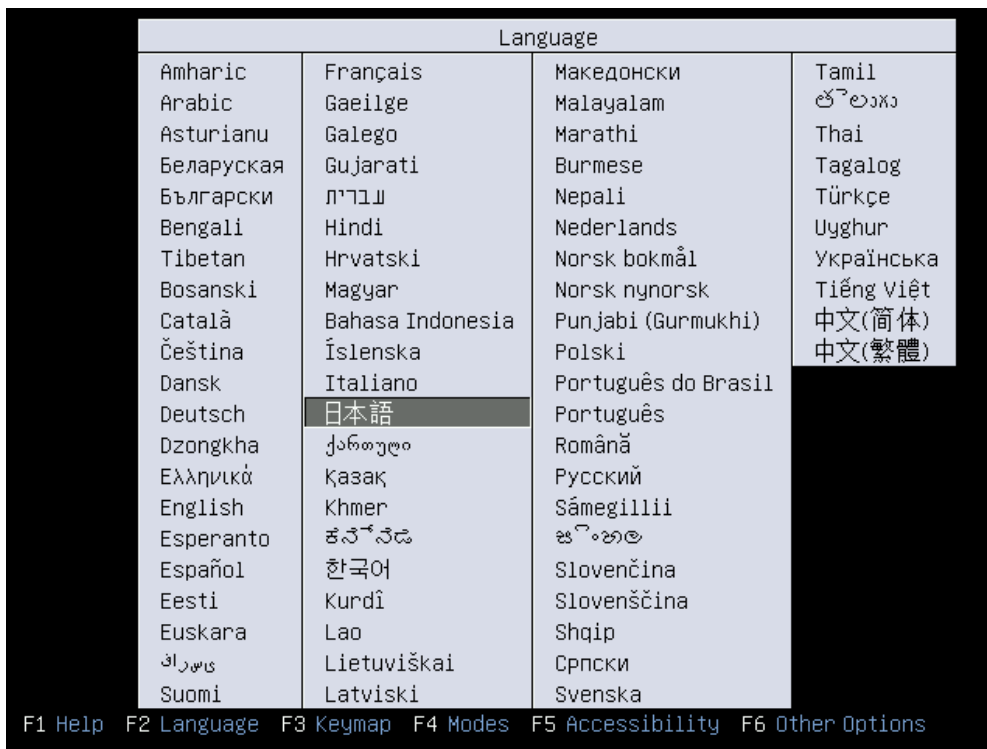


図 3-5-1-1. インストーラの言語選択画面

- ③ 次に、図 3-5-1-2 のような画面が表示されますので、「Lubuntu をインストール」を選択して「Enter」キーを押します。



図 3-5-1-2. 起動メニュー画面

- ④ 図 3-5-1-3 のような言語選択画面が表示されます。ここでは実際にインストールする Lubuntu の言語を選択します。カーソルキーで言語を選んで「Enter」キーを押します。

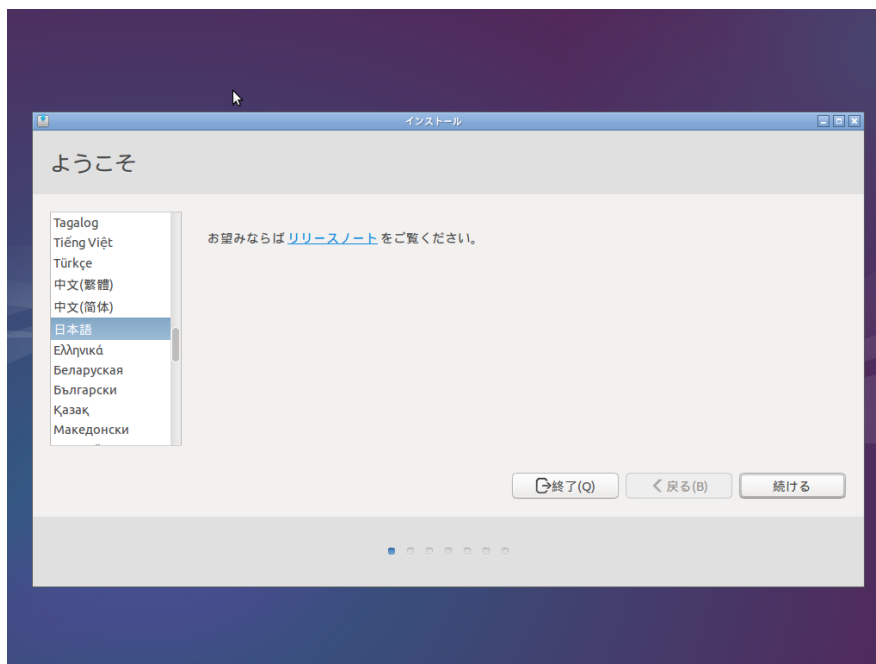


図 3-5-1-3. インストールする Lubuntu の言語選択画面

- ⑤ 図 3-5-1-4 のような画面が表示されます。チェックボックスはどちらもチェックしないで[続ける]をクリックしてください。

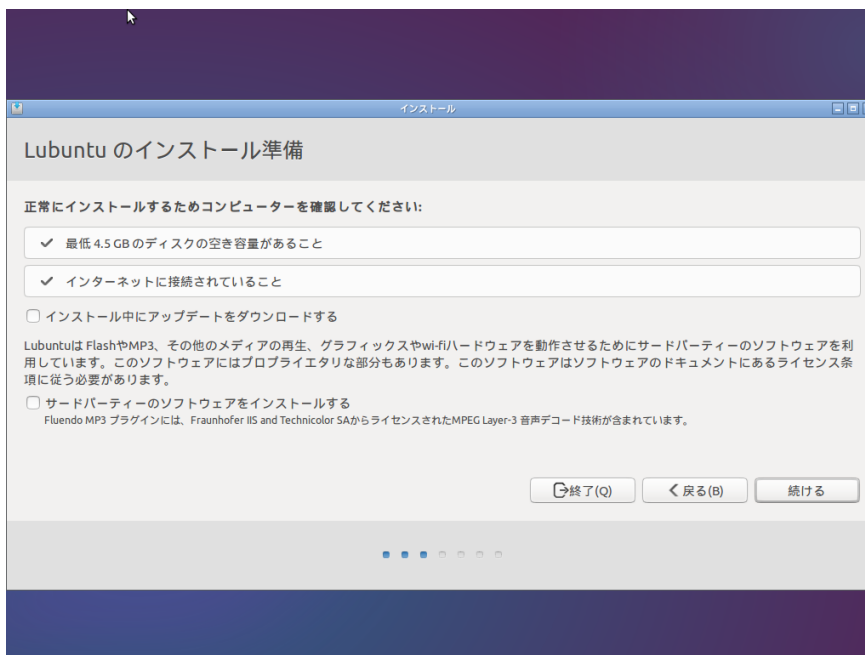


図 3-5-1-4. インストール準備画面

- ⑥ 図 3-5-1-5 のようなディスクのパーティションを設定する画面が表示されます。パーティション分割が不要な場合、そのまま[インストール]をクリックしてください。



図 3-5-1-5. インストール方法選択画面

- ⑦ 図 3-5-1-6 のような地域設定画面が表示されます。[続ける]をクリックしてください。

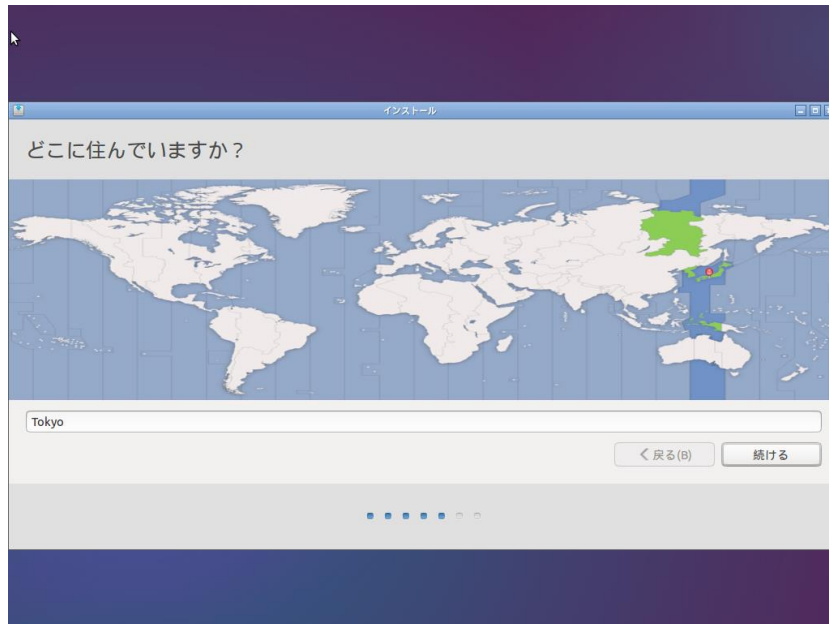


図 3-5-1-6. 地域設定画面

- ⑧ 図 3-5-1-7 のようなキーボードレイアウト設定画面が表示されます。ご使用のキーボードをにあったものを選択して「続ける」をクリックします。

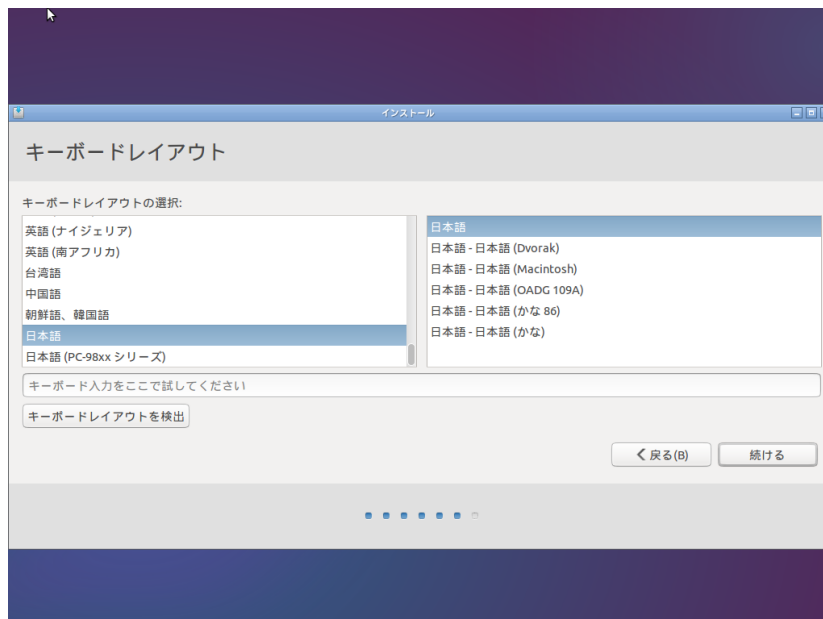


図 3-5-1-7. キーボードレイアウト設定画面

- ⑨ 図 3-5-1-8 のようなユーザ設定画面が表示されます。
必要な情報を入力後、「続ける」をクリックしてください。

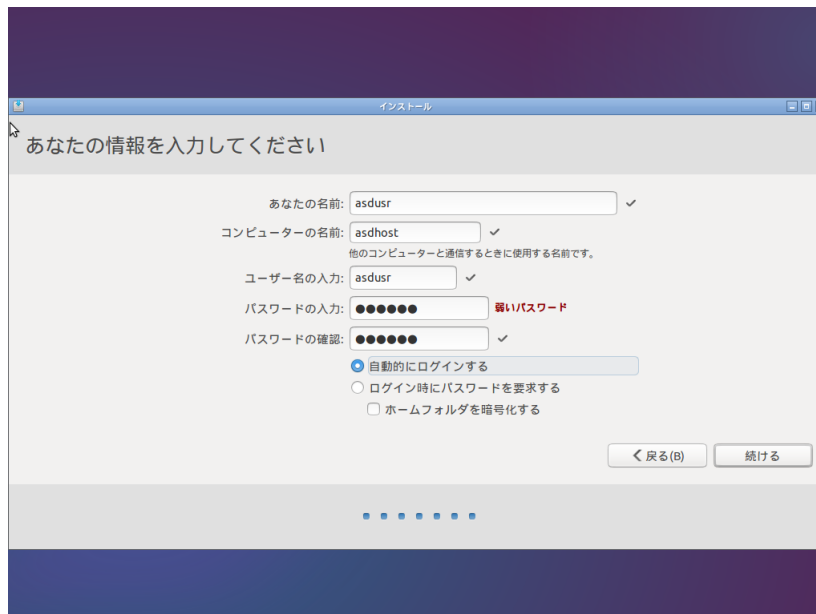


図 3-5-1-8. ユーザ設定画面

- ⑩ 正常にインストールが完了することで、図 3-5-1-9 のような画面が表示されます。DVD-ROM を取り出して「続ける」をクリックしてください。パソコンが再起動します。

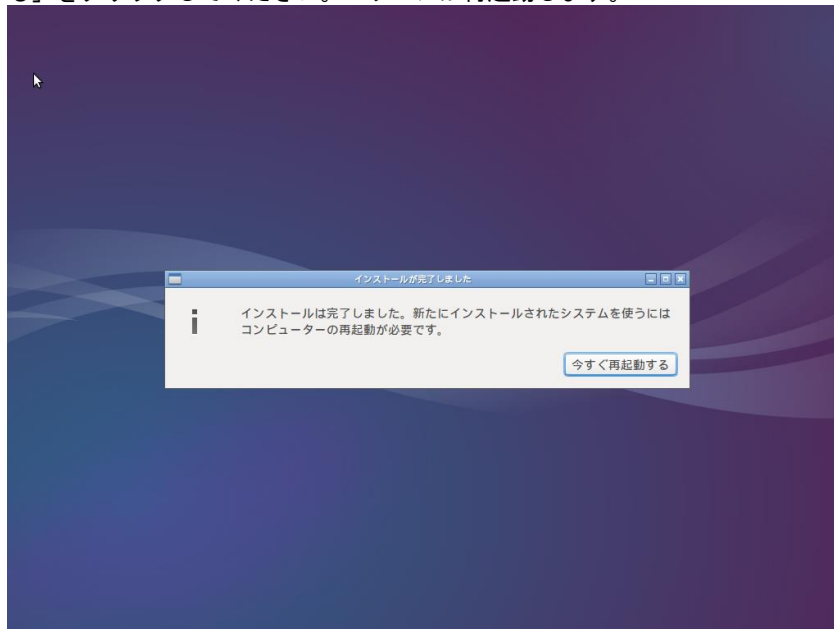


図 3-5-1-9. インストール完了画面

- ⑪ 再起動されると、ユーザ名入力画面が表示されますので、⑨で設定したユーザ名とパスワードを入力してください。(⑨で自動的にログインするを選択していても、初回起動時はパスワードの入力が必要です)

- ⑫ 起動時、図 3-5-1-10 のようなソフトウェアの更新確認メニューが表示された場合、[後で通知する]をクリックしてください。

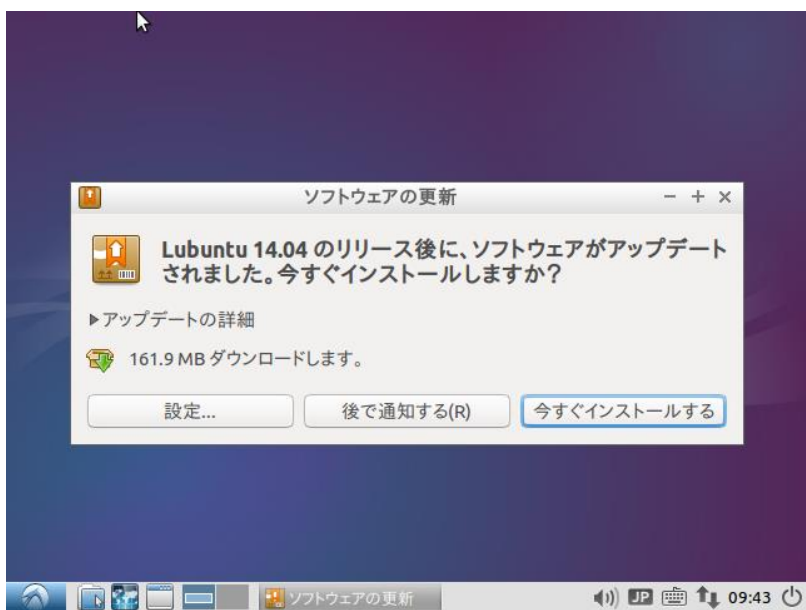


図 3-5-1-10. アップデートタブ

3-5-2 開発環境用追加パッケージインストール

Algonomix4 用の開発環境を構築する為に必要なパッケージをインストールします。

インストールするパッケージ名称とバージョンの一覧を表 3-5-2-1 に示します。

表 3-5-2-1. 追加インストールパッケージ一覧

パッケージ名称	内容	バージョン
ssh	セキュアなシェルクライアントとサーバ	1:6.6p1-2ubuntu2
samba	Windows 共有サーバ	2:4.11.6+dfsg-1ubuntu2.1.4.04.3
kernel-package	Linux カーネルを構築する為のユーティリティ	12.036+nmu3
libncurses5-dev	開発用 NCURSES ライブラリ	5.9+20140118-1ubuntu1
gdb	GNU デバッガ	7.7-0ubuntu3.1
gftp	FTP クライアント	2.0.19-4ubuntu2
libX11-dev	開発用 X11 ライブラリ	2:1.6.2-1ubuntu2
libjpeg62-dev	開発用 JPEG ライブラリ	6b1-4ubuntu1
libpng12-dev	開発用 PNG ライブラリ	1.2.50-1ubuntu2
libxpm-dev	開発用 X11 pixmap ライブラリ	1:3.5.10-1
libxt-dev	開発用 X11 toolkit ライブラリ	1:1.1.4-1
libxft-dev	開発用 X FreeType フォント描画ライブラリ	2.3.1-2
libxext-dev	開発用 X11 拡張ライブラリ	2:1.3.2-1
libperl-dev	開発用 Perl ライブラリ	5.18.2-2ubuntu1
ttf-kochi-gothic	True Type ゴシックフォント	20030809-15
ttf-kochi-mincho	True Type 明朝フォント	20030809-15

- ① 「システム」→「システム管理」→「Synaptic パッケージマネージャ」を選択し、パッケージマネージャを起動します。

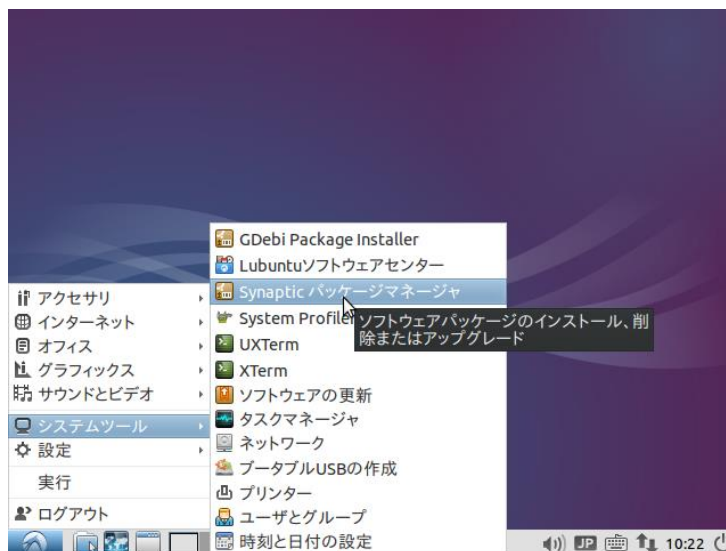


図 3-5-2-1. パッケージマネージャの起動

- ② 最初の起動では、管理者権限パスワードの問い合わせがありますので、Lubuntu 14.04.1 インストール時に設定したパスワードを入力します。

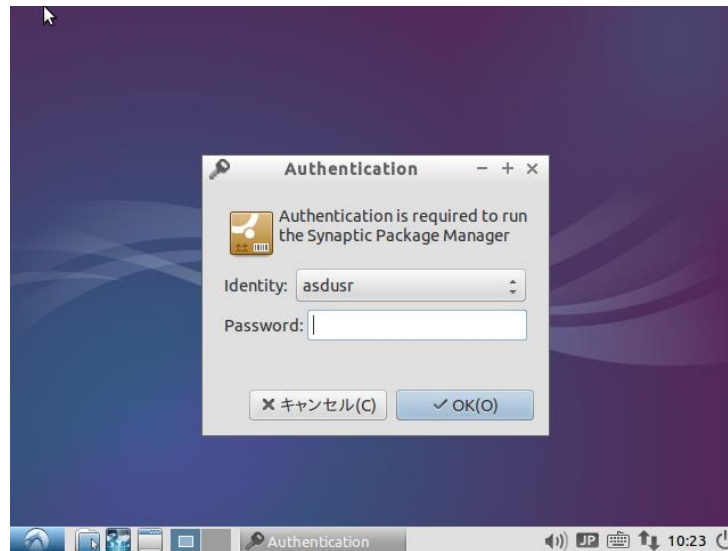


図 3-5-2-2. 管理者権限パスワード入力画面

- ③ 正常に起動されると図 3-5-2-3 のような画面が起動されます。



図 3-5-2-3. Synaptic パッケージマネージャ起動画面

- ④ 表 3-5-2-1 に示したパッケージを順次インストールしてください。「検索」をクリックし、インストールするパッケージ名を検索します。

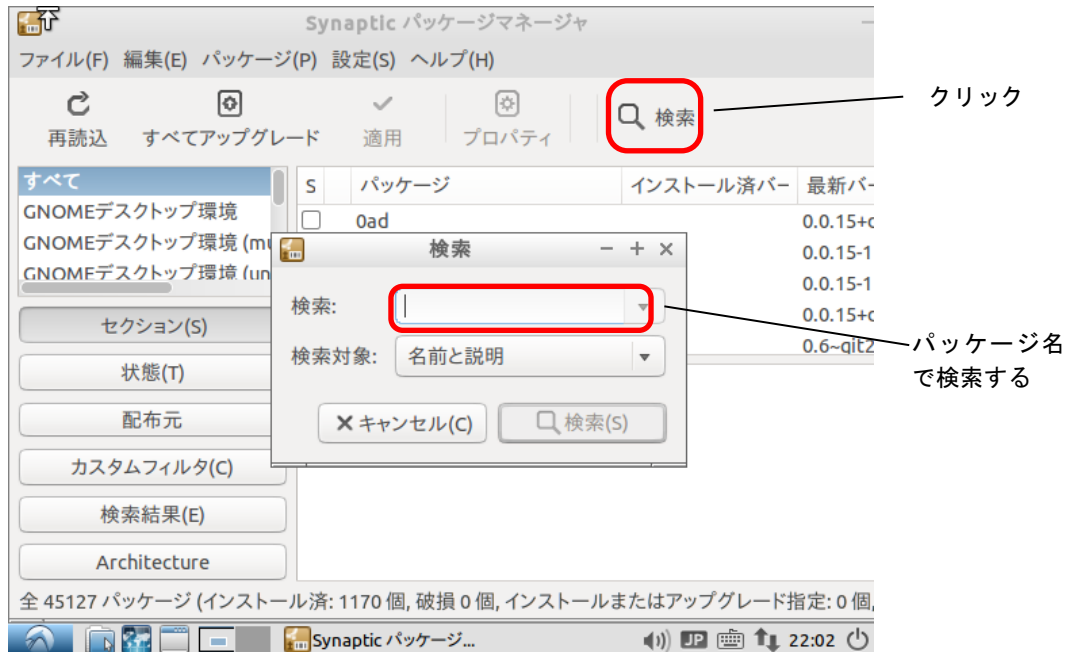


図 3-5-2-4. パッケージの検索

- ⑤ インストールするパッケージ名のチェックボックスをクリックすることで、図 3-5-2-5 のようなメニューが表示されるので「インストール指定」をクリックします。このとき、他にインストールする必要のあるパッケージがある場合は、図 3-5-2-6 のような画面が開きますので「マーク (M)」をクリックします。

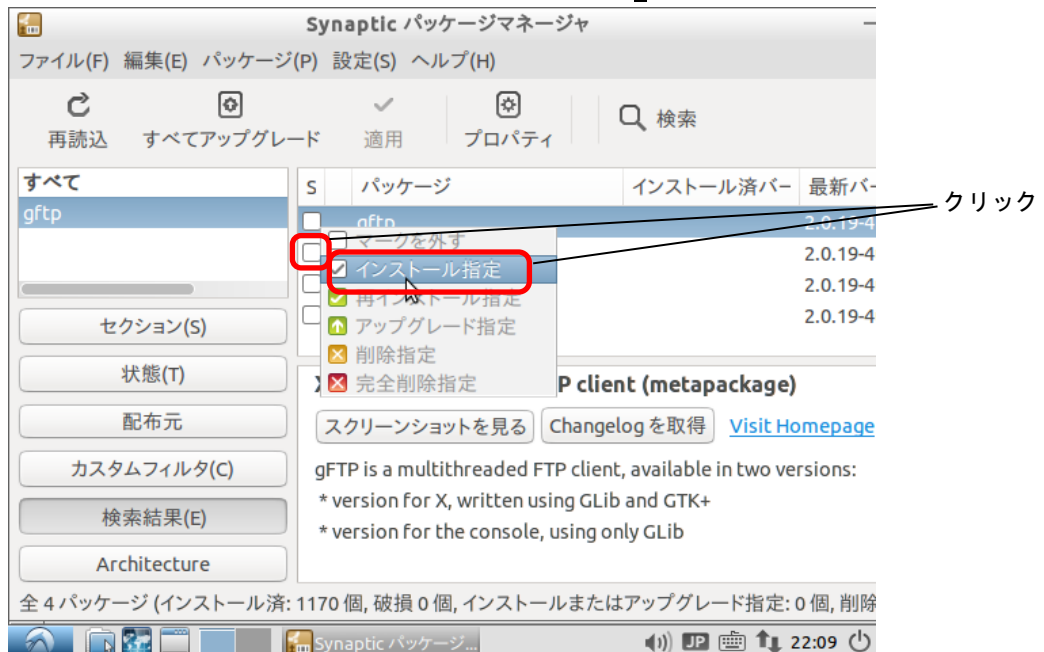


図 3-5-2-5. パッケージ追加インストール確認画面

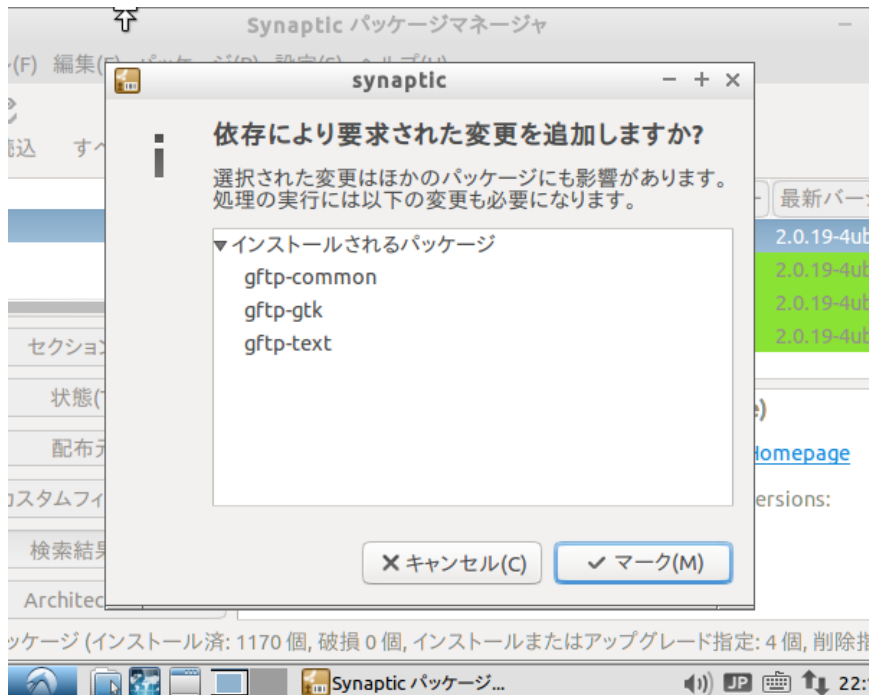


図 3-5-2-6. パッケージ追加インストール確認画面

- ⑥ 「適用」をクリックすることで、インストールが始まります。

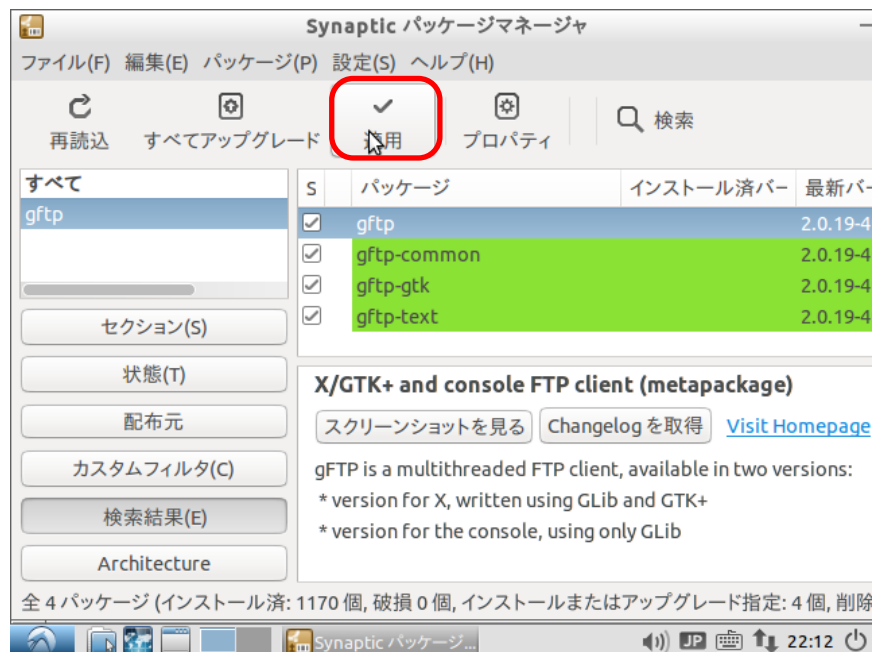


図 3-5-2-7. パッケージ追加画面

- ⑦ ④～⑥を繰り返し、表 3-5-2-1 のすべてのパッケージをインストールしたら再起動してください。

3-5-3 Algonomix4 用開発環境インストール

Lubuntu 14.04.1 に Algonomix4 用の開発環境をインストールします。Algonomix4 用開発環境 DVD-ROM に格納されている、「Algonomix4-tools-0010.tar.gz」を展開することでインストールされます。

インストールされるパッケージの内容については『3-2-7 Algonomix4 用開発環境のディレクトリ構成について』を参照してください。

- ① Algonomix4 用開発環境 DVD-ROM をパソコンにセットします。しばらくすると、デスクトップ上に CD-ROM ドライブのアイコンが表示され、内容が表示されます。
- ② コンソールを起動し、下記のコマンドを実行します。

```
$ sudo su
パスワード : asdusr ←インストール時に設定したパスワード
# tar zxvf /media/asdusr/デバイス名/development/Algonomix4-tools-0010.tar.gz -C /
```

これで、Algonomix4 用の開発環境一式が展開されます。パソコンスペックにもよりますが、展開終了までに数十分程度かかります。

- ③ 正常に展開が終了されると「/usr/local/tools-0010」というディレクトリが作成されます。
- ④ WideStudio をインストールします。下記のようにコマンドを実行してください。

```
# cd /usr/local/tools-0010/src/widestudio/ws-v3.98-6/src
# make install
# ldconfig
```

- ⑤ WideStudio 実行用スクリプトをコピーします。

```
# cp /usr/local/tools-0010/src/widestudio/wsstart.sh /usr/local/bin
```

- ⑥ デスクトップ画面に WideStudio 実行用スクリプトのショートカットを登録します。

```
# ln -s /usr/local/bin/wsstart.sh /home/asdusr/デスクトップ/WideStudio
```

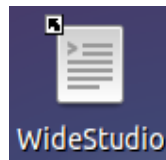


図 3-5-3-1. WideStudio 起動ショートカット

- ⑦ ダブルクリックして WideStudio が起動されることを確認してください。最後に WideStudio の環境設定を行います。「オプション(O)」→「環境設定(E)」をクリックしてください。

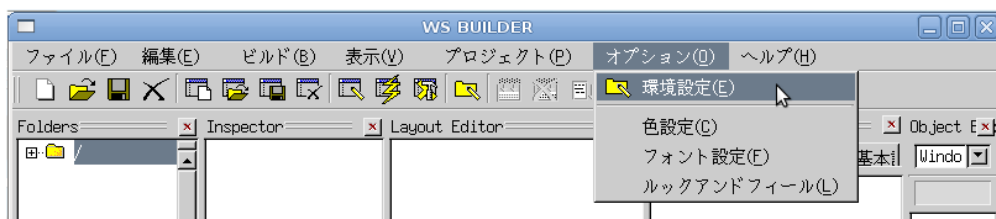


図 3-5-3-2. WideStudio の環境設定

- ⑧ 変更するべき箇所は表 3-5-3-1 に書かれた 4 カ所です。

表 3-5-3-1. WideStudio 環境設定項目

タブ	設定項目	設定値
環境設定	ターミナル	LXTerminal
	エディタ	leafpad
	Web ブラウザ	firefox

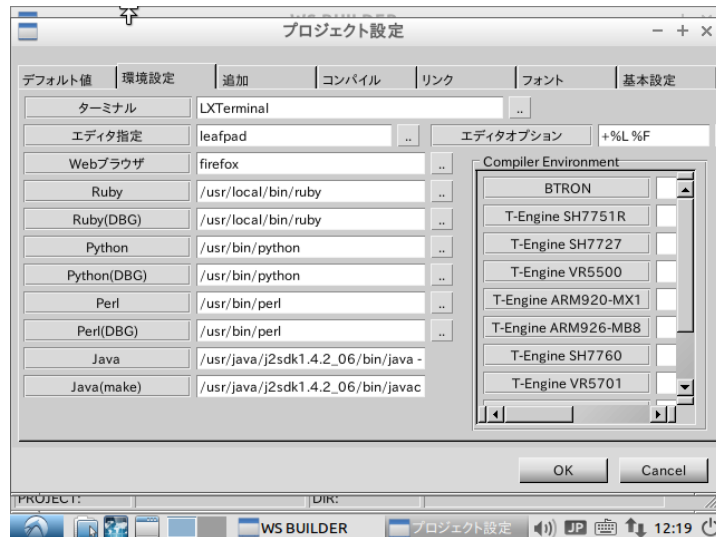


図 3-5-3-3. WideStudio の環境設定画面

3-5-4 パッケージ更新の停止

Algonimix4 および Algonimix4 開発環境では、Lubuntu14.04.1 の基本パッケージと本書に記載したパッケージが入った環境でのみ動作を確認しています。意図しない動作を防ぐため、インターネットからのパッケージの追加に制限をかけます。

- ① 図 3-5-4-1 のように[メニューアイコン]→[設定]→[ソフトウェアとアップデート]を選択して、設定アプリケーションを起動します。

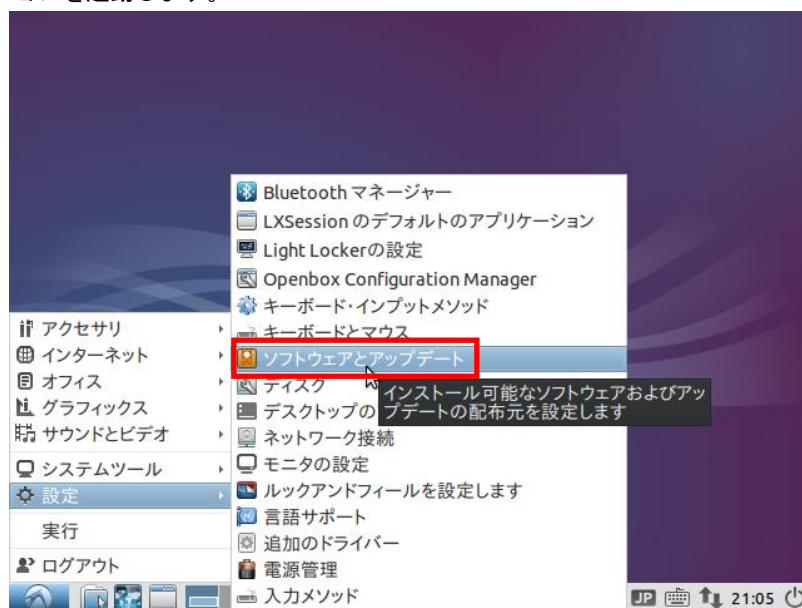


図 3-5-4-1. [ソフトウェアとアップデート]の起動

- ② [Ubuntu のソフトウェア]タブ、[他のソフトウェア]タブ、[アップデート]タブを表示し、図 3-5-4-2 のようにチェックボックスを全て消し、[アップデートの自動確認]をなしに、Ubuntu の新バージョンの通知をなしにします。

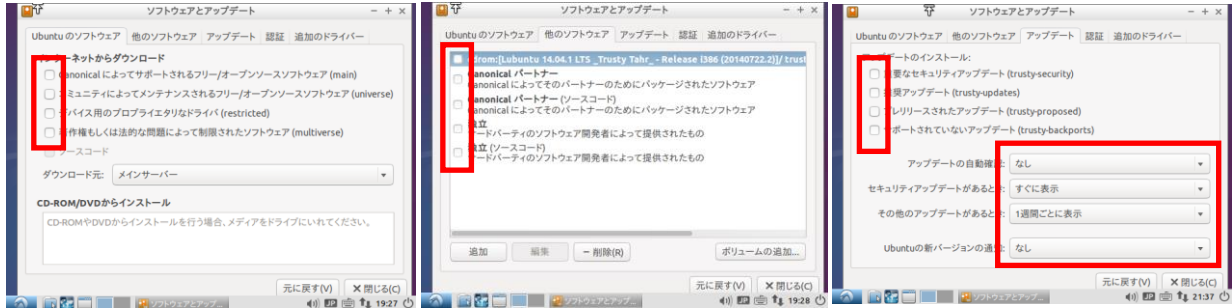


図 3-5-4-2. ソフトウェアとアップデートの設定

- ③ 図 3-5-5-3 のような確認画面が表示されます。[再読込]をクリックしてください。

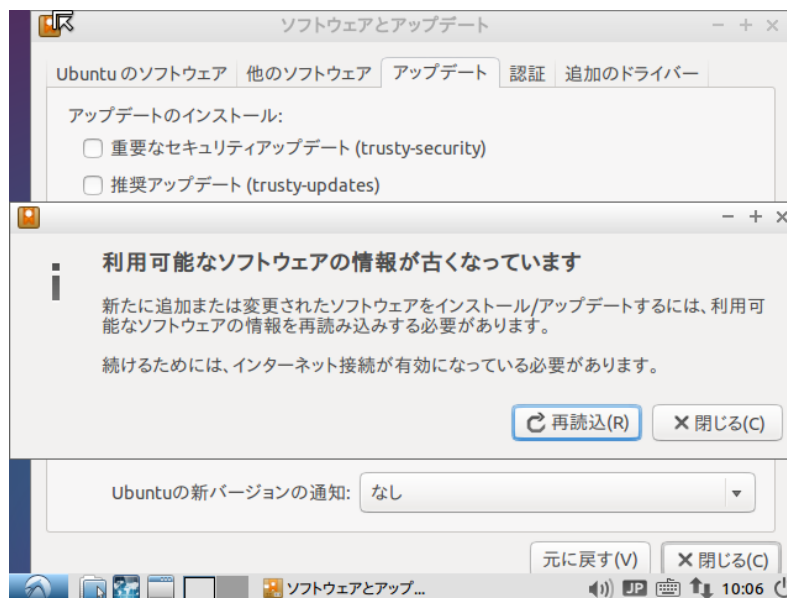


図 3-5-4-3. 確認画面

以上でパソコン上に Algonomix4 開発環境が構築されました。使用方法については、本書の開発環境の章を参照してください。

3-6 パッケージについて

Algonomix4 および Algonomix4 開発環境では、Lubuntu14.04.1 の基本パッケージと本書に表記したパッケージが入った環境でのみ動作を確認しています。

そのため、インターネットからのパッケージの追加に制限をかけています。

以下にパッケージをさらに追加したい場合の制限の解除方法を示しますが、設定を変更してパッケージを追加された場合、動作の保証は致しかねますので、あらかじめご了承くださいようお願い申し上げます。

Algonomix4 では、リポジトリを無効にすることでパッケージのインストールに制限をかけています。制限の解除方法としては、`/etc/apt/sources.list` を直接編集する方法と、設定用アプリケーションにて間接的に編集する方法があります。ここでは、後者を紹介します。

- ① [メニューアイコン]→[設定]→[ソフトウェアとアップデート]を選択します。

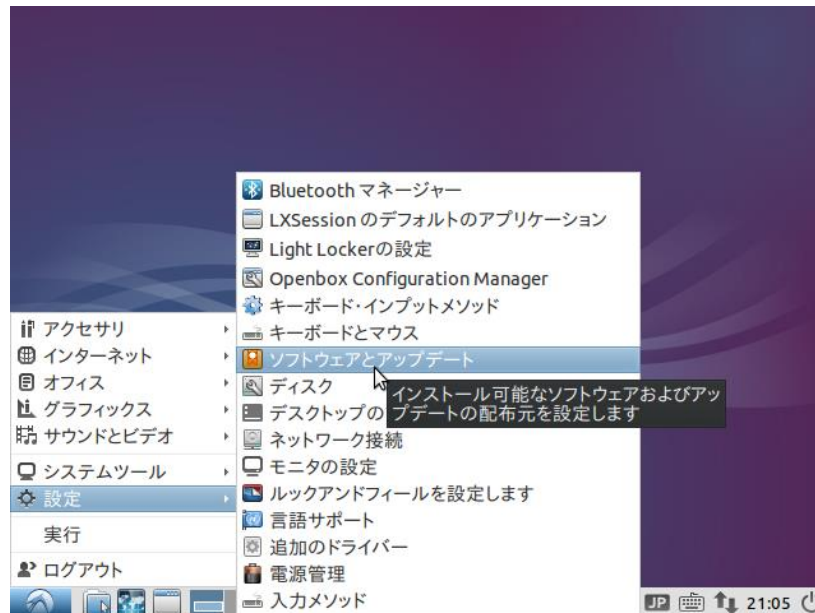


図 3-6-1. ソフトウェアとアップデート設定画面の起動

② [Ubuntu のソフトウェア] タブや [アップデート] タブで許可したい項目にチェックを入れてください。一回目のチェックの時のみ図 3-6-2 のような認証を要求されます。パスワードを入れて [OK] を押してください。

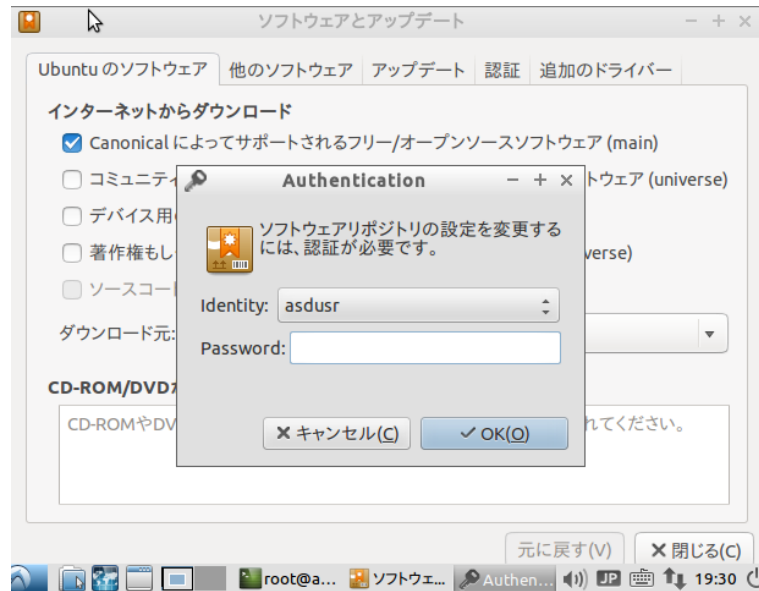


図 3-6-2. ソフトウェアとアップデート設定画面

第4章 産業用パネル PC AP シリーズについて

本章では、AP シリーズに実装されているデバイスの使用方法およびアプリケーション作成について説明しています。

Algonomix4 開発環境には、コンソール用と WideStudio 用の 2 種類のサンプルプログラムのソースコードを用意しています。それぞれ表 4-1 にコンソール用サンプル、表 4-2 に WideStudio 用サンプルのディレクトリ名と内容を示します。

コンソール用サンプルプログラムは、コンソール上で「make」コマンドを実行することでコンパイルします。WideStudio 用のサンプルプログラムは、WideStudio を起動して、プロジェクトファイルをオープンしコンパイルします。コンパイル方法は『第3章 開発環境』を参照してください。

※注：コンソール用サンプルプログラムは「/usr/local/tools-0010/samples/sampleConsole」に、WideStudio 用サンプルプログラムは「/usr/local/tools-0010/samples/sampleWideStudio」に格納されています。

※注：一部のサンプルでは、AP シリーズにデバイスが実装されていない為動作しないことがあります。

表 4-1. コンソール用サンプルプログラムのソースコード一覧

ディレクトリ名	内容	機能有無
sample_DIO	汎用入出力制御方法	『4-1 汎用入出力』を参照
sample_SerialPortChange	シリアルポート RS422/R485/RS232C 切り替え	『4-2 シリアルポート』を参照
sample_Serial	シリアルポート制御方法	『4-2 シリアルポート』を参照
sample_TcpIp	ネットワークポート制御方法	『4-3 ネットワークポート』を参照
sample_BeepOnOff	ブザーON/OFF 制御方法	—
sample_Reset	汎用入力 IN0 リセット制御方法	『4-4 RAS 機能』を参照
sample_Interrupt	汎用入力 IN1 割込み制御	『4-4 RAS 機能』を参照
sample_SRAM	バックアップ SRAM 制御方法 (read/write)	『4-4 RAS 機能』を参照
sample_HwWdtKeepAlive	ハードウェア・ウォッチドッグタイマ操作	『4-4 RAS 機能』を参照
sample_HwWdtEventWait	ハードウェア・ウォッチドッグタイマイベント待ち	『4-4 RAS 機能』を参照
sample_Timer	汎用タイマ割込み制御	『4-5 タイマ割込み機能』を参照
sample_InputKey	入力されたキーコードの表示	—

表 4-2. WideStudio 用サンプルプログラムのソースコード一覧

ディレクトリ名	内容	機能有無
sample_GenIO	汎用入出力制御方法	『4-1 汎用入出力』を参照
sample_Sio	シリアルポート制御方法	『4-2 シリアルポート』を参照
sample_Lan	ネットワークポート制御方法	『4-3 ネットワークポート』を参照
sample_MultiLang	多言語表示	『4-6 その他のサンプルプログラム』を参照
sample_10Key	10 キー入力画面	『4-6 その他のサンプルプログラム』を参照
sample_Launcher	起動ランチャー	『4-6 その他のサンプルプログラム』を参照
sample_ColorPalette	カラーパレット画面	『4-6 その他のサンプルプログラム』を参照
sample_JapaneseInsert	日本語入力制御	『4-6 その他のサンプルプログラム』を参照
sample_Gui	hello サンプル	『3-3 WideStudio/MWT による77アプリケーション開発』を参照

固有デバイスの説明の前に、Linux の一般的なデバイスドライバアクセスについて説明します。デバイスにアクセスするには「/dev」以下に格納されているデバイスファイルに対しシステムコール (open、close、read、write、ioctl 等) を使用します。

デバイスドライバ操作は、デバイスファイルを「open」関数にてオープンし、「read」関数や「write」関数を使用してデータを読み書きします。デバイスによっては、「ioctl」関数で各種設定を行う場合もあります。また、デバイスによっては、独自のシステムコールが用意される場合もあります。

デバイス毎にどのような設定があるかは、インターネットや書籍で確認してください。ここでは、AP シリーズに搭載されたデバイスの仕様について説明します。

AP シリーズ本体の外形図を図 4-1 に示します。各部名称を表 4-3 に示します。

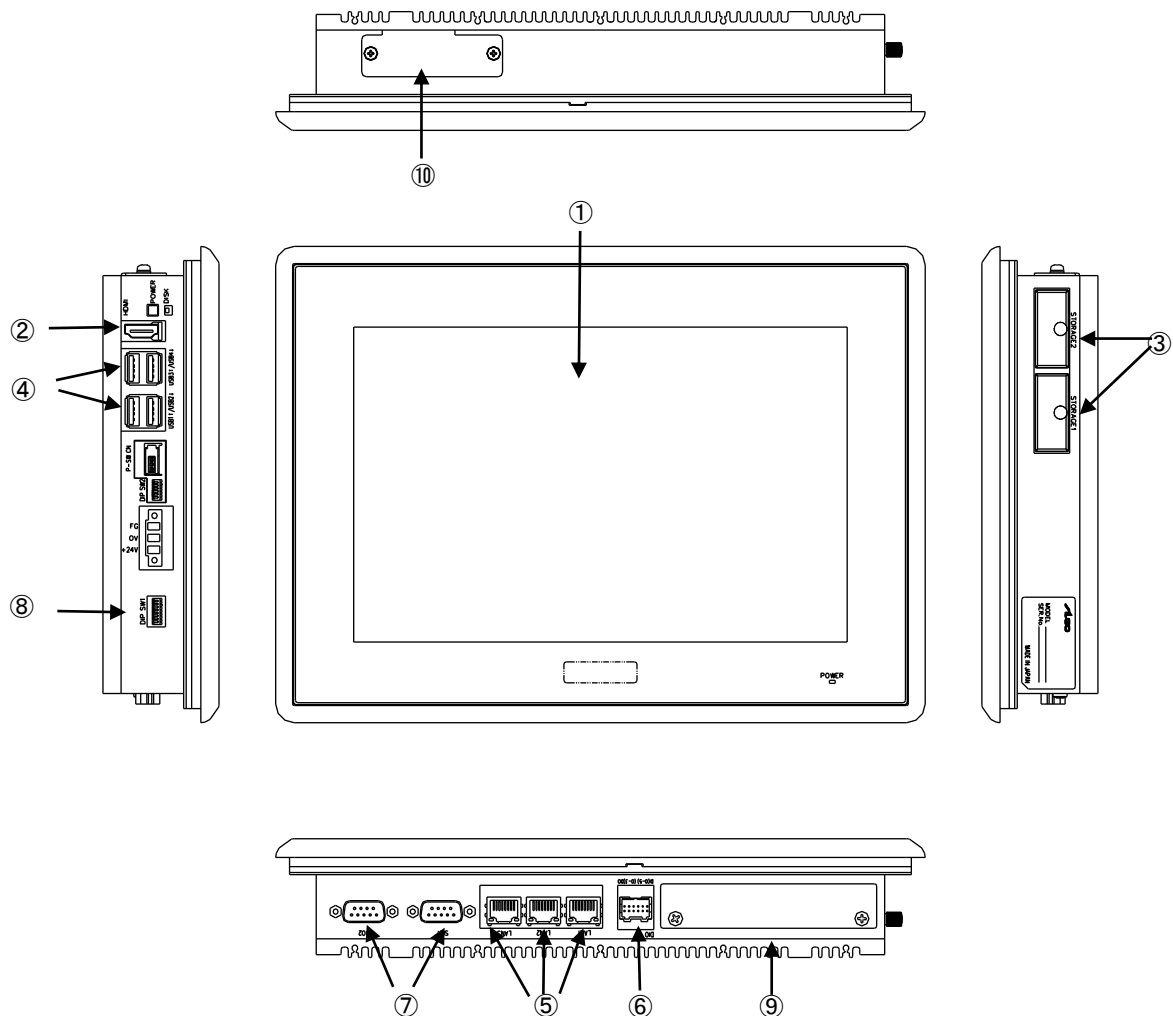


図 4-1. 外形図 (AP4-101AN)

表 4-3. 各部名称

No.	名称	機能	説明
①	液晶・タッチパネル	グラフィック タッチパネル	画面表示を行います。 タッチパネルはポインティングデバイスとして使用できます。
②	HDMI インターフェース	グラフィック サウンド	外部モニタに画面、音声を出力できます。
③	mSATA スロット	mSATA SSD	記憶領域として mSATA SSD を使用することができます。 mSATA1: メインストレージ ルートファイルシステムとして使用します。 mSATA2: サブストレージ オプションでデータ領域を追加することができます。
④	USB インターフェース	USB ポート	USB1.1/2.0 の機器を接続することができます。
⑤	ネットワーク インターフェース	有線 LAN	ネットワークポートとして使用できます。
⑥	DIO インターフェース	汎用入出力	汎用の入出力です。 入力 6 点、出力 4 点を制御できます。
⑦	シリアル インターフェース	シリアルポート	シリアル通信が行えます。 SI01、SI02 は、シリアルポート設定スイッチと組込みシステム機能のシリアルコントロール機能と併用することで、232C/422/485 の通信を行うことができます。 SI01: ttyS1 SI02: ttyS2
⑧	シリアルポート 設定スイッチ	シリアルポート タイプ設定	SI01、SI02 のシリアルポートタイプを設定します。 シリアルポート設定スイッチと組込みシステム機能のシリアルコントロール機能を使用することで、SI01、SI02 で 232C/422/485 の通信を行うことができます。 設定方法は、「ユーザズ（ハードウェア）マニュアル」を参照してください。 ※シリアルポートタイプを切替える場合は、シリアルコントロール機能の設定に合わせて、シリアルポート設定スイッチを設定してください。
⑨	内蔵拡張インターフェース	専用拡張機能	オプションの専用拡張基板を接続できます。
⑩	バックアップバッテリー	バックアップバッテリー	BIOS 設定、RTC、外部 RTC、SRAM のデータを保持するためのバックアップバッテリーが接続されています。

4-1 汎用入出力

4-1-1 汎用入出力について

AP シリーズでは出力 4 点、入力 6 点を使用することができます。これらの入出力を使用することにより外部 I/O 機器を制御することが可能です。

4-1-2 汎用入出力デバイスドライバについて

入力用のデバイスファイル (/dev/genin) と出力用のデバイスファイル (/dev/genout) に分かれています。キャラクタデバイス方式で入出力の状態を読み書きします。

表 4-1-2-1 に汎用入出力のリファレンスを示します。

表 4-1-2-1. 汎用入出力デバイスリファレンス

GENIN, GENOUT																																					
名前	genin - 汎用入力6点 genout - 汎用出力4点																																				
説明	汎用入力6点の状態読み出しと、汎用出力4点の制御を行います。																																				
OPEN	汎用入力デバイス (/dev/genin, /dev/genout) を open 関数でオープンします。 <pre>infd = open("/dev/genin", 0_RDWR); outfs = open("/dev/genout", 0_RDWR);</pre>																																				
READ	read 関数を用いて汎用入出力の状態をモニタすることができます。 <pre>char in; char out; len = read(infs, &in, 1); len = read(outfs, &out, 1);</pre> <p>汎用入出力デバイスをリードすると 1Byte のデータが即リターンされます。リターンされた値は現在の入出力状態です。</p> <table border="1" style="margin: 10px auto;"> <tr> <td>bit</td><td>7</td><td>6</td><td>5</td><td>4</td><td>3</td><td>2</td><td>1</td><td>0</td> </tr> <tr> <td>IN</td><td>/</td><td>/</td><td>IN6</td><td>IN5</td><td>IN4</td><td>IN3</td><td>IN2</td><td>IN1</td> </tr> </table> <table border="1" style="margin: 10px auto;"> <tr> <td>bit</td><td>7</td><td>6</td><td>5</td><td>4</td><td>3</td><td>2</td><td>1</td><td>0</td> </tr> <tr> <td>OUT</td><td>/</td><td>/</td><td>/</td><td>/</td><td>OT4</td><td>OT3</td><td>OT2</td><td>OT1</td> </tr> </table>	bit	7	6	5	4	3	2	1	0	IN	/	/	IN6	IN5	IN4	IN3	IN2	IN1	bit	7	6	5	4	3	2	1	0	OUT	/	/	/	/	OT4	OT3	OT2	OT1
bit	7	6	5	4	3	2	1	0																													
IN	/	/	IN6	IN5	IN4	IN3	IN2	IN1																													
bit	7	6	5	4	3	2	1	0																													
OUT	/	/	/	/	OT4	OT3	OT2	OT1																													
WRITE	write 関数を用いて汎用出力を制御することができます。 <pre>char out; out = 1; len = write(outfd, &out, 1);</pre> <p>汎用出力データを 1Byte ライトすることで対応するビットの出力を ON/OFF することができます。</p> <table border="1" style="margin: 10px auto;"> <tr> <td>bit</td><td>7</td><td>6</td><td>5</td><td>4</td><td>3</td><td>2</td><td>1</td><td>0</td> </tr> <tr> <td>OUT</td><td>/</td><td>/</td><td>/</td><td>/</td><td>OT4</td><td>OT3</td><td>OT2</td><td>OT1</td> </tr> </table>	bit	7	6	5	4	3	2	1	0	OUT	/	/	/	/	OT4	OT3	OT2	OT1																		
bit	7	6	5	4	3	2	1	0																													
OUT	/	/	/	/	OT4	OT3	OT2	OT1																													

4-1-3 汎用入出力サンプルプログラム

●WideStudio 用サンプルプログラム

「/usr/local/tools-0010/samples/sampleWideStudio/sample_GenIO」に、汎用入出力を使ったサンプルプログラムが入っています。

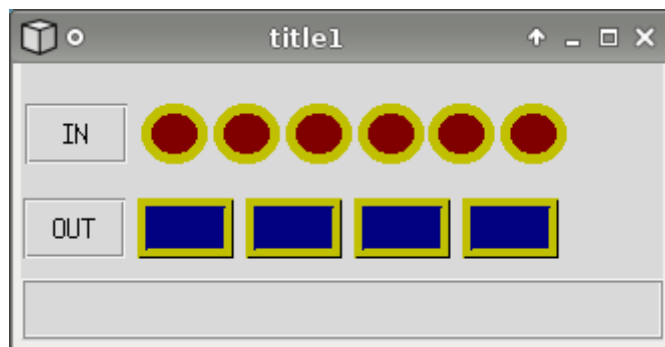


図 4-1-3-1. 汎用入出力デバイス制御サンプルプログラム起動画面

このサンプルプログラムは、スレッド内で汎用入力状態を監視し、入力状態によって IN の色を変化させます。また、OUT のボタンを押下することで、汎用出力が ON/OFF します。

汎用入出力デバイスのオープンとスレッドの生成を記したコードをリスト 4-1-3-1 に示します。

Main_Init 関数は、メインウィンドウの「Initialize」イベントで実行されるように設定されています。この中で、「open」関数を使用し、汎用入力のデバイスファイル「/dev/genin」と汎用出力のデバイスファイル「/dev/genout」をリードライトモードでオープンします。汎用入出力デバイスをリードライトすることで汎用入出力を制御することができます。

また、汎用入力の状態をモニタする為にスレッドを生成しています。

リスト 4-1-3-1. 汎用入出力デバイスのオープンとスレッドの生成 (Main_Init.cpp)

```
#include <stdio.h>
#include <stdlib.h>
#include <string.h>
#include <sys/types.h>
#include <sys/stat.h>
#include <sys/ioctl.h>
#include <termios.h>
#include <pthread.h>
#include <fcntl.h>
#include <unistd.h>
#include <errno.h>

#include <WScom.h>
#include <WSCfunctionList.h>
#include <WSCbase.h>

#include "newwin000.h"
#include "IOThread.h"

//-----
//Function for the event procedure
//-----
```

```

void Main_Init(WSCbase* object) {
unsigned char data;

    /*汎用出力デバイスオープン*/
    out_fd = open("/dev/genout", O_RDWR); //汎用出力デバイスオープン
    if(out_fd < 0) { //エラー処理
        Status_Bar->setProperty(WSNlabelString, "OUT Device Open Error");
        return;
    }
    data = 0;
    write(out_fd, &data, 1); //初期 0 出力

    /*汎用入力デバイスオープン*/
    in_fd = open("/dev/genin", O_RDWR); //汎用入力デバイスオープン
    if(in_fd < 0) { //エラー処理
        Status_Bar->setProperty(WSNlabelString, "IN Device Open Error");
        close(out_fd);
        return;
    }

    /*スレッドの生成*/
    ioctrl_thr = 0;
    ioctrl_thr = WSDthread::getNewInstance(); //スレッドインスタンス取得
    ioctrl_thr->setFunction(Ioctrl_Thread); //スレッド本体関数を設定
    ioctrl_thr->setCallbackFunction(Io_callback_func); //コールバック関数を設定
    ioctrl_thr->createThread((void*)0); //スレッドを生成
}
static WSCfunctionRegister op("Main_Init", (void*)Main_Init);

```

リスト 4-1-3-2 に汎用入力をモニタするスレッド本体とコールバック関数のソースコードを示します。汎用入力デバイスを「read」関数を使い、1 バイトリードすることで、現在の汎用入力の状態を読み出すことができます。汎用入力デバイスは、「read」関数を実行されたら、遅延せずに即時に ON/OFF 状態を返します。このサンプルプログラムのソースコードでは、汎用入力の状態が変化したときのみコールバック関数を呼び出し画面の状態を変化させています。

リスト 4-1-3-2. 汎用入カスレッドのソースコード (IOThread.cpp)

```

#include <stdio.h>
#include <stdlib.h>
#include <string.h>
#include <sys/types.h>
#include <sys/stat.h>
#include <sys/ioctl.h>
#include <termios.h>
#include <pthread.h>
#include <fcntl.h>
#include <unistd.h>
#include <errno.h>
#include <math.h>

#include <WSCom.h>
#include <WSCfunctionList.h>
#include <WSCbase.h>

```

```
#include "newwin000.h"
#include "IOThread.h"

int in_fd;
int out_fd;
WSDthread* ioctlr_thr;
unsigned char o_data;

void *Ioctlr_Thread(WSDthread* obj, void *arg)
{
    int len;
    unsigned char data;
    o_data = data = 0;
    int i;
    i = 0;
    for (;;) {
        len = read(in_fd, &data, 1); /*汎用入力読みだし*/
        data &= 0x3F;
        if (len==1) {
            if (o_data != data) {
                o_data = data;
                obj->execCallback((void*)data);
            }
        }
    }
    return(NULL);
}

/*スレッドから通知され、メインスレッドで実行されるコールバック関数*/
void Io_callback_func(WSDthread *, void *val)
{
    unsigned char data;

    data = (unsigned char)(unsigned long)val;
    if (data & 0x01) { /*入力 1*/
        newvarc_000->setPropertyV(WSNhatchColor, "#FF0000");
    }
    else {
        newvarc_000->setPropertyV(WSNhatchColor, "#800000");
    }
    if (data & 0x02) { /*入力 2*/
        newvarc_001->setPropertyV(WSNhatchColor, "#FF0000");
    }
    else {
        newvarc_001->setPropertyV(WSNhatchColor, "#800000");
    }
    if (data & 0x04) { /*入力 3*/
        newvarc_002->setPropertyV(WSNhatchColor, "#FF0000");
    }
    else {
        newvarc_002->setPropertyV(WSNhatchColor, "#800000");
    }
}
```

```

}
if(data & 0x08) { /*入力 4*/
    newvarc_003->setPropertyV (WSNhatchColor, "#FF0000");
}
else{
    newvarc_003->setPropertyV (WSNhatchColor, "#800000");
}
if(data & 0x10) { /*入力 5*/
    newvarc_004->setPropertyV (WSNhatchColor, "#FF0000");
}
else{
    newvarc_004->setPropertyV (WSNhatchColor, "#800000");
}
if(data & 0x20) { /*入力 6*/
    newvarc_005->setPropertyV (WSNhatchColor, "#FF0000");
}
else{
    newvarc_005->setPropertyV (WSNhatchColor, "#800000");
}
}
}

```

汎用出力を制御するソースコードをリスト 4-1-3-3 に示します。

メインウィンドウに配置したボタンに「Activate」イベントのプロシージャを作成します。その中で、汎用出力デバイスを「read」関数で現在の状態を読み込み、新しい状態に変更し「write」関数でデータを更新します。これでボタンが押下されるたびに汎用出力の状態が切り替わります。

リスト 4-1-3-3. 汎用出力 ON/OFF のソースコード (Btn_Click.cpp)

```

#include <stdio.h>
#include <stdlib.h>
#include <string.h>
#include <sys/types.h>
#include <sys/stat.h>
#include <sys/ioctl.h>
#include <termios.h>
#include <pthread.h>
#include <fcntl.h>
#include <unistd.h>
#include <errno.h>

#include <WScom.h>
#include <WSCfunctionList.h>
#include <WSCbase.h>

#include "newwin000.h"
#include "IOThread.h"

int btn[4]={0, 0, 0, 0};
//-----
//Function for the event procedure
//-----
void Btn_Click(WSCbase* object) {
    int len;

```

```

unsigned char data;
long code;

code = object->getProperty(WSNuserValue);           //押されたボタン番号を取得
len = read(out_fd, &data, 1);                       //汎用出力の出力値取得
if(len==1) {
    if(btn[code]) {
        data &= (~(0x0001 << code));                //出力 OFF
        object->setProperty(WSNbackColor, "#000080");
        btn[code] = 0;
    }
    else{
        data |= (0x0001 << code);                    //出力 ON
        object->setProperty(WSNbackColor, "#0000FF");
        btn[code] = 1;
    }
    len = write(out_fd, &data, 1);                  //汎用出力更新
}
}
static WSCfunctionRegister op("Btn_Click", (void*)Btn_Click);

```

●コンソール用サンプルプログラム

「/usr/local/tools-0010/samples/sampleConsole/sample_DIO」に、汎用入出力を使ったサンプルプログラムが入っています。コンソールウィンドウを起動して、コンパイルしたコマンドを実行します。ソースコードをリスト 4-1-3-4 に示します。

まず、「open」関数で「/dev/genout」と「/dev/genin」をリードライトモードで開きます。汎用入出力には設定すべきモードは存在しない為、これでリード/ライトすることができます。

汎用入力デバイスを読み出すとき、1Byte 読み出すことができます。汎用入力の「read」関数は遅延せずに、汎用入力の ON/OFF 状態を即時に返します。サンプルプログラムのソースコードでは、前回値と比較して変化があったときのみコールバック関数を実行しています。

このサンプルプログラムを実行することで、汎用出力を順番に ON していき、現在の汎用入力の値をコンソール上に表示して終了します。

リスト 4-1-3-4. 汎用入出力 ON/OFF のソースコード (main.c)

```

/**
 汎用入出力制御サンプルプログラムのソースコード
**/
#include <fcntl.h>
#include <errno.h>
#include <stdio.h>
#include <string.h>
#include <sys/types.h>
#include <sys/stat.h>
#include <unistd.h>

int main(int argc, char *argv[])
{
    int          i;
    int          err_no;
    int          outfd;
    int          infd;

```

```
unsigned char  outdata=0x01;
unsigned char  indata=0x00;
ssize_t        len;

/* 汎用出力デバイスのオープン */
outfd = open("/dev/genout", O_RDWR); /* 汎用出力デバイスオープン */
if (outfd == -1) { /* エラー処理 */
    err_no = errno;
    fprintf(stderr, "out device open: %s\n", strerror(err_no));
    return(-1);
}

/* 汎用入力デバイスのオープン */
infd = open("/dev/genin", O_RDONLY); /* 汎用入力デバイスオープン */
if (infd == -1) { /* エラー処理 */
    close(infd);
    err_no = errno;
    fprintf(stderr, "out device open: %s\n", strerror(err_no));
    return (-1);
}

/* 汎用出力
   汎用出力の 4 点を 1 点ずつ出力します。
*/
for (i=0; i<4; i++) {
    len = write(outfd, &outdata, 1); /* 汎用出力更新 */
    if (len == -1) {
        err_no = errno;
        fprintf(stderr, "out device write: %s\n", strerror(err_no));
        /* 汎用出力デバイスのクローズ */
        close(outfd);
        return (-1);
    }
    outdata <<= 1;
    usleep(500 * 1000L);
}
outdata = 0x00;
len = write(outfd, &outdata, 1); /* 汎用出力すべて OFF */
if (len == -1) {
    err_no = errno;
    fprintf(stderr, "out device write: %s\n", strerror(err_no));
    /* 汎用出力デバイスのクローズ */
    close(outfd);
    return (-1);
}

/* 汎用入力
   汎用入力の 6 点ずつ出力を行います。
*/
len = read(infd, &indata, 1); /* 汎用入力の値を取得 */
if (len == -1) {
```

```
err_no = errno;
fprintf(stderr, "in device read: %s\n", strerror(err_no));
/* 汎用入出力デバイスのクローズ */
close(outfd);
close(infd);
return (-1);
}
else if (len == 0) {
    fprintf(stderr, "in device read: len zero\n");
    /* 汎用入出力デバイスのクローズ */
    close(outfd);
    close(infd);
    return (-1);
}
else {
    indata &= 0x3F;
    /* IN0 状態 */
    if (indata & 0x01) fprintf(stdout, "IN0: ON\n");
    else                fprintf(stdout, "IN0: OFF\n");
    /* IN1 状態 */
    if (indata & 0x02) fprintf(stdout, "IN1: ON\n");
    else                fprintf(stdout, "IN1: OFF\n");
    /* IN2 状態 */
    if (indata & 0x04) fprintf(stdout, "IN2: ON\n");
    else                fprintf(stdout, "IN2: OFF\n");
    /* IN3 状態 */
    if (indata & 0x08) fprintf(stdout, "IN3: ON\n");
    else                fprintf(stdout, "IN3: OFF\n");
    /* IN4 状態 */
    if (indata & 0x10) fprintf(stdout, "IN4: ON\n");
    else                fprintf(stdout, "IN4: OFF\n");
    /* IN5 状態 */
    if (indata & 0x20) fprintf(stdout, "IN5: ON\n");
    else                fprintf(stdout, "IN5: OFF\n");
}

/* 汎用入出力デバイスのクローズ */
close(outfd);
close(infd);

return(0);
}
```

4-2 シリアルポート

4-2-1 シリアルポートについて

AP シリーズは RS232C、RS422、RS485 を切り替えることができるシリアルポートを 2 つ持っており、それぞれをユーザアプリケーションで使用できます。

ポートごとにデバイスファイルが違いますので、表 4-2-1-1 にシリアルタイプ別のデバイスファイル名について示します。

表 4-2-1-1. シリアルタイプ別のデバイスファイル名

ポート番号	デバイスファイル	用途
0	/dev/ttyS0	タッチパネル接続
1	/dev/ttyS1	汎用のシリアルポート 1
2	/dev/ttyS2	汎用のシリアルポート 2

※注：ttyS0 はユーザアプリケーションでは使用できません。

アプリケーションでシリアルポートを使用するには、RS232C、RS422、RS485 のシリアルタイプを切り替えて、それぞれのデバイスファイルをオープンし、Read/Write することで制御します。

シリアルポートのタイプを切り替えるにはシリアルポート切り替えドライバを使用します。シリアルポートの切り替えは、下記に示す 2 種類の方法で行うことができます。詳細は『4-2-2 シリアルポートデバイスドライバについて』を参照してください。

1. デバイスドライバを使用する方法
2. シリアル切り替えコマンドを使用する方法

※注：同一ポートで RS232C、RS422、RS485 同時の使用はできません。

※注：SIO ポート設定スイッチも選択したタイプに設定する必要があります。

4-2-2 シリアルポートデバイスドライバについて

●シリアルポートデバイスドライバについて

Linux では「termios」と呼ばれる、非同期通信ポートを制御する為の汎用ターミナルインターフェースがあります。このインターフェースを使用することで、シリアルポートのボーレートや、CTS/RTS の有効無効等、さまざまな設定が可能となります。「termios」についての詳細はインターネットや書籍等を参照してください。

●RS232C/RS422/RS485 切り替え用デバイスドライバ

ttyS1、ttyS2 は通信方法制御デバイス (/dev/scictl) を用いて RS232C/RS422/RS485 の切替えを行うことができます。表 4-2-2-1 にデバイスの詳細を示します。

表 4-2-2-1. シリアルポート通信方法制御デバイスリファレンス

SCICTL	
名前	シリアルポートの通信方法を制御します。
ヘッダ	#include "scictl_ioctl.h"
説明	シリアルポートのRS232C/RS422/RS485の通信方法の設定と取得を行うことができます。
OPEN	デバイスファイル (/dev/scictl) をopen関数でオープンします。 fd = open("/dev/scictl", O_RDWR);
IOCTL	通信方法を制御するにはioctl関数を用います。 error = ioctl(fd, ioctl_type, &conf);
	<ul style="list-style-type: none"> ● ioctl_type <ul style="list-style-type: none"> ASD_SCICTL_IOCSCONF 通信方法を設定します。 ASD_SCICTL_IOCGCONF 現在の通信方法を取得します。 ● conf 通信方法設定データです。以下の構造体になります。 <pre> struct scictl_conf { unsigned short ch; unsigned short type; unsigned short timer; }; </pre>
ch	ポート番号 1 : ttyS1 2 : ttyS2
type	ポート通信方法 0 : RS232C 1 : RS422 2 : RS485
timer	RS485用のTXディセーブルタイマ【マイクロ秒】 送信完了から、この設定時間の間、再送信がなければTXがディセーブルされます。

●RS232C/RS422/RS485 切り替えコマンド

RS232C/RS422/RS485 切り替えは、Algo Smart Panel 付属のコマンドでも行うことができます。表 4-2-2-2 に詳細を示します。

表 4-2-2-2. シリアルポート通信切り替えコマンドリファレンス

SCICTL_CONF							
名前	シリアルポート通信切換えコマンド						
書式	<code>scictl_conf ch type timer</code>						
説明	シリアルポートのRS232C/RS422/RS485の通信方法の設定を行います。 引数： <table border="1"> <tr> <td>ch</td> <td>ポート番号 1 : ttyS1 2 : ttyS2</td> </tr> <tr> <td>type</td> <td>ポート通信方法 0 : RS232C 1 : RS422 2 : RS485</td> </tr> <tr> <td>timer</td> <td>RS485用のTXディセーブルタイマ【マイクロ秒】 送信完了から、この設定時間の間、再送信がなければTXがディセーブルされます。</td> </tr> </table>	ch	ポート番号 1 : ttyS1 2 : ttyS2	type	ポート通信方法 0 : RS232C 1 : RS422 2 : RS485	timer	RS485用のTXディセーブルタイマ【マイクロ秒】 送信完了から、この設定時間の間、再送信がなければTXがディセーブルされます。
ch	ポート番号 1 : ttyS1 2 : ttyS2						
type	ポート通信方法 0 : RS232C 1 : RS422 2 : RS485						
timer	RS485用のTXディセーブルタイマ【マイクロ秒】 送信完了から、この設定時間の間、再送信がなければTXがディセーブルされます。						

ポート 1 を RS422 に設定する場合は、以下の様にコマンドを実行します。

```
# scictl_conf 1 1 0
ch=1, type=1, timer=0
```

4-2-3 シリアルポートサンプルプログラム

●WideStudio 用サンプルプログラム

「/usr/local/tools-0010/samples/sampleWideStudio/sample_Sio」に、シリアルポートを使ったサンプルプログラムが入っています。



図 4-2-3-1. シリアルポートデバイス制御サンプル画面

このサンプルプログラムは、スレッド内でシリアルポート 0 からの受信待ちを行い、受信した文字をそのまま送信し、同時に中央のテキストフィールドに受信文字列を表示します。

シリアルポートデバイスの切り替えと、オープン、スレッドの生成を記したソースコードをリスト 4-2-3-1 に示します。

シリアルポートデバイスをオープンする前に、シリアルポート切り替えデバイスを「open」関数でオープンし、RS232C として使用するよう設定しています。

「open」関数で通信を行いたいポートのデバイスをオープンします。(サンプルではシリアルポート 1 デバイスファイル名「/dev/ttyS1」をオープンしています。)

「O_NOCTTY」は制御端末として使用しないモードでオープンします。「tcgetattr」関数で現状の通信設定(「termios」構造体)を取得します。「termios」構造体のメンバの値を変更することで通信設定を変更します。「tcsetattr」関数で変更した通信設定を反映します。これで通信できる状態になります。

「termios」構造体、ならびにシリアルデバイスの使用方法等の詳細については、インターネットや書籍を参照してください。

このサンプルプログラムの通信設定は 8bit 長、パリティ無し、ストップビット 1bit、ボーレート 38400bps となっています。

リスト 4-2-3-1. シリアルポートデバイスの切り替えとオープンとスレッドの生成 (Main_Init.cpp)

```
#include <termios.h>
#include <stdio.h>
#include <unistd.h>
#include <fcntl.h>
#include <sys/signal.h>
#include <sys/types.h>

#include <WScom.h>
#include <WSCfunctionList.h>
#include <WSCbase.h>

#include "scictl_ioctl.h"

#include "newwin000.h"
#include "ComThread.h"
//-----
//Function for the event procedure
//-----
void Main_Init(WSCbase* object) {
    struct termios tio;
    int stat;
    int desc;
    int ret;
    struct scictl_conf conf;

    /*
     * ポート切り替えデバイスをオープン
     *
     */
    desc = open("/dev/scictl", O_RDWR);
    if (desc == -1) {
        Status_Bar->setProperty(WSNlabelString, "scictl Open Error");
        return;
    }
    /*
```

```
* ttyS1 を RS232C に変更
*
*   conf.ch
*     ポート番号  1: ttyS1
*                 2: ttyS2
*
*   conf.type
*     ポートタイプ 0: RS232C
*                  1: RS422
*                  2: RS485
*
*   conf.timer
*     RS485 用 TX ディセーブルタイム[マイクロ秒]
*     送信完了から設定時間の間、再送信がなければ
*     TX がディセーブルされます。
*/
conf.ch = 1;
conf.type = 0;
conf.timer = 1000;
ret = ioctl(desc, ASP_SCICTL_IOCSCONF, &conf);
if (ret == -1) {
    Status_Bar->setProperty(WSNlabelString, "scictl ioctl Error");
    close(desc);
    return;
}

close(desc);

/*シリアルポートオープン*/
comm_fd = open("/dev/ttyS1", O_RDWR | O_NOCTTY); //シリアルポートオープン
if(comm_fd < 0) {
    Status_Bar->setProperty(WSNlabelString, "ttyS1 Open Error");
    return;
}

stat = togetattr(comm_fd, &tio); //現在の通信設定を待避
if(stat < 0) {
    Status_Bar->setProperty(WSNlabelString, "Terminal Attribute Get Error");
    close(comm_fd);
    return;
}

//通信設定 (データ長 8bit ストップビット 1bit パリティ無し 制御線無視)
tio.c_cflag &= ~(CSIZE | CSTOPB | PARENB | PARODD | HUPCL);
tio.c_cflag |= CS8 | CLOCAL | CREAD;

//通信設定 (フレームエラー、パリティエラーなし)
tio.c_iflag = IGNPAR;
tio.c_oflag = 0;
tio.c_lflag = 0;
```

```

tio.c_cc[VINTR] = 0;
tio.c_cc[VQUIT] = 0;
tio.c_cc[VERASE] = 0;
tio.c_cc[VKILL] = 0;
tio.c_cc[VEOF] = 0;
tio.c_cc[VTIME] = 50; //キャラクタ間タイムアウト時間 50ms
tio.c_cc[VMIN] = 1; //1 文字取得するまでブロック
tio.c_cc[VSWTC] = 0;
tio.c_cc[VSTART] = 0;
tio.c_cc[VSTOP] = 0;
tio.c_cc[VSUSP] = 0;
tio.c_cc[VEOL] = 0;
tio.c_cc[VREPRINT] = 0;
tio.c_cc[VDISCARD] = 0;
tio.c_cc[VWERASE] = 0;
tio.c_cc[VLNEXT] = 0;
tio.c_cc[VEOL2] = 0;

//通信設定 (ポート 38400)
cfsetospeed(&tio, B38400);
cfsetispeed(&tio, B38400);

stat=tcsetattr(comm_fd, TCSAFLUSH, &tio); //変更した通信設定の反映
if(stat < 0) {
    Status_Bar->setProperty(WSNLabelString, "Terminal Attribute Set Error");
    close(comm_fd);
    return;
}

/*スレッドの生成*/
comctrl_thr = 0;
comctrl_thr = WSDthread::getNewInstance(); //スレッド インスタンス取得
comctrl_thr->setFunction(Comctrl_Thread); //スレッド 本体関数を設定
comctrl_thr->setCallbackFunction(Com_callback_func); //コールバック関数を設定
comctrl_thr->createThread((void*)0); //スレッド を生成
}
static WSCfunctionRegister op("Main_Init", (void*)Main_Init);

```

リスト 4-2-3-2 にシリアルポートから 1 バイト受信して、そのまま送信するスレッドのソースコードを示します。

「read」関数で 1 バイト受信するまで待ちます。1 バイト受信されたら、「write」関数を使用して 1 バイト送信し、同時にテキストフィールドに受信した文字を表示します。

リスト 4-2-3-2. シリアルポートデバイスからの受信のソースコード (ComThread.cpp)

```

#include <stdio.h>
#include <stdlib.h>
#include <string.h>
#include <sys/types.h>
#include <sys/stat.h>
#include <sys/ioctl.h>

```

```
#include <termios.h>
#include <pthread.h>
#include <fcntl.h>
#include <unistd.h>
#include <errno.h>
#include <math.h>

#include <WScom.h>
#include <WSCfunctionList.h>
#include <WSCbase.h>

#include "newwin000.h"
#include "ComThread.h"

int comm_fd;
WSDthread* comctrl_thr;

void *Comctrl_Thread(WSDthread* obj, void *arg)
{
    int len;
    char data;
    int i;
    i = 0;
    for(;;) {
        len = read(comm_fd, &data, 1); /*1バイト受信*/
        if(len==1) {
            write(comm_fd, &data, 1); /*1バイト送信*/
            obj->execCallback((void*)data);
        }
    }
    return(NULL);
}

/*スレッドから通知され、メインスレッドで実行されるコールバック関数*/
void Com_callback_func(WSDthread *, void *val)
{
    char data[2];

    data[0] = (char)(unsigned long)val;
    data[1] = 0;
    newtext_001->addString(data);
}
}
```

●コンソール用サンプルプログラム

「/usr/local/tools-0010/samples/sampleConsole/sample_SerialPortChange」に、シリアルポート切替えを行うサンプルプログラムが入っています。コンソールウィンドウを起動して、コンパイルしたコマンドを実行します。ソースコードをリスト 4-2-3-3 に示します。

このサンプルプログラムでは、シリアルポート 1 を RS485 に設定しています。

リスト 4-2-3-3. シリアルポート切替えのソースコード (main.c)

```
/**
 * シリアルポート RS422/RS485/RS232C 切り替え制御方法サンプルプログラムのソースコード
 */
#include <stdio.h>
#include <string.h>
#include <sys/types.h>
#include <sys/stat.h>
#include <fcntl.h>
#include <unistd.h>
#include <errno.h>
#include <sys/ioctl.h>
#include "scictl_ioctl.h"

int main(void)
{
    int          err_no;
    int          ret;
    int          desc;
    struct scictl_conf conf;

    /*
     * ポート切り替えデバイスをオープン
     */
    desc = open("/dev/scictl", O_RDWR);
    if (desc == -1) {
        err_no = errno;
        fprintf(stderr, "scictl open: %s\n", strerror(err_no));
        return (-1);
    }

    /*
     * ttyS0 を RS485 に変更
     */
    /*
     * conf.ch
     *     ポート番号  1: ttyS1
     *                 2: ttyS2
     */
    /*
     * conf.type
     *     ポートタイプ 0: RS232C
     *                 1: RS422
     *                 2: RS485
     */
}
```

```

*
*   conf.timer
*       RS485 用 TX ディセーブルタイム[マイクロ秒]
*       送信完了から設定時間の間、再送信がなければ
*       TX がディセーブルされます。
*/
conf.ch = 1;
conf.type = 2;
conf.timer = 1000;
ret = ioctl(desc, ASP_SCICTL_IOCSCONF, &conf);
if (ret == -1) {
    err_no = errno;
    fprintf(stderr, "ioctl failed: %s\n", strerror(err_no));
    close(desc);
    return (-1);
}

close(desc);
return 0;
}

```

「/usr/local/tools-0010/samples/sampleConsole/sample_Serial」に、シリアルポートで送受信を行うサンプルプログラムが入っています。コンソールウィンドウを起動して、コンパイルしたコマンドを実行します。サンプルプログラムのソースコードをリスト 4-2-3-4 に示します。

シリアルポート 1「/dev/ttyS1」を「open」関数でオープンし、「tcsetattr」関数で通信設定を行っています。通信設定は 8bit 長、パリティ無し、ストップビット 1bit、ボーレート 38400bps と設定しています。「read」関数で 100 バイト受信されるまで待ち、コンソール上に受信した文字列を表示し、同時に受信した文字列を「write」関数で送信しています。

リスト 4-2-3-4. シリアルポート送受信を行うソースコード (main.c)

```

/**
   シリアルポート制御サンプルプログラムのソースコード
**/

#include <fcntl.h>
#include <errno.h>
#include <stdio.h>
#include <string.h>
#include <sys/types.h>
#include <sys/stat.h>
#include <termios.h>
#include <unistd.h>

int main(int argc, char *argv[])
{
    char        rbuf[100];
    int         res;
    int         err_no;
    int         comm_fd;
    int         i;
    ssize_t     size;

```



```
struct termios tio;

/* シリアルポートハイソフオン */
comm_fd = open("/dev/ttyS1", O_RDWR | O_NOCTTY);
if (comm_fd == -1) { /* エラー処理 */
    err_no = errno;
    fprintf(stderr, "ttyS1 open: %s\n", strerror(err_no));
    return (-1);
}
/* 現在の通信設定を待避 */
res = tcgetattr(comm_fd, &tio);
if(res == -1){
    err_no = errno;
    fprintf(stderr, "ttyS1 tcgetattr_1: %s\n", strerror(err_no));
    close(comm_fd);
    return (-1);
}

/* 通信設定 (データ長 8bit ストップビット 1bit パリティ無し 制御線無視) */
tio.c_cflag &= ~(CSIZE | CSTOPB | PARENB | PARODD | HUPCL);
tio.c_cflag |= CS8 | CLOCAL | CREAD;

/* 通信設定 (フレーム、パリティエラーなし) */
tio.c_iflag = IGNPAR;
tio.c_oflag = 0;
tio.c_lflag = 0;

tio.c_cc[VINTR] = 0;
tio.c_cc[VQUIT] = 0;
tio.c_cc[VERASE] = 0;
tio.c_cc[VKILL] = 0;
tio.c_cc[VEOF] = 0;
tio.c_cc[VTIME] = 250; /* キャラクタ間タイムアウト時間 250 */
tio.c_cc[VMIN] = 1; /* 1 文字取得するまでブロック */
tio.c_cc[VSWTC] = 0;
tio.c_cc[VSTART] = 0;
tio.c_cc[VSTOP] = 0;
tio.c_cc[VSUSP] = 0;
tio.c_cc[VEOL] = 0;
tio.c_cc[VREPRINT] = 0;
tio.c_cc[VDISCARD] = 0;
tio.c_cc[VWERASE] = 0;
tio.c_cc[VLNEXT] = 0;
tio.c_cc[VEOL2] = 0;

/* 通信設定 (ボーレート 38400) */
cfsetospeed(&tio, B38400);
cfsetispeed(&tio, B38400);

/* 通信設定変更を反映 */
res = tcsetattr(comm_fd, TCSAFLUSH, &tio);
```

```
if (res == -1) {
    err_no = errno;
    fprintf(stderr, "ttyS1 tcgetattr_2: %s\n", strerror(err_no));
    close(comm_fd);
    return (-1);
}

/* シリアルポート受信処理 */
while (1) {
    memset(rbuf, '\0', 100);
    /* 100バイト単位で受信 */
    size = read(comm_fd, &rbuf[0], 100);
    if (size == -1) {
        err_no = errno;
        fprintf(stderr, "ttyS1 read: %s\n", strerror(err_no));
        break;
    }
    else if (size > 0) {
        /* 受信データを16進数文字に変換し標準出力 */
        fprintf(stdout, "ttyS1 read data: length[%d] data[", size);
        for (i = 0; i < size; i++) fprintf(stdout, "0x%02X ", rbuf[i]);
        fprintf(stdout, "]\n");

        /* 受信したデータ数を送信 */
        size = write(comm_fd, &rbuf[0], size); /*sizeバイト送信*/
        if (size == -1) {
            err_no = errno;
            fprintf(stderr, "ttyS1 write: %s\n", strerror(err_no));
            break;
        }
    }
    usleep(10*1000L);
}
return(0);
}
```

4-3 ネットワークポート

4-3-1 ネットワークポートについて

ネットワーク通信ではソケットと呼ばれる概念で通信します。ソケットには接続を待つサーバと、サーバに接続に行くクライアントがあります。サーバプログラムがまず起動され、接続を待ちます。次にクライアントプログラムを起動してサーバに接続に行きます。これでネットワーク通信が確立します。

4-3-2 ネットワークソケット用システムコールについて

表 4-3-2-1 にサーバ側のソケットシステムコール、表 4-3-2-2 にクライアント側ソケットシステムコールを示します。また、表 4-3-2-3 にサーバ、クライアント共通のソケット通信用システムコールを示します。

表 4-3-2-1. サーバ側ソケットシステムコール

関数名	説明
socket	ソケットを作成し、対応するファイルディスクリプタを返します。
bind	待ちポート番号を指定します。
listen	カーネルにサーバソケットであることを伝えます。
accept	クライアントが接続してくるまで待ちます。通信が確立したら、接続済みのファイルディスクリプタを返します。

表 4-3-2-2. クライアント側ソケットシステムコール

関数名	説明
socket	ソケットを作成し、対応するファイルディスクリプタを返します。
connect	指定された IP アドレスとポート番号のサーバに接続に行きます。

表 4-3-2-3. ソケット通信用システムコール

関数名	説明
recv	ソケットからデータを受信します。
send	ソケットからデータを送信します。

それぞれのシステムコール関数の詳細については、書籍やインターネットを参照してください。

これらのシステムコールを使用して、サーバプログラムとクライアントプログラムを作成することができ、ネットワークを利用して離れた場所にある機器と通信を行うことができます。

4-3-3 ネットワークサンプルプログラム

●WideStudio 用サンプルプログラム

「/usr/local/tools-0010/samples/sampleWideStudio/sample_Lan」に、ネットワーク通信を使ったサンプルプログラムが入っています。



図 4-3-3-1. サーバ画面

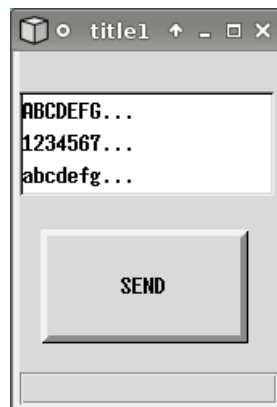


図 4-3-3-2. クライアント画面

このサンプルプログラムは、クライアント画面で選択した文字列を「SEND」ボタンをクリックすることでサーバに送り、サーバ側で、受信した文字列をテキストフィールドに表示します。クライアント側のプログラムを起動するときには、サーバプログラムが起動しているパソコンの IP アドレスを引数として入力します。ここでは、同一のパソコン上で動作させるので、ローカルループバックアドレスを指定しています。

AP シリーズ本体にサーバプログラムとクライアントプログラムを送り、コンソールウィンドウを起動してプログラムを実行します。図 4-3-3-1 と図 4-3-3-2 のような画面が起動します。

```
# ./server_spl &
# ./client_spl 127.0.0.1 &
```

リスト 4-3-3-1 にサーバソケット作成を行うソースコードを示します。

接続待ちを行う、サーバソケットを作成し、実際に待ちを行う為のスレッドを作成します。各関数の引数の意味については、インターネットや書籍を参照してください。

リスト 4-3-3-1. サーバソケット生成 (./server/Main_Init.cpp)

```
#include <stdio.h>
#include <stdlib.h>
#include <string.h>
#include <sys/types.h>
#include <sys/stat.h>
#include <fcntl.h>
#include <unistd.h>
#include <errno.h>
#include <sys/socket.h>
#include <arpa/inet.h>
#include <bits/local_lim.h>

#include <WScom.h>
#include <WSCfunctionList.h>
```

```

#include <WSCbase.h>

#include "newwin000.h"
#include "SrvThread.h"

//-----
//Function for the event procedure
//-----
void Main_Init(WSCbase* object) {
    /* ソケット生成 */
    if ((srv_sock = socket(AF_INET, SOCK_STREAM, IPPROTO_TCP)) < 0) {
        Status_Bar->setProperty(WSNlabelString, "socket() failed");
        return;
    }

    /* ポート番号指定 */
    memset(&srv_addr, 0, sizeof(srv_addr));
    srv_addr.sin_family = AF_INET;
    srv_addr.sin_addr.s_addr = htonl(INADDR_ANY);
    srv_addr.sin_port = htons(8900); //ポート番号指定
    if (bind(srv_sock, (struct sockaddr *) &srv_addr, sizeof(srv_addr)) < 0) {
        Status_Bar->setProperty(WSNlabelString, "bind() failed");
        close(srv_sock);
        return;
    }

    /* カーネル通知 */
    if (listen(srv_sock, 1) < 0) {
        Status_Bar->setProperty(WSNlabelString, "listen() failed");
        close(srv_sock);
        return;
    }

    /*スレッドの生成*/
    srvctrl_thr = 0;
    srvctrl_thr = WSDthread::getNewInstance(); //スレッドインスタンス取得
    srvctrl_thr->setFunction(Srvctrl_Thread); //スレッド本体関数を設定
    srvctrl_thr->setCallbackFunction(Srv_callback_func); //コールバック関数を設定
    srvctrl_thr->createThread((void*)0); //スレッドを生成
}
static WSCfunctionRegister op("Main_Init", (void*)Main_Init);

```

リスト 4-3-3-2 に接続待ちとクライアントからのデータ受信待ちを行うスレッドのソースコードを示します。「accept」関数でクライアントプログラムが接続してくるのを待ちます。正常に通信確立すれば、通信確立済みのソケットのファイルディスクリプタが返されます。通信確立済みのソケットのファイルディスクリプタを使用してデータの送受信を行います。送信は「send」関数を、受信は「recv」関数を使用します。このプログラムでは、受信した文字列をテキストフィールドに表示します。

リスト 4-3-3-2. クライアント接続待ちおよびデータ受信待ちスレッド (./server/SrvThread.cpp)

```

#include <stdio.h>
#include <stdlib.h>
#include <string.h>

```

```
#include <sys/types.h>
#include <sys/stat.h>
#include <fcntl.h>
#include <unistd.h>
#include <errno.h>
#include <sys/socket.h>
#include <arpa/inet.h>
#include <bits/local_lim.h>

#include <WScom.h>
#include <WSCfunctionList.h>
#include <WSCbase.h>

#include "newwin000.h"
#include "SrvThread.h"

char tmp[BUFFER];
int flg;
int srv_sock;
int cli_sock;
struct sockaddr_in srv_addr;
struct sockaddr_in cli_addr;
WSDthread* srvctrl_thr;

void *Srvctrl_Thread(WSDthread* obj, void *arg)
{
    int len;

    for(;;){
        /* クライアント接続待ち */
        len = sizeof(cli_addr);
        if ((cli_sock = accept(srv_sock, (struct sockaddr *) &cli_addr, (socklen_t *)&len)) < 0)
        {
            continue;
        }
        flg = 0;

        for(;;){
            /* データ受信待ち */
            if(flg == 0){ /*exeCallback 関数が実行されるまで処理しない*/
                len = recv(cli_sock, tmp, BUFFER, 0);
                if (len > 0){
                    flg = 1;
                    obj->execCallback((void *)len); /*正常受信完了*/
                }else{
                    close(cli_sock); /*通信断*/
                    break;
                }
            }
            usleep(10*1000); /*10mswait*/
        }
    }
}
```

```

    }
    return(NULL);
}
/*スレッド から通知され、メインスレッド で実行されるコールバック関数*/
void Srv_callback_func(WSDthread *, void *val)
{
    int len;

    len = (int)val;
    tmp[len] = 0;
    newvlab_000->setProperty(WSNLabelString, tmp);
    flg = 0;
}

```

リスト 4-3-3-3 にクライアントソケット作成を行うソースコードを示します。

「socket」関数でソケットのファイルディスクリプタを生成します。プログラム起動時に引数として、サーバの IP アドレスを指定します。指定した IP アドレスとサーバプログラムで指定したポート番号に「connect」関数で接続します。通信確立したら 0 が、エラーなら -1 が返されます。これで、通信できる状態です。

リスト 4-3-3-3. クライアントソケット生成 (./client/Main_Init.cpp)

```

#include <stdio.h>
#include <stdlib.h>
#include <string.h>
#include <sys/types.h>
#include <sys/stat.h>
#include <fcntl.h>
#include <unistd.h>
#include <errno.h>
#include <sys/socket.h>
#include <arpa/inet.h>
#include <bits/local_lim.h>

#include <WScom.h>
#include <WSCfunctionList.h>
#include <WSCbase.h>
#include <WSDappDev.h>

#include "newwin000.h"

int sock;
struct sockaddr_in srv_addr;
//-----
//Function for the event procedure
//-----
void Main_Init(WSCbase* object) {
    char **argv;
    char *srv_ip;

    /* プログラム起動時の引数でサーバの IP アドレスを取得 */
    if (WSGIappDev()->getArgc() < 2) {

```

```

        Status_Bar->setProperty(WSNLabelString, "No IP Address");
        return;
    }
    argv = WSGIappDev()->getArgv();
    srv_ip = *(argv + 1);

    /* クライアントソケット作成*/
    if ((sock = socket(AF_INET, SOCK_STREAM, IPPROTO_TCP)) < 0) {
        Status_Bar->setProperty(WSNLabelString, "socket() failed");
        return;
    }

    /* サーバに接続 */
    memset(&srv_addr, 0, sizeof(srv_addr));
    srv_addr.sin_family = AF_INET;
    srv_addr.sin_addr.s_addr = inet_addr(srv_ip); //ターゲットサーバ IP アドレス
    srv_addr.sin_port = htons(8900); //ターゲットサーバポート番号
    if (connect(sock, (struct sockaddr *)&srv_addr, sizeof(srv_addr)) < 0) {
        Status_Bar->setProperty(WSNLabelString, "connect failed");
        close(sock);
        return;
    }

    /* list 初期化 */
    newList_000->delAll();
    newList_000->addItem("ABCDEFGH...");
    newList_000->addItem("1234567...");
    newList_000->addItem("abcdefgh...");
    newList_000->updateList();
}
static WSCfunctionRegister op("Main_Init", (void*)Main_Init);

```

ボタンの「ACTIVATE」プロシージャで、リストから選んだ文字列を送信します。リスト 4-3-3-4 に文字列送信のソースコードを示します。

リストボックスから送信する文字列を選択し、ボタンを押します。「send」関数で該当する文字列を送信します。

リスト 4-3-3-4. クライアントプログラムボタン「ACTIVATE」プロシージャ (. /client/Btn_Click.cpp)

```

#include <stdio.h>
#include <stdlib.h>
#include <string.h>
#include <sys/types.h>
#include <sys/stat.h>
#include <fcntl.h>
#include <unistd.h>
#include <errno.h>
#include <sys/socket.h>
#include <arpa/inet.h>
#include <bits/local_lim.h>

```



```

#include <WScom.h>
#include <WSCfunctionList.h>
#include <WSCbase.h>

#include "newwin000.h"

#define BUFFER 2048

extern int sock;
extern struct sockaddr_in srv_addr;
const char dat[][21]={
    {"ABCDEFGHJKLMNOPQRST"},
    {"12345678901234567890"},
    {"abcdefghijklmnopqrst"}
};

//-----
//Function for the event procedure
//-----
void Btn_Click(WSCbase* object) {
    long d;

    d = newList_000->getSelectedPos();
    if((d < 0) || (d > 2)) return;
    /* データ送信 */
    if (send(sock, &dat[d][0], 20, 0) != 20) {
        Status_Bar->setProperty(WSNLabelString, "send() failed");
    }
}

static WSCfunctionRegister op("Btn_Click", (void*)Btn_Click);

```

●コンソール用サンプルプログラム

「/usr/local/tools-0010/samples/sampleConsole/sample_TcpIp」に、ネットワーク通信を行うサンプルプログラムが入っています。コンソールウィンドウを起動して、コンパイルしたコマンドを実行します。サーバプログラムとクライアントプログラムの起動手順は以下の通りです。

```

# ./sampleTCPIP_Server &
# ./sampleTCPIP_Client -i 127.0.0.1 &

```

この場合、1 台の AP シリーズ上でサーバとクライアントのプログラムが動作し、お互いに通信を行います。

ソースコードをリスト 4-3-3-5 に示します。

サーバソケットを作成し、「accept」関数でクライアントプログラムが接続してくるのを待ちます。正常に通信確立すれば、通信確立済みのソケットのファイルディスクリプタが返されます。通信確立済みのファイルディスクリプタを使用してデータの送受信を行います。送信は「send」関数、受信は「recv」関数を使用します。

このプログラムでは、受信した文字列を画面に表示します。

リスト 4-3-3-5. サーバソケットのソースコード (main.c)

```

/**
TCP/IP サーバソケット サンプルプログラムのソースコード

```

```
/**/  
  
#include <arpa/inet.h>  
#include <fcntl.h>  
#include <errno.h>  
#include <stdio.h>  
#include <string.h>  
#include <sys/types.h>  
#include <sys/stat.h>  
#include <sys/socket.h>  
#include <unistd.h>  
  
int main(void)  
{  
    char            rcv_buf[11];  
    int             i;  
    int             srv_sock;  
    int             len;  
    int             res;  
    int             err_no;  
    int             sock;  
    struct sockaddr_in cli_addr;  
    struct sockaddr_in srv_addr;  
  
    /* データ受信処理 */  
    while (1){  
  
        /* サーバソケット作成 */  
        srv_sock = socket(AF_INET, SOCK_STREAM, IPPROTO_TCP);  
        if (srv_sock == -1) {  
            err_no = errno;  
            fprintf(stderr, "socket failed: %s\n", strerror(err_no));  
            return (-1);  
        }  
  
        /* ポート番号指定 */  
        memset(&srv_addr, 0, sizeof(srv_addr));  
  
        srv_addr.sin_family      = AF_INET;  
        srv_addr.sin_addr.s_addr = htonl(INADDR_ANY);  
        srv_addr.sin_port        = htons(8900);           //ポート番号指定  
  
        /* ソケットに名前をつける */  
        res = bind(srv_sock, (struct sockaddr *) &srv_addr, sizeof(srv_addr));  
        if (res == -1) {  
            fprintf(stderr, "bind failed: %s\n", strerror(err_no));  
            close(srv_sock);  
            return (-1);  
        }  
    }  
}
```

```

/* 加礼通知 */
res = listen(srv_sock, 1);
if (res == -1) {
    fprintf(stderr, "listen failed: %s\n", strerror(err_no));
    close(srv_sock);
    return (-1);
}

/* クライアント接続待ち */
len = sizeof(cli_addr);
srv_sock = accept(srv_sock, (struct sockaddr *)&cli_addr, (socklen_t *)&len);
if (srv_sock < 0) continue;

/* クライアントソケット接続待ち */
while (1){
    memset(rcv_buf, '¥0', 11);
    len = recv(srv_sock, &rcv_buf[0], 10, 0);
    if (len <= 0) {
        err_no = errno;
        fprintf(stderr, "recv failed: %s\n", strerror(err_no));
        close(srv_sock);
        break;
    }
    else {
        fprintf(stdout, "recv data: length[%d] [", len);
        for (i = 0; i < len; i++) fprintf(stdout, "0x%02X ", rcv_buf[i]);
        fprintf(stdout, "]\n");
    }
    usleep(10 * 1000L);
}
usleep(10 * 1000L);
}

close(sock);
return (0);
}

```

クライアント側のプログラムは、表 4-3-2-2 に書かれているシステムコールを実行して、接続待ちしているサーバに接続します。

リスト 4-3-3-6 にクライアントソケット作成を行うソースコードを示します。

「socket」関数でクライアント用のソケットのファイルディスクリプタを生成します。プログラム起動時に引数として、サーバの IP アドレスを指定します。指定した IP アドレスとサーバプログラムで指定したポート番号に「connect」関数で接続します。通信が確立したら 0 が返り、通信できる状態になります。エラーなら-1 が返されます。

リスト 4-3-3-6. クライアントソケット (main.c)

```

/**
TCP/IP クライアントソケット サンプルプログラムのソースコード
**/

```

```
#include <arpa/inet.h>
#include <fcntl.h>
#include <errno.h>
#include <stdio.h>
//#include <stdlib.h>
#include <string.h>
#include <sys/types.h>
#include <sys/stat.h>
#include <sys/socket.h>
#include <unistd.h>

int main(int argc, char *argv[])
{
    char*          srv_ip=NULL;
    char           snd_buf[] = "ABCDEFGHJKLMNOPQRST";
    int            c;
    int            res;
    int            err_no;
    int            sock;
    struct sockaddr_in  srv_addr;

    /*
     * 起動引数取得
     *  -i : IP アドレスを指定します。
     */
    while ((c = getopt(argc, argv, "i:")) != -1) {
        switch(c) {
            case 'i':
                srv_ip = optarg;
                break;
            default:
                fprintf(stdout, "argument error\n");
                fprintf(stdout, "  -i : Ip Address : ex) 192.168.0.1\n");
                return (-1);
        }
    }
    if (srv_ip == NULL) {
        fprintf(stdout, "argument error Ip Address : ex) -i 192.168.0.1\n");
        return (-1);
    }

    /* クライアントソケット作成 */
    if ((sock = socket(AF_INET, SOCK_STREAM, IPPROTO_TCP)) < 0) {
        fprintf(stderr, "socket failed\n");
        return (-1);
    }

    /* サーバに接続 */
    memset(&srv_addr, '0', sizeof(srv_addr));

    srv_addr.sin_family = AF_INET;
```

```
srv_addr.sin_addr.s_addr = inet_addr(srv_ip);      /* ターゲットサーバ IP アドレス */
srv_addr.sin_port       = htons(8900);           /* ターゲットサーバポート番号 8900port */

res = connect(sock, (struct sockaddr *)&srv_addr, sizeof(srv_addr));
if (res == -1) {
    fprintf(stderr, "connect failed: %s\n", strerror(err_no));
    close(sock);
    return (-1);
}

/* サーバにデータを送信 */
res = send(sock, &snd_buf, strlen(snd_buf), 0);
if (res == -1) {
    fprintf(stderr, "send failed: %s\n", strerror(err_no));
    close(sock);
    return (-1);
}
else if (res < strlen(snd_buf)) {
    fprintf(stderr, "send failed: send size(%d)\n", res);
    close(sock);
    return (-1);
}

/* データを送信後待機 */
while (1) usleep(100 * 1000L);

close(sock);
return (0);
}
```

4-4 RAS 機能

RAS 機能として以下の様な機能を実装しています。

- 汎用入力 IN0 リセット
- 汎用入力 IN1 割込み
- バックアップ SRAM
- ハードウェア・ウォッチドッグタイマ

次項より各機能についての説明を行います。

4-4-1 汎用入力 IN0 リセットについて

汎用入力 IN0 リセットは、汎用入力の IN0 が ON した場合に本体をリセットする機能です。デバイスドライバからこの機能の有効・無効を切り替えることができます。

4-4-2 汎用入力 IN0 リセットデバイスドライバについて

汎用入力 IN0 リセットデバイスファイル (/dev/rasin) にアクセスする事により設定状態を読み書きできます。

表 4-4-2-1 に汎用入出力のリファレンスを示します。

表 4-4-2-1. 汎用入力 IN0 デバイスリファレンス

RASIN	
名前	汎用入力 IN0 リセット機能の制御を行います。
インクルード	#include "rasin.h"
説明	汎用入力 IN0 リセット機能の有効・無効設定及び設定値の取得を行います。 本設定は、本体再起動後に有効となります。
OPEN	汎用入力 IN0 リセットデバイス (/dev/rasin) を open 関数でオープンします。 <code>rasinfd = open("/dev/rasin", O_RDWR);</code>
IOCTL	IN0 リセットを制御するには ioctl 関数を使用します。 <code>error = ioctl(fd, ioctl_type, &conf);</code> <ul style="list-style-type: none"> ● <code>ioctl_type</code> <ul style="list-style-type: none"> RASIN_IOCSINORST 有効・無効を設定します。 RASIN_IOCGINORST 現在の設定値を取得します。 ● <code>conf</code> <ul style="list-style-type: none"> 0 無効 1 有効

4-4-3 汎用入力 INO リセットサンプル

●Console 用サンプルプログラム

「/usr/local/tools-0010/samples/sampleConsole/sample_Reset」に、汎用入力 INO リセットを使用するサンプルプログラムが入っています。このサンプルプログラムはコンソールアプリケーションとして作成されています。コンソール上で動作させることができます。リスト 4-4-3-1 にソースコードを示します。

リスト 4-4-3-1. 汎用入力 INO リセット (main.c)

```
/**
 汎用入力 INO リセット制御方法サンプルプログラムのソースコード
**/
#include <errno.h>
#include <fcntl.h>
#include <stdio.h>
#include <string.h>
#include <sys/types.h>
#include <sys/stat.h>
#include <sys/ioctl.h>
#include <unistd.h>

#include "rasin.h"

int main(void)
{
    int desc;
    int len;
    int onoff;
    int err_no;

    /*
     * RAS/Input デバイスのオープン
     */
    desc = open("/dev/rasin", O_RDWR);
    if (desc == -1) {
        err_no = errno;
        fprintf(stderr, "rasin open: %s\n", strerror(err_no));
        return (-1);
    }

    /*
     * 現在の設定を取得
     *
     * onoff: 1   有効
     *       : 0   無効
     */
    len = ioctl(desc, RASIN_IOCTLINORST, &onoff);
    if (len == -1) {
        err_no = errno;
        fprintf(stderr, "ioctl get INORST failed: %s\n", strerror(err_no));
        close(desc);
        return (-1);
    }
}
```

```
}
else {
    fprintf(stdout, "ioctl get INORST success: %d¥n", onoff);
}

/*
 * INO リセットを有効にする
 *
 * onoff: 1    有効
 *       : 0    無効
 */
onoff = 1;
len = ioctl(desc, RASIN_IOCSINORST, &onoff);
if (len == -1) {
    err_no = errno;
    fprintf(stderr, "ioctl set INORST failed: %s¥n", strerror(err_no));
    close(desc);
    return (-1);
}
else {
    fprintf(stdout, "ioctl set INORST success: %d¥n", onoff);
}
close(desc);
return 0;
}
```


4-4-4 汎用入力 IN1 割込みについて

汎用入力 IN1 割込みは、汎用入力の IN1 が ON した場合に割込みを発生させる機能です。デバイスドライバからこの機能の有効・無効を切り替えることができます。ユーザーアプリケーションでは SIGIO シグナルとして通知を受けることができます。

4-4-5 汎用入力 IN1 割込みデバイスドライバについて

汎用入力 IN1 割込みデバイスファイル (/dev/rasin) にアクセスする事により設定状態を読み書きできます。

表 4-4-5-1 に汎用入出力のリファレンスを示します。

表 4-4-5-1. 汎用入力 IN1 割込みデバイスリファレンス

RASIN	
名前	汎用入力 IN1 割込み機能の制御を行います。
インクルード	#include "rasin.h"
説明	汎用入力 IN1 割込み機能の有効・無効設定及び設定値の取得を行います。 本設定は、本体再起動後に有効となります。
OPEN	汎用入力 IN1 割込みデバイス (/dev/rasin) を open 関数でオープンします。 <code>rasinfd = open("/dev/rasin", O_RDWR);</code>
IOCTL	IN1 割込みを制御するには <code>ioctl</code> 関数を使用します。 <code>error = ioctl(fd, ioctl_type, &conf);</code> <ul style="list-style-type: none"> ● <code>ioctl_type</code> <ul style="list-style-type: none"> <code>RASIN_IOCIN1INT</code> 有効・無効を設定します。 <code>RASIN_IOCGIN1INT</code> 現在の設定値を取得します。 ● <code>conf</code> <ul style="list-style-type: none"> 0 無効 1 有効

4-4-6 汎用入力 IN1 割込みサンプル

●Console 用サンプルプログラム

「/usr/local/tools-0010/samples/sampleConsole/sample_Interrupt」に、汎用入力 IN1 割込みを使用するサンプルプログラムが入っています。このサンプルプログラムはコンソールアプリケーションとして作成されています。コンソール上で動作させることができます。リスト 4-4-6-1 にソースコードを示します。

リスト 4-4-6-1. 汎用入力 IN1 割込み (main.c)

```
/**
 * 汎用入力 IN1 割込み制御サンプルプログラムのソースコード
 */
#include <stdio.h>
#include <stdlib.h>
#include <string.h>
#include <sys/types.h>
#include <sys/stat.h>
#include <sys/ioctl.h>
#include <fcntl.h>
#include <unistd.h>
#include <errno.h>
#include <signal.h>

#include "rasin.h"

static int SigOnOff=0;

void sighandler(int signo)
{
    /*
     * SIGIO シグナルなら終了
     */
    if(signo == SIGIO) {
        SigOnOff = 1;
    }
}

int main(void)
{
    int    err_no;
    int    desc;
    int    len;
    int    onoff;
    struct sigaction  action;

    /*
     * SIGIO シグナルのハンドラを登録
     */
    memset(&action, 0, sizeof(action));
    action.sa_handler = sighandler;
    action.sa_flags = 0;
    sigaction(SIGIO, &action, NULL);
```

```
/*
 * RAS/Input デバイスのオープン
 */
desc = open("/dev/rasin", O_RDWR);
if (desc == -1) {
    err_no = errno;
    fprintf(stderr, "rasin open: %s\n", strerror(err_no));
    return (-1);
}

/*
 * プロセスが SIGIO を受け取れるようにする
 */
fcntl(desc, F_SETOWN, getpid());
fcntl(desc, F_SETFL, fcntl(desc, F_GETFL) | FASYNC);

/*
 * 現在の設定値取得
 *
 * onoff: 1 有効
 *       : 0 無効
 */
len = ioctl(desc, RASIN_IOCTLIN1INT, &onoff);
if (len == -1) {
    err_no = errno;
    fprintf(stderr, "ioctl get IN1INT failed: %s\n", strerror(err_no));
    close(desc);
    return (-1);
}
else {
    fprintf(stdout, "ioctl get IN1INT success: %d\n", onoff);
}

/*
 * IN1 割込みを有効にする
 *
 * 有効の場合、無効に変更し終了
 * onoff: 1 有効
 *       : 0 無効
 */
if (onoff != 1) onoff = 1;
else onoff = 0;
len = ioctl(desc, RASIN_IOCTLIN1INT, &onoff);
if (len == -1) {
    err_no = errno;
    fprintf(stderr, "ioctl set IN1INT failed: %s\n", strerror(err_no));
    close(desc);
    return (-1);
}
else {
```

```
fprintf(stdout, "ioctl set IN1INT success: %d\n", onoff);
if (onoff == 0) {
    fprintf(stdout, "IN1 Interrupt off\n");
    return (1);
}
}
/*
 * シグナル (SIGIO) 受信時に標準出力に出力を行います。
 */
while (1) {
    if (SigOnOff == 1) {
        printf("IN1INT receive\n");
        break;
    }
    usleep(10*1000L);
}
close(desc);
return 0;
}
```

4-4-7 バックアップ SRAM 機能について

AP シリーズでは 4MByte のバックアップバッテリー付きの SRAM エリアが用意されています。
4MByte のうち 4KByte は、システム領域として使用している為、残りの 3.996MByte をユーザ領域として
使用できます。

4-4-8 バックアップ SRAM 機能デバイスドライバについて

デバイスファイル (/dev/g5sram0) に対して Read/Write する事によりバックアップ SRAM を読み書きできま
す。また、mmap をつかって、SRAM をユーザプログラム内でマッピングし直すことで、直接アクセスするこ
とも可能です。表 4-4-8-1 にデバイスの詳細を示します。

表 4-4-8-1. バックアップ SRAM デバイスリファレンス

RASRAM	
名前	バックアップSRAMの制御を行います。
説明	バックアップSRAMは、バックアップバッテリー付きのSRAMです。 デバイスドライバからSRAMのデータを読み書きできます。
OPEN	バックアップSRAMデバイス(/dev/g5sram0)をopen関数でオープンします。 <code>rasramfd = open("/dev/g5sram0", O_RDWR);</code>
READ	read関数を用いてバックアップSRAMの値を読みみます。
WRITE	write関数を用いてバックアップSRAMに値を書込みます。
MMAP	mmap関数を用いてバックアップSRAMを連続したメモリ領域としてマッピングし直すことが出来 ます。マッピングし直したメモリアドレスへ直接読み書きすることが可能です。
IOCTL	ioctl関数を用いてバックアップSRAMの情報を読み出すことができます。 <code>error = ioctl(fd, ctlcode, param);</code> ● ctlcode SRAM_IOCFSIZE バックアップSRAMのサイズを取得します。 [param] unsigned long型変数のポインタ [error] 0:正常、0以外:異常

4-4-9 バックアップ SRAM 制御サンプル

●コンソール用サンプルプログラム

「/usr/local/tools-0010/samples/sampleConsole/sample_SRAM」に、バックアップ付き SRAM を read/write システムコールで操作したサンプルプログラムが入っています。このサンプルプログラムはコンソールアプリケーションとして作成されています。コンソール上で動作させることができます。インクリメントデータの読み書きとデクリメントデータの読み書きを行い、データが正常に書き込まれているかを確認しています。リスト 4-4-9-1 にソースコードを示します。

リスト 4-4-9-1. バックアップ SRAM 制御 Read/Write 方式 (rasram_read.c)

```
#include <stdio.h>
#include <stdlib.h>
#include <string.h>
#include <sys/types.h>
#include <sys/stat.h>
#include <fcntl.h>
#include <unistd.h>
#include <errno.h>
#include <sys/ioctl.h>

#include "asd_rasram.h"

unsigned long rasram_size = 0;

unsigned char *rasram;

int main(void)
{
    int desc;
    int i;
    int len;
    unsigned char d;
    unsigned char *dp;

    desc = open("/dev/g5sram0", O_RDWR);
    if(desc < 0) {
        printf("open failed: err=%d\n", errno);
        return -1;
    }

    if(ioctl(desc, SRAM_IOCGetSize, &rasram_size) != 0) {
        close(desc);
        printf("size check failed.\n");
        return -1;
    }

    printf("rasram size is %lx.\n", rasram_size);
    rasram = malloc(rasram_size * sizeof(unsigned char));

    /* inc data */
    d = 1;
    dp = rasram;
    for(i = 0; i < rasram_size; i++) {
```

```
    *dp++ = d++;
}
lseek(desc, 0, SEEK_SET);
len = write(desc, rasram, rasram_size);
if(len != rasram_size) {
    printf("inc data write faild: err=%d¥n", errno);
    close(desc);
    free(rasram);
    return -1;
}
memset(rasram, 0x00, rasram_size);
lseek(desc, 0, SEEK_SET);
len = read(desc, rasram, rasram_size);
if(len != rasram_size) {
    printf("dec data read faild: err=%d¥n", errno);
    close(desc);
    free(rasram);
    return -1;
}
d = 1;
dp = rasram;
for(i = 0; i < rasram_size; i++) {
    if(*dp++ != d++) {
        printf("inc data compare faild¥n");
        close(desc);
        free(rasram);
        return -1;
    }
}

/* dec data */
d = 0xff;
dp = rasram;
for(i = 0; i < rasram_size; i++) {
    *dp++ = d--;
}
lseek(desc, 0, SEEK_SET);
len = write(desc, rasram, rasram_size);
if(len != rasram_size) {
    printf("dec write faild: err=%d¥n", errno);
    close(desc);
    free(rasram);
    return -1;
}
memset(rasram, 0x00, rasram_size);
lseek(desc, 0, SEEK_SET);
len = read(desc, rasram, rasram_size);
if(len != rasram_size) {
    printf("dec read faild: err=%d¥n", errno);
    close(desc);
    free(rasram);
}
```

```

        return -1;
    }
    d = 0xff;
    dp = rasram;
    for(i = 0; i < rasram_size; i++){
        if(*dp++ != d--){
            printf("dec data compare failed\n");
            close(desc);
            free(rasram);
            return -1;
        }
    }
}

close(desc);
printf("read/write check ok\n");

free(rasram);
return 0;
}

```

「/usr/local/tools-0010/samples/sampleConsole/sample_SRAM」に、バックアップ付き SRAM を mmap システムコールで操作したサンプルプログラムが入っています。このサンプルプログラムはコンソールアプリケーションとして作成されています。コンソール上で動作させることができます。mmap 関数でマッピングしたアドレスに対して、バイト、ワード、ロングデータでの読み書きを行い、データが正常に書き込まれているかを確認しています。リスト 4-4-9-2 にソースコードを示します。

リスト 4-4-9-2. バックアップ SRAM 制御 mmap 方式 (rasram_mmap.c)

```

#include <stdio.h>
#include <stdlib.h>
#include <string.h>
#include <sys/types.h>
#include <sys/stat.h>
#include <sys/mman.h>
#include <fcntl.h>
#include <unistd.h>
#include <errno.h>
#include <sys/ioctl.h>

#include "asd_rasram.h"

unsigned long rasram_size = 0;

int main(void)
{
    int desc;
    int i;
    void *memmap = NULL;

    unsigned char b_dt;
    volatile unsigned char *b_mem;
    unsigned short w_dt;

```



```
volatile unsigned short *w_mem;
unsigned long l_dt;
volatile unsigned long *l_mem;

desc = open("/dev/g5sram0", O_RDWR);
if(desc < 0) {
    printf("open failed: err=%d\n", errno);
    return -1;
}

if(ioctl(desc, SRAM_IOCTL_SIZE, &rasram_size) != 0) {
    close(desc);
    printf("size check failed.\n");
    return -1;
}

printf("rasram size is %lx.\n", rasram_size);

memmap = mmap(0, rasram_size, PROT_READ | PROT_WRITE, MAP_SHARED, desc, 0);
if (!memmap) {
    printf("mmap failed\n");
    close(desc);
    return -1;
}
fprintf(stderr, "MemMap mmap: %08lx\n", (unsigned long)memmap);

/* byte check1 */
b_dt = 1;
b_mem = (volatile unsigned char *)memmap;
for(i = 0; i < rasram_size; i++) {
    *b_mem++ = b_dt++;
}
b_dt = 1;
b_mem = (volatile unsigned char *)memmap;
for(i = 0; i < rasram_size; i++) {
    if(*b_mem++ != b_dt++) {
        printf("byte check1 compare failed\n");
        close(desc);
        return -1;
    }
}
printf("byte check1 ok\n");

/* byte check2 */
b_dt = 0xff;
b_mem = (volatile unsigned char *)memmap;
for(i = 0; i < rasram_size; i++) {
    *b_mem++ = b_dt--;
}
b_dt = 0xff;
b_mem = (volatile unsigned char *)memmap;
```

```
for(i = 0; i < rasram_size; i++){
    if(*b_mem++ != b_dt--){
        printf("byte check2 compare failed\n");
        close(desc);
        return -1;
    }
}
printf("byte check2 ok\n");

/* word check1 */
w_dt = 1;
w_mem = (volatile unsigned short *)memmap;
for(i = 0; i < rasram_size/2; i++){
    *w_mem++ = w_dt++;
}
w_dt = 1;
w_mem = (volatile unsigned short *)memmap;
for(i = 0; i < rasram_size/2; i++){
    if(*w_mem++ != w_dt++){
        printf("word check1 compare failed\n");
        close(desc);
        return -1;
    }
}
printf("word check1 ok\n");

/* word check2 */
w_dt = 0xffff;
w_mem = (volatile unsigned short *)memmap;
for(i = 0; i < rasram_size/2; i++){
    *w_mem++ = w_dt--;
}
w_dt = 0xffff;
w_mem = (volatile unsigned short *)memmap;
for(i = 0; i < rasram_size/2; i++){
    if(*w_mem++ != w_dt--){
        printf("word check2 compare failed\n");
        close(desc);
        return -1;
    }
}
printf("word check2 ok\n");

/* long check1 */
l_dt = 1;
l_mem = (volatile unsigned long *)memmap;
for(i = 0; i < rasram_size/4; i++){
    *l_mem++ = l_dt++;
}
l_dt = 1;
l_mem = (volatile unsigned long *)memmap;
```

```
for(i = 0; i < rasram_size/4; i++){
    if(*l_mem++ != l_dt++){
        printf("long check1 compare faild¥n");
        close(desc);
        return -1;
    }
}
printf("long check1 ok¥n");

/* long check2 */
l_dt = 0xffffffff;
l_mem = (volatile unsigned long *)mmap;
for(i = 0; i < rasram_size/4; i++){
    *l_mem++ = l_dt--;
}
l_dt = 0xffffffff;
l_mem = (volatile unsigned long *)mmap;
for(i = 0; i < rasram_size/4; i++){
    if(*l_mem++ != l_dt--){
        printf("long check2 compare faild¥n");
        close(desc);
        return -1;
    }
}
printf("long check2 ok¥n");

close(desc);
printf("ioctl check finish¥n");
return 0;
}
```

4-4-10 ハードウェア・ウォッチドッグタイマ機能について

AP シリーズには、ハードウェアによるウォッチドッグタイマ機能が搭載されています。

デバイスドライバ (/dev/rashwwdt) にアクセスすることにより、この機能を使用することができます。

シャットダウン、再起動、ポップアップ通知、ログへの出力は、デーモン (HWWDTD) によって行われています。図 4-4-10-1 に、デバイス、ドライバ、アプリケーション、設定ツール、デーモンの関係を示します。

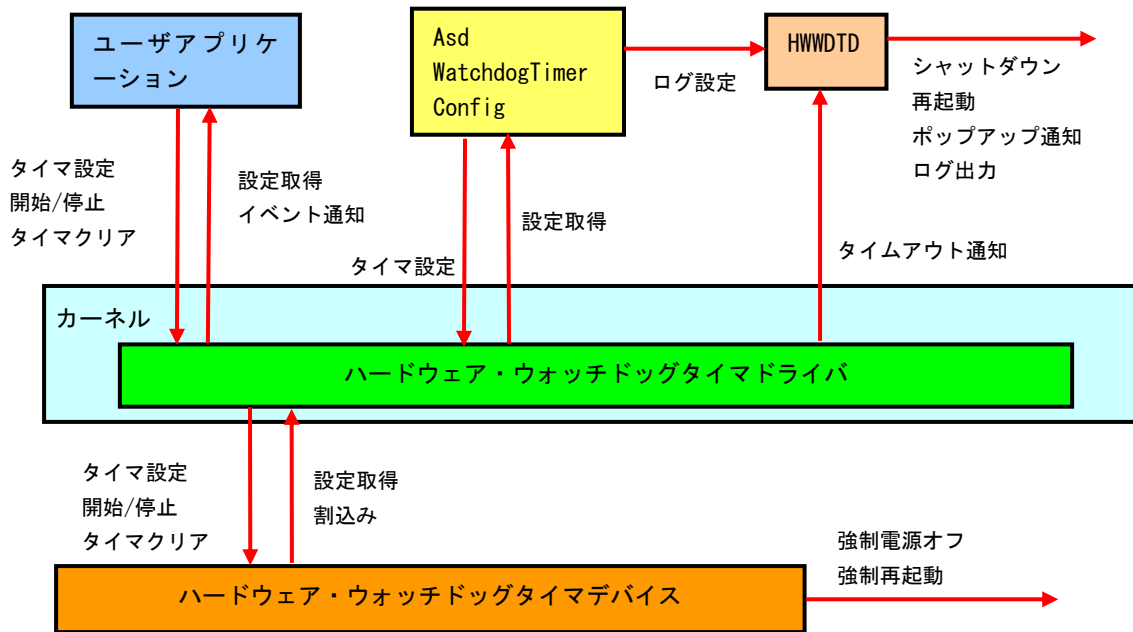


図 4-4-10-1. ハードウェア・ウォッチドッグタイマの構成

ハードウェア・ウォッチドッグタイマでは、ハード的に電源を OFF する機能 (**強制電源オフ**) とリセットする機能 (**強制再起動**) があります。OS が完全にフリーズした状態でも、電源 OFF やリセットを行うことが出来ます。

ハードウェア・ウォッチドッグタイマで **強制電源オフ** を設定した場合、「POWER ボタン」を長押ししたときと同じ処理になります。AP シリーズでは POWER ボタンを 4 秒間長押しすると、強制的に電源 OFF されます。また、Algonomix4 では、POWER ボタンを押されるとシャットダウン処理を実行します。

出荷時設定のままでは、シャットダウン処理中に電源が落ちることになり、m-SATA ディスク破損の原因になる可能性があります。

下記のコマンドを実行して、「/etc/systemd/logind.conf」を編集してください。

```
$ sudo su
パスワード:asdusr
# vi /etc/systemd/logind.conf
```

編集前

```
# This file is part of systemd.
#
# systemd is free software; you can redistribute it and/or modify it
# under the terms of the GNU Lesser General Public License as published by
# the Free Software Foundation; either version 2.1 of the License, or
# (at your option) any later version.
#
```

```
# See logind.conf(5) for details

[Login]
#NAutoVTs=6
#ReserveVT=6
#KillUserProcesses=no
#KillOnlyUsers=
#KillExcludeUsers=root
Controllers=blkio cpu cpuacct cpuset devices freezer hugetlb memory perf_event net_cls net_prio
ResetControllers=
#InhibitDelayMaxSec=5
#HandlePowerKey=poweroff
#HandleSuspendKey=suspend
#HandleHibernateKey=hibernate
#HandleLidSwitch=suspend
#PowerKeyIgnoreInhibited=no
#SuspendKeyIgnoreInhibited=no
#HibernateKeyIgnoreInhibited=no
#LidSwitchIgnoreInhibited=yes
#IdleAction=ignore
#IdleActionSec=30min
```

編集後

```
# This file is part of systemd.
#
# systemd is free software; you can redistribute it and/or modify it
# under the terms of the GNU Lesser General Public License as published by
# the Free Software Foundation; either version 2.1 of the License, or
# (at your option) any later version.
#
# See logind.conf(5) for details

[Login]
#NAutoVTs=6
#ReserveVT=6
#KillUserProcesses=no
#KillOnlyUsers=
#KillExcludeUsers=root
Controllers=blkio cpu cpuacct cpuset devices freezer hugetlb memory perf_event net_cls net_prio
ResetControllers=
#InhibitDelayMaxSec=5
#HandlePowerKey=ignore
#HandleSuspendKey=suspend
#HandleHibernateKey=hibernate
#HandleLidSwitch=suspend
#PowerKeyIgnoreInhibited=no
#SuspendKeyIgnoreInhibited=no
#HibernateKeyIgnoreInhibited=no
#LidSwitchIgnoreInhibited=yes
#IdleAction=ignore
#IdleActionSec=30min
```

HandlePowerKey の先頭の「#」を外してコメントアウトを解除し、設定を「ignore」に変更することで、logind に ACPI イベントを無視させます。

この編集後は、POWER ボタンを押してもシャットダウン処理は実行しません。元に戻す場合は、logind.conf ファイルを編集前の状態に戻してください。

4-4-11 ハードウェア・ウォッチドッグタイマデバイスについて

ハードウェア・ウォッチドッグタイマデバイスファイル (/dev/rashwddt) にアクセスすることにより、ハードウェア・ウォッチドッグタイマ機能を実行します。表 4-4-11-1 に、ハードウェア・ウォッチドッグタイマの詳細を示します。

表 4-4-11-1. ハードウェア・ウォッチドッグタイマデバイスリファレンス

RASHWDDT	
名前	rashwddt
インクルード	#include "asd_rashwddt.h"
説明	ハードウェア・ウォッチドッグタイマの開始/停止、タイムアウト時の動作の設定、タイマ時間の設定、イベント通知待ちを行うことができます。
OPEN	デバイスファイル(/dev/rashwddt)をopen関数でオープンします。 int fd = open("/dev/rashwddt", O_RDWR);
READ	使用しません
WRITE	1Byte以上のデータを書込むことで、タイマカウントをクリアします。 char data = 'a'; size_t len = write(fd, &data, 1);

IOCTL

ハードウェア・ウォッチドッグタイマデバイス进行操作するには `ioctl` 関数を使用します。
`error = ioctl(fd, ctlcode, param);`

● **ctlcode****RASHWDT_IOCTLSTART**

ハードウェア・ウォッチドッグタイマを開始します。
 また、`param` で、`close` 時にタイマカウントを停止するか開始、継続するかを指定します。
`param` が 1 の時は、タイマが停止していても `close` 時に開始されます。
 0: タイマを停止、1: タイマを継続
`[param]` unsigned long 型のポインタ
`[error]` 0: 正常、0 以外: 異常

RASHWDT_IOCTLSTOP

ハードウェア・ウォッチドッグタイマを停止します。
`[param]` なし (NULL)
`[error]` 0: 正常、0 以外: 異常

RASHWDT_IOCSCONFIG

ハードウェア・ウォッチドッグタイマのタイムアウト時の動作とタイマ時間を設定します。
 設定を変更した場合、ハードウェア・ウォッチドッグタイマをオープンしているすべてのアプリケーションに影響を与えます。変更する場合は、他のアプリケーションがハードウェア・ウォッチドッグタイマをオープンしていないかどうかを確認してください。
`[param]` RASHWDT_CONFIG 型変数のポインタ
`[error]` 0: 正常、0 以外: 異常

RASHWDT_IOCSCONFIG

ハードウェア・ウォッチドッグタイマの設定を取得します。
`[param]` RASHWDT_CONFIG 型変数のポインタ
`[error]` 0: 正常、0 以外: 異常

RASHWDT_IOCQKEEPALIVE

タイマカウントをクリアします
`[param]` なし (NULL)
`[error]` 0: 正常、0 以外: 異常

RASHWDT_IOCQWAITEVENT

イベント通知を待ちます。
 このコントロールコードで `ioctl` を呼び出すとタイムアウト発生、または強制解除されるまで関数からリターンしません。
`[param]` なし (NULL)
`[error]` 1: イベント発生、2: 強制解除、その他: 異常

RASHWDT_IOCQWAKEUP

イベント通知待ちを強制解除します。
`[param]` なし (NULL)
`[error]` 0: 正常、0 以外: 異常

● **param****RASHWDT_CONFIG** 構造体

ハードウェア・ウォッチドッグタイマの設定を格納します。

```
struct RASHWDT_CONFIG
{
    unsigned long action; // タイムアウト時の動作 0: システム停止 1: システム再起動
                        // 2: ポップアップ 3: イベント通知
                        // 4: 強制電源OFF 5: 強制再起動
    unsigned long time; // タイマ時間 (time × 100 [msec])
};
```


4-4-12 ハードウェア・ウォッチドッグタイマサンプル

●コンソール用サンプルプログラム

「/usr/local/tools-0010/samples/sampleConsole/sample_HwWdtKeepalive」に、ハードウェア・ウォッチドッグタイマドライバを使用するサンプルプログラムが入っています。リスト 4-4-12-1 にサンプルプログラムのソースコードを示します。

リスト 4-4-12-1. ハードウェア・ウォッチドッグタイマデバイス操作ソースコード (main.c)

```
#include <stdio.h>
#include <stdlib.h>
#include <fcntl.h>
#include <unistd.h>
#include <pthread.h>
#include <sys/ioctl.h>
#include <sys/time.h>
#include <sys/types.h>
#include "asd_rashwtdt.h"

#define HWWDTDEV_FILENAME "/dev/rashwtdt"

static struct RASHWDT_CONFIG Config;
static unsigned long Sta_Type;
static volatile int fStart = 0;
static volatile int fStop = 0;
static volatile int fFinish = 0;
static pthread_t Thread_Id;

//-----
/*
 * キープアライブスレッド
 */
static void *TimerProc(void *arg)
{
    int wdtfd = 0;
    int status = 0;

    /*
     * ハードウェア・ウォッチドッグタイマデバイスのオープン
     */
    wdtfd = open(HWWDTDEV_FILENAME, O_RDWR);
    if(wdtfd <= 0) {
        fprintf(stderr, "TimerProc: Device open failed\n");
        exit(1);
    }

    /*
     * ハードウェア・ウォッチドッグタイマデバイスの設定
     */
    if(ioctl(wdtfd, RASHWDT_IOCSCONFIG, &Config) != 0) {
        close(wdtfd);
        fprintf(stderr, "TimerProc: Device set error\n");
        exit(1);
    }
}
```

```
}
/*
 * 前回終了状態の取得
 */
status = ioctl(wdtfd, RASHWWDT_IOCTLSTATE, NULL);
if(status == RASHWWDT_NORMAL_SHUTDOWN) {
    fprintf(stdout, "Last Shutdown is normal shutdown\n");
}
if(status == RASHWWDT_FORCE_SHUTDOWN) {
    fprintf(stdout, "Last Shutdown is force shutdown\n");
}

/*
 * ハードウェア・ウォッチドッグタイマのスタート
 */
ioctl(wdtfd, RASHWWDT_IOCTLSTART, &Sta_Type);
printf("TimerProc: Start\n");

fFinish = 0;
while(1) {
    if(!fStart) {
        break;
    }
    /* KeepAlive */
    if(!fStop) {
        ioctl(wdtfd, RASHWWDT_IOCTLKEEPALIVE, NULL);
    }
    usleep(100 * 1000);
}
/*
 * ハードウェア・ウォッチドッグタイマ停止
 * ハードウェア・ウォッチドッグタイマ破棄
 */
ioctl(wdtfd, RASHWWDT_IOCTLSTOP, NULL);
close(wdtfd);
printf("TimerProc: Stop\n");

fFinish = 1;

return 0;
}

//-----
static int CreateThread(void)
{
    pthread_attr_t thread_attr;

    pthread_attr_init(&thread_attr);
    pthread_attr_setstacksize(&thread_attr, 0x10000);

    fStart = 1;
```

```
    if(pthread_create(&Thread_Id, &thread_attr, TimerProc, NULL) != 0) {
        printf("pthread_create: error¥n");
        return -1;
    }

    return 0;
}

//-----
int main(int argc, char** argv)
{
    int c;
    int action;
    int wdt;
    int sta_type;

    wdt = -1;
    action = -1;
    sta_type = -1;

    while((c = getopt(argc, argv, "t:a:s:")) != -1) {
        switch(c) {
            case 't':
                wdt = atoi(optarg);
                break;
            case 'a':
                action = atoi(optarg);
                break;
            case 's':
                sta_type = atoi(optarg);
                break;
        }
    }
    if((wdt <= 0) || (action < 0) || (action > RASHWDT_RESET) || (sta_type < 0) || (sta_type
> RASHWDT_ENDCONTINUE)) {
        printf(" t:test time[ *100msec]¥n");
        printf(" a:action 0:Shutdown 1:Reboot 2:Popup 3:Event 4:PowerOff 5:Reset ¥n");
        printf(" s:sta_type 0:endstop 1:continue¥n");
        return -1;
    }

    Config.action = action;
    Config.time = wdt;
    Sta_Type = sta_type;

    CreateThread();

    while(1) {
        c = fgetc(stdin);
        if(c == 'q' || c == 'Q') {
            break;
        }
    }
}
```

```

    }
    if(c == 's' || c == 'S'){
        fStop = 1;
    }
    usleep(100 * 1000);
}
/*
 * スレッドを停止
 */
fStart = 0;
/*
 * スレッド停止待ち
 */
while(fFinish != 1){
    usleep(100 * 1000);
}
/*
 * スレッド破棄
 */
pthread_cancel(Thread_Id);

return 0;
}

```

ハードウェア・ウォッチドッグタイマのタイムアウト時の動作をイベント通知にした場合、ユーザアプリケーションでタイムアウトを取得することができます。

「/usr/local/tools-0010/samples/sampleConsole/sample_HwWdtEventWait」に、タイムアウトのイベント通知を取得するサンプルプログラムが入っています。リスト 4-4-12-2 に、サンプルプログラムのソースコードを示します。

リスト 4-4-12-2. ハードウェア・ウォッチドッグタイマイベント取得ソースコード (main.c)

```

#include <stdio.h>
#include <stdlib.h>
#include <fcntl.h>
#include <string.h>
#include <unistd.h>
#include <pthread.h>
#include <stdarg.h>
#include <errno.h>
#include <sys/ioctl.h>
#include <sys/time.h>
#include <sys/types.h>
#include <sys/stat.h>
#include <sys/wait.h>
#include <bits/local_lim.h>
#include "asd_rashwdat.h"

#define HWWDTDEV_FILENAME "/dev/rashwdat"
#define MAX_HWWDTEVENT 5

//-----

```

```
typedef struct {
    int No;
    volatile int fStart;
    volatile int fFinish;
    pthread_t ThreadID;
    int wdtfd;
} HWWDEVENT_INFO;
//-----
/*
 * タイマイベント処理スレッド
 */
static void *TimerEventProc(void *arg)
{
    HWWDEVENT_INFO *info = (HWWDEVENT_INFO *)arg;
    int ret;

    printf("TimerEventProc: Timer%02d: Start¥n", info->No);

    info->fFinish = 0;
    /*
     * イベント通知待ち
     */
    while(1) {
        if(!info->fStart) {
            break;
        }
        ret = ioctl(info->wdtfd, RASHWWDT_IOCQWAIIEVENT, NULL);
        if(ret == RASHWWDT_TIMUP) {
            printf("TimerEventProc: TimeOut%02d¥n", info->No);
            break;
        } else {
            printf("TimerEventProc: WakeUp%02d¥n", info->No);
            break;
        }
    }
    info->fFinish = 1;

    printf("TimerEventProc: Timer%02d: Finish¥n", info->No);
    return 0;
}
//-----
static int CreateTimerEventInfo(int No, HWWDEVENT_INFO *info)
{
    pthread_attr_t thread_attr;

    pthread_attr_init(&thread_attr);
    pthread_attr_setstacksize(&thread_attr, 0x10000);

    info->No = No;
    info->ThreadID = 0;
}
```

```
info->fStart = 1;
info->fFinish = 0;
info->wdtfd = -1;

/*
 * ハードウェア・ウォッチドックタイマデバイスのオープン
 */
info->wdtfd = open(HWWDTDEV_FILENAME, O_RDWR);
if(info->wdtfd < 0) {
    printf("%s: open failed: err=%d\n", HWWDTDEV_FILENAME, errno);
    return -1;
}

/*
 * タイマイベント処理スレッド作成
 */
if(pthread_create(&info->ThreadID, &thread_attr, TimerEventProc, (void *)info) != 0) {
    close(info->wdtfd);
    printf("pthread_create: error\n");
    return -1;
}

return 0;
}

//-----
static void DeleteTimer(HWWDTEVENT_INFO *info)
{
    /*
     * スレッド停止
     */
    info->fStart = 0;
    /*
     * タイマ停止
     * タイマイベント待ち解除
     * タイマ破棄
     */
    ioctl(info->wdtfd, RASHWDT_IOCTLSTOP, NULL);
    ioctl(info->wdtfd, RASHWDT_IOCTLWAKEUP, NULL);
    close(info->wdtfd);
    /*
     * スレッド停止待ち
     */
    while(!info->fFinish) {
        usleep(10 * 1000);
    }

    pthread_cancel(info->ThreadID);
}

//-----
```

```
int main(int argc, char** argv)
{
    int i;
    HWWDEVENT_INFO info[MAX_HWWDEVENT];
    int action;
    int wdt;
    int sta_type;
    char c;

    wdt = 20;
    action = RASHWWDT_REBOOT;
    sta_type = RASHWWDT_ENDSTOP;

    for(i = 0; i < MAX_HWWDEVENT; i++){
        if(CreateTimerEventInfo(i, &info[i]) != 0){
            printf("CreatTimerEvent: NG: %d¥n", i);
            return -1;
        }
    }
    while(1){
        c = fgetc(stdin);
        if(c == 'q' || c == 'Q'){
            break;
        }
    }

    for(i = 0; i < MAX_HWWDEVENT; i++){
        DeleteTimer(&info[i]);
    }

    return 0;
}
```

4-5 タイマ割込み機能

4-5-1 タイマ割込み機能について

AP シリーズには、ハードウェアによるタイマ割込み機能が実装されています。タイマ割込み機能を使用することで、指定した時間で周期的に割込みを発生させることができます。タイマドライバによって生成されるタイマデバイスを操作することによって、ユーザアプリケーションからタイマ割込み機能を利用できるようになります。タイマデバイスでは、タイマ設定、タイマイベント通知などの機能を使用することができます。

4-5-2 タイマ割込み機能デバイスについて

タイマドライバはタイマデバイスを生成します。ユーザアプリケーションは、デバイスファイルにアクセスすることによってタイマ機能を操作します。表 4-5-2-1 にタイマデバイスの詳細を示します。

表 4-5-2-1. タイマデバイスリファレンス

タイマデバイス	
名前	rastime
ヘッダ	#include "asd_rastime.h"
説明	タイマ時間設定、タイマ開始/停止、タイマイベント待機を行うことができます。
OPEN	デバイスファイル(/dev/rastime)をopen関数でオープンします。 システム全体で、同時に16までオープンすることができます。 timerfd = open("/dev/rastime", 0_RDWR);
READ	使用しません
WRITE	使用しません

IOCTL

タイマデバイス进行操作するには `ioctl` 関数を使用します。

```
error = ioctl(fd, ctlcode, param);
```

● **ctlcode****RASTIME_IOCTLSTART**

タイマを開始します。

[param] なし (NULL)

[error] 0:正常、0以外:異常

RASTIME_IOCTLSTOP

タイマを停止します。

[param] なし (NULL)

[error] 0:正常、0以外:異常

RASTIME_IOCSCONFIG

タイマを設定します。

[param] RASTIME_CONFIG型変数のポインタ

[error] 0:正常、0以外:異常

RASTIME_IOCSCONFIG

タイマ設定を取得します。

[param] RASTIME_CONFIG型変数のポインタ

[error] 0:正常、0以外:異常

RASTIME_IOCSTIMERRES

タイマ解像度を設定します。(設定値: 1~65535[msec]、初期値: 10[msec])

システムで使用されている全ての `rastime` がこのタイマ解像度で動作します。

変更する場合は、他の `rastime` が動作していないかどうか注意してください。

[param] unsigned long型変数のポインタ

RASTIME_IOCSTIMERRES

タイマ解像度を取得します。

[param] unsigned long型変数のポインタ

[error] 0:正常、0以外:異常

RASTIME_IOCQWAI TEVENT

タイマイベントを待ちます。

このコントロールコードで `ioctl` を呼び出すとタイマイベント発生、または強制解除されるまで関数からリターンしません。

[param] なし (NULL)

[error] 1:イベント発生、2:強制解除、その他:異常

RASTIME_IOCQWAKEUP

タイマイベント待ちを強制解除します。

[param] なし (NULL)

[error] 0:正常、0以外:異常

● **param****RASTIME_CONFIG構造体**

タイマの設定を格納します。

```
struct RASTIME_CONFIG
{
    unsigned long type;          // タイマタイプ 0:1回で終了, 1:繰り返し
    unsigned long duetime;     // タイマ時間 1~ [msec]
};
```

4-5-3 タイマ割り込み機能サンプルプログラム

●コンソール用サンプルプログラム

「/usr/local/tools-0010/samples/sampleConsole/sample_Timer」に、タイマデバイスを制御するサンプルプログラムが入っています。リスト 4-5-3-1 にサンプルプログラムのソースコードを示します。タイマ解像度の変更、タイマ設定、タイマ開始/停止、タイマイベント待ちを行うサンプルです。このサンプルプログラムでは 10 個のタイマを同時に使用しています。

リスト 4-5-3-1. タイマデバイス操作ソースコード (main.c)

```
#include <stdio.h>
#include <stdlib.h>
#include <fcntl.h>
#include <string.h>
#include <unistd.h>
#include <pthread.h>
#include <stdarg.h>
#include <errno.h>
#include <sys/ioctl.h>
#include <sys/time.h>
#include <sys/types.h>
#include <sys/stat.h>
#include <sys/wait.h>
#include <bits/local_lim.h>
#include "asd_rastime.h"

#define TIMERDEV_FILENAME "/dev/rastime"
#define MAX_TIMEREVENT 10

//-----
typedef struct {
    int No;
    volatile int fStart;
    volatile int fFinish;
    pthread_t ThreadID;
    int TimerDesc;
    struct RASTIME_CONFIG Config;
} TIMEREVENT_INFO;

//-----
static void _time_print(const char *format, ...)
{
    struct timeval tv;
    struct tm *tmptr = NULL;
    char txt[256];
    va_list arg;

    va_start(arg, format);
    vsprintf(txt, format, arg);
    va_end(arg);

    gettimeofday(&tv, NULL);
    tmptr = localtime(&tv.tv_sec);
```

```
printf("%02d:%02d:%02d.%03ld: %s",
    tmptr->tm_hour,          // hour
    tmptr->tm_min,           // min
    tmptr->tm_sec,          // sec
    (tv.tv_usec + 500) / 1000, // msec
    txt
);
}

//-----
/*
 * タイマイベント処理スレッド
 */
static void *TimerEventProc(void *arg)
{
    TIMEREVENT_INFO *info = (TIMEREVENT_INFO *)arg;
    int ret;

    printf("TimerEventProc: Timer%02d: Start¥n", info->No);

    info->fFinish = 0;
    while(1) {
        ret = ioctl(info->TimerDesc, RASTIME_IOCQWAIТЕVENT, NULL);
        if(ret != RASTIME_TIMER) {
            printf("ioctl: RASTIME_IOCQWAIТЕVENT: WAKEUP¥n");
            break;
        }
        if(!info->fStart) {
            break;
        }
        _time_print("Timer%02d¥n", info->No);
    }
    info->fFinish = 1;

    printf("TimerEventProc: Timer%02d: Finish¥n", info->No);
    return 0;
}

//-----
static int CreateTimerEventInfo(int No, TIMEREVENT_INFO *info)
{
    pthread_attr_t thread_attr;

    pthread_attr_init(&thread_attr);
    pthread_attr_setstacksize(&thread_attr, 0x10000);

    info->No = No;
    info->ThreadID = 0;
    info->fStart = 0;
    info->fFinish = 0;
    info->TimerDesc = -1;
}
```

```
/*
 * タイマデバイスのオープン
 */
info->TimerDesc = open(TIMERDEV_FILENAME, O_RDWR);
if(info->TimerDesc < 0) {
    printf("%s: open failed: err=%d\n", TIMERDEV_FILENAME, errno);
    return -1;
}

/*
 * タイマの設定
 */
info->Config.type = 1;
info->Config.duetime = 200 * (No + 1);
if(ioctl(info->TimerDesc, RASTIME_IOCSCONFIG, &info->Config) != 0) {
    close(info->TimerDesc);
    printf("ioctl: RASTIME_IOCSCONFIG: error\n");
    return -1;
}

/*
 * タイマイベント処理スレッド作成
 */
info->fStart = 1;
if(pthread_create(&info->ThreadID, &thread_attr, TimerEventProc, (void *)info) != 0) {
    close(info->TimerDesc);
    printf("pthread_create: error\n");
    return -1;
}

return 0;
}

//-----
static void StartTimer(TIMEREVENT_INFO *info)
{
    /*
     * タイマスタート
     */
    ioctl(info->TimerDesc, RASTIME_IOCTLSTART, NULL);
}

//-----
static void DeleteTimer(TIMEREVENT_INFO *info)
{
    /*
     * スレッド停止
     */
    info->fStart = 0;
}
```

```
/*
 * タイマ停止
 * タイマイベント待ち解除
 * タイマ破棄
 */
ioctl(info->TimerDesc, RASTIME_IOCTLSTOP, NULL);
ioctl(info->TimerDesc, RASTIME_IOCTLQWAKEUP, NULL);
close(info->TimerDesc);

/*
 * スレッド停止待ち
 */
while(!info->fFinish) {
    usleep(10 * 1000);
}
pthread_cancel(info->ThreadID);
}

//-----
static int SetTimerResolution(void)
{
    int timerfd;
    unsigned long timer_resolution;

    /*
     * タイマデバイスのオープン
     */
    timerfd = open(TIMERDEV_FILENAME, O_RDWR);
    if(timerfd < 0) {
        printf("%s: open failed: err=%d\n", TIMERDEV_FILENAME, errno);
        return -1;
    }

    /*
     * タイマ解像度取得
     */
    if(ioctl(timerfd, RASTIME_IOCTLGTIMERRES, &timer_resolution) != 0) {
        close(timerfd);
        printf("ioctl: RASTIME_IOCTLGTIMERRES: error\n");
        return -1;
    }
    printf("SetTimerResolution: RASTIME_IOCTLGTIMERRES: timer_resolution=%ld\n",
timer_resolution);

    /*
     * タイマ解像度変更
     *
     * タイマ解像度が変わります。
     * 他のプロセスで rastime を使用している場合は注意してください。
     */
    if(timer_resolution == 10) {
```

```
    close(timerfd);
    return 0;
}
timer_resolution = 10;
if(ioctl(timerfd, RASTIME_IOCTLSTIMERRES, &timer_resolution) != 0) {
    close(timerfd);
    printf("ioctl: RASTIME_IOCTLSTIMERRES: error¥n");
    return -1;
}
printf("SetTimerResolution: RASTIME_IOCTLSTIMERRES: timer_resolution=%ld¥n",
timer_resolution);

close(timerfd);
return 0;
}

//-----
int main(void)
{
    int i;
    int c;
    TIMEREVENT_INFO info[MAX_TIMEREVENT];

    if(SetTimerResolution() != 0) {
        return -1;
    }

    for(i = 0; i < MAX_TIMEREVENT; i++) {
        if(CreateTimerEventInfo(i, &info[i]) != 0) {
            printf("CreatTimerEvent: NG: %d¥n", i);
            return -1;
        }
    }
    for(i = 0; i < MAX_TIMEREVENT; i++) {
        StartTimer(&info[i]);
    }

    while(1) {
        c = fgetc(stdin);
        if(c == 'q' || c == 'Q') {
            break;
        }
    }

    for(i = 0; i < MAX_TIMEREVENT; i++) {
        DeleteTimer(&info[i]);
    }

    return 0;
}
```

4-6 その他のサンプルプログラム

4-6-1 マルチランゲージ表示サンプルプログラム

●WideStudio 用サンプルプログラム

「/usr/local/tools-0010/samples/sampleWideStudio/sample_MultiLang」に、日英中韓の文字列を同時に表示するプログラムのサンプルプログラムのソースコードが入っています。多言語を同時に表示する為には、文字コードを UTF-8 にする必要があります。その為、サンプルプログラムのソースコードのファイルも UTF-8 形式でないと正常に読み出すことができないのでご注意ください。UTF-8 の文字コードで書かれた文字列を表示するようにして、対応するフォントを用意できれば、多言語プログラムが実現します。フォント設定の仕方については『3-3-9 WideStudio/MWT の開発例』を参照してください。

多言語表示のサンプルプログラムを実行した画面を図 4-6-1-1 に示します。



図 4-6-1-1. 多言語表示実行画面

Algonomix4 標準では、中国語と韓国語のフォントが実装されていないため、正しく表示できません。TrueType の中国語、韓国語のフォントを実装すれば改善されます。

4-6-2 テンキーボードサンプル

●WideStudio 用サンプルプログラム

「/usr/local/tools-0010/samples/sampleWideStudio/sample_10Key」に、タッチパネルアプリケーションにおいて数字入力によく使用されるテンキーキーボードを表示するサンプルプログラムのソースコードが入っています。数値入力をしたいボタンのプロシージャで図のようなテンキー画像を出力する関数を呼び出します。数値を入力して「OK」ボタンを押すことで、その数値が最初に起動したボタン上に表示されます。

テンキーボードのサンプルプログラムを実行した画面を図 4-6-2-1 に示します。

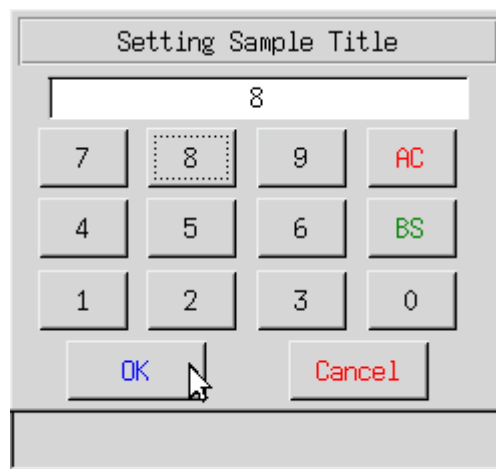


図 4-6-2-1. テンキー入力画面

4-6-3 起動ランチャーサンプルプログラム

●WideStudio 用サンプルプログラム

「/usr/local/tools-0010/samples/sampleWideStudio/sample_Launcher」に、別のアプリケーションを起動するランチャープログラムのサンプルプログラムのソースコードが入っています。それぞれのボタンをクリックすることで、それぞれ対応したアプリケーションが起動します。

起動ランチャーのサンプルプログラムを実行した画面を図 4-6-3-1 に示します。

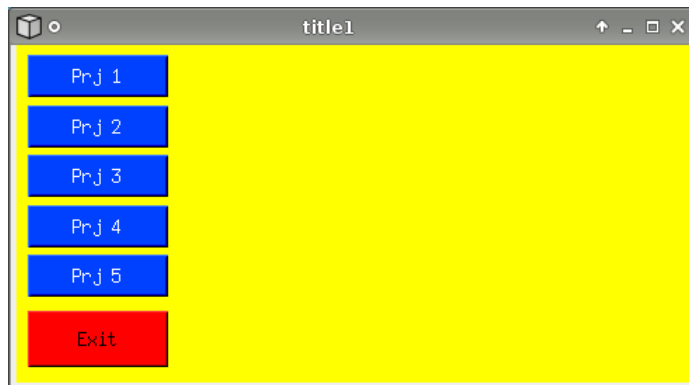


図 4-6-3-1. 起動ランチャー画面

ボタンクリックしたときのプロシージャイベント関数のソースコードをリスト 4-6-3-1 に示します。

リスト 4-6-3-1. 起動ランチャーボタンクリックイベント (Btn_Click.cpp)

```
#include <WScom.h>
#include <WSCfunctionList.h>
#include <WSCbase.h>
#include "newwin000.h"
//-----
//Function for the event procedure
//-----
void Btn_Click(WSCbase* object) {
    if(object == btn_prg1) {
        system("xeyes &");          /* xeyes プログラムを起動 */
    }
    if(object == btn_prg2) {
        system("xclock &");        /* xclock プログラムを起動 */
    }
    if(object == btn_prg3) {
        system("xcalc &");        /* xcalc プログラムを起動 */
    }
    if(object == btn_prg4) {
        system("xlogo &");        /* xlogo プログラムを起動 */
    }
    if(object == btn_prg5) {
        system("chromium-browser &"); /* chromium browser プログラムを起動 */
    }
    if(object == btn_exit) {
        exit(0);                  /* 終了 */
    }
}
static WSCfunctionRegister op("Btn_Click", (void*)Btn_Click);
```

ボタンがクリックされると、object にボタンのポインタが渡されます。ここでは、押されたボタン毎に

「system」という関数の引数で渡された文字列のコマンドを実行します。コマンドの後ろに「&」が記述されるとコマンドの終了まで待ちません。「&」を記述しないでコマンドを実行することで、そのコマンドが終了されるまで「system」関数から返りません。

4-6-4 色選択サンプルプログラム

●WideStudio 用サンプルプログラム

「/usr/local/tools-0010/samples/sampleWideStudio/sample_ColorPalette」に、カラーパレットを表示するサンプルプログラムのソースコードが入っています。ボタンを押すと、ボタンのプロシージャでカラーパレットが呼び出されます。カラーパレットで色を選択し、「OK」ボタンを押すと、ボタンの背景色が選択した色になり、色名称がラベルに表示されます。

色選択サンプルプログラムを実行した画面を図 4-6-4-1 に、カラーパレットを図 4-6-4-2 に示します。

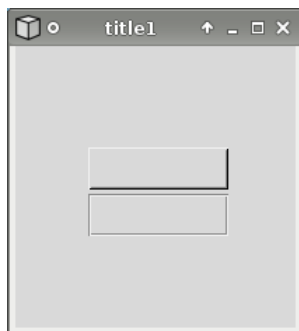


図 4-6-4-1. 色選択サンプルプログラム

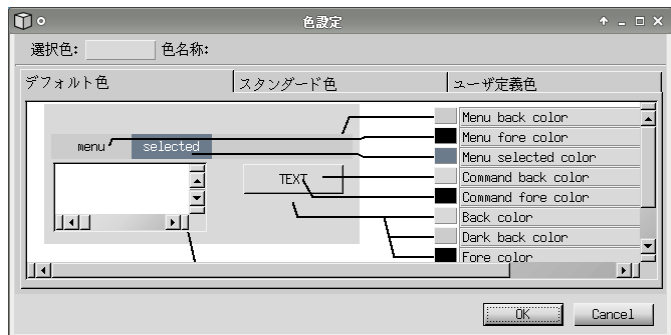


図 4-6-4-2. カラーパレット

4-6-5 日本語入力キーボードサンプルプログラム

●WideStudio 用サンプルプログラム

「/usr/local/tools-0010/samples/sampleWideStudio/sample_JapaneseInsert」に、日本語入力可能なソフトウェアキーボードのサンプルプログラムのソースコードが入っています。このプログラムを実行すると、図 4-6-5-1 のようにボタンと入力フィールドが表示されます。これらをクリックすると、図 4-6-5-2 のようなソフトウェアキーボードを呼び出され、入力した文字が表示されます。

図 4-6-5-2 のソフトウェアキーボードにおいて、「E/J」ボタンを押すと英語入力と日本語入力が切り替わります。また、入力完了後「OK」ボタンを押すと、元のウィンドウに戻り、入力した文字が表示されます。

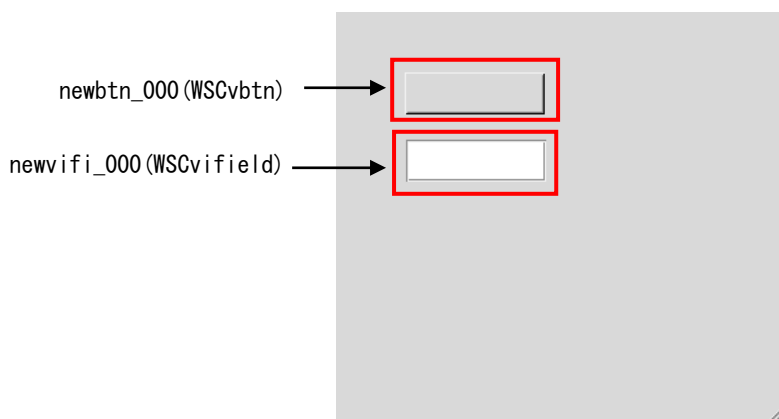


図 4-6-5-1. 日本語入力サンプル画面

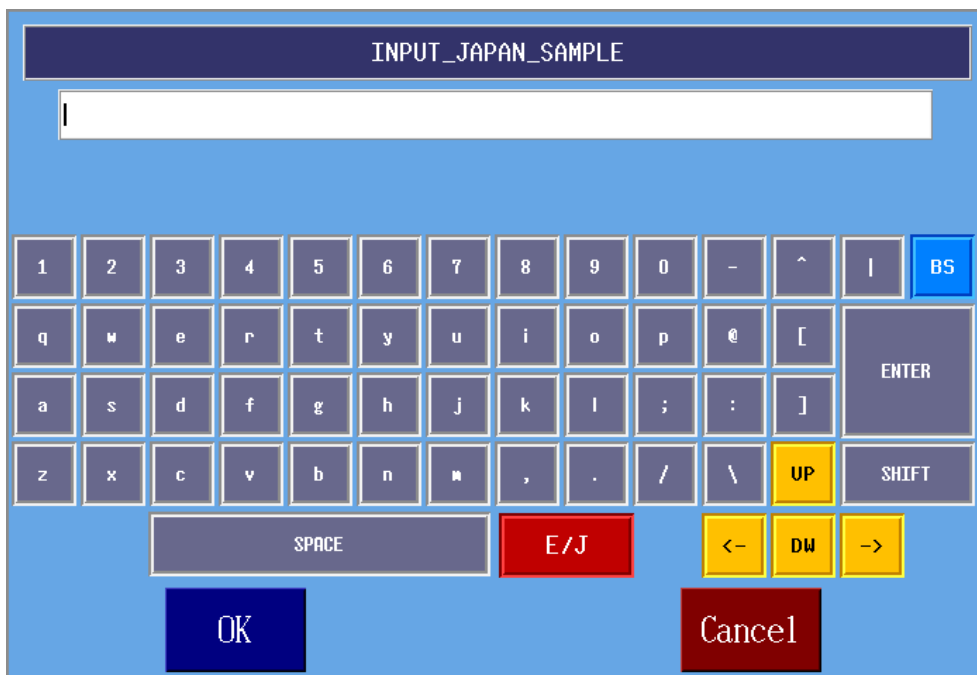


図 4-6-5-2. ソフトウェアキーボード画面

ソフトウェアキーボードをプロジェクトに組込む方法について説明します。

- ① 「/usr/local/tools-0010/samples/sampleWideStudio/sample_JapaneseInsert」フォルダの中にある、以下のファイルを組込みたいプロジェクトのフォルダにコピーします。

```
str_set.cpp
str_set.h
strsetbtn_Click.cpp
strsetbtn_Press.cpp
win_strset.cpp
win_strset.h
win_strset.win
```

- ② 組込みたいプロジェクトの wns ファイルに、win_strset.win を追加します。
- ③ WideStudio を起動し、プロジェクトを開きます。
- ④ 「プロジェクト」→「プロジェクト設定」で追加タブを選択し、追加ソースコードの「追加」ボタンを押して「str_set.cpp」を選択します。
- ⑤ 日本語入力したいオブジェクトのプロシージャで「str_set.h」をインクルードし、「strset_Displ」関数を使ってソフトウェアキーボードを呼び出します。
ソフトウェアキーボードを呼び出すサンプルプログラムのソースコードをリスト 4-6-5-1 に示します。リスト 4-6-5-1 において、「newvifi_000」は MOUSE-PRESS イベント、「newvifi_000」は ACTIVE イベントでソフトウェアキーボードを呼び出しています。

strset_Displ 関数の第 1 引数に呼び出し元のオブジェクト、第 2 引数にソフトウェアキーボードのタイトルを指定します。また、第 3 引数にはソフトウェアキーボードを呼び出したときに表示される初期入力文字列を指定します。リスト 4-6-5-1 では、呼び出し元の表示文字列を初期文字列として扱っています。初期文字列を空にしたい場合は NULL を指定します。

リスト 4-6-5-1. ソフトウェアキーボード呼び出し (Btn_Click.cpp)

```
#include <WScom.h>
#include <WSCfunctionList.h>
#include <WSCbase.h>

#include "newwin000.h"
#include "str_set.h"
//-----
//Function for the event procedure
//-----
void Btn_Click(WSCbase* object) {
    if(object == newvifi_000) {
        strset_Disp(newvifi_000, "INPUT_JAPAN_SAMPLE", (char*)newvifi_000->getProperty(WSNLabelString));
    }
    if(object == newvbtn_000) {
        strset_Disp(newvbtn_000, "INPUT_JAPAN_SAMPLE", (char*)newvbtn_000->getProperty(WSNLabelString));
    }
}
static WSCfunctionRegister op("Btn_Click", (void*)Btn_Click);
```

⑥ コンパイルして完了です。

このソフトウェアキーボードは、サンプルプログラムとして作成されていますので、ボタンやウィンドウの色や大きさ、配置については自由に変更してください。

※注：このソフトウェアキーボードプログラムは、専用の仮想キーボードドライバを使用しています。一般の Linux システム上では動作しませんのでご注意ください。

4-7 ストレージデバイスについて

ここでは、外部ストレージデバイスの使用方法について説明します。

4-7-1 外部ストレージデバイスの使用方法

外部ストレージデバイスはブロックデバイスを使用して通常のディスクと同様に操作することができます。Algonomi x4 の初期設定では、外部ストレージデバイスは自動的にマウントされます。手動でマウントする必要がある場合に、本項目を参照してください。

●外部ストレージデバイスのマウント

外部ストレージデバイスのブロックデバイスをマウントします。(/dev/sdb と認識した場合)

例：外部ストレージデバイスのパーティション 1 をマウント

```
# mount /dev/sdc1 /mnt
```

●外部ストレージデバイスのファイルへのアクセス

マウント以後は、マウントしたディレクトリから外部ストレージデバイス内のファイルにアクセスができます。ファイル操作方法は、ルートファイルシステム上のファイルと同様です。

例：外部ストレージデバイス内ファイル一覧表示

```
# cd /mnt
# ls
file1    file2    file3
```

例：外部ストレージデバイスへのファイルコピー

```
# cp /home/asdusr/FILE /mnt
```

●外部ストレージデバイスのアンマウント

外部ストレージデバイスを使用し終わったらブロックデバイスをアンマウントします。外部ストレージデバイスを抜く前に必ずアンマウントを行ってください。

例：外部ストレージデバイスのアンマウント

```
# umount /mnt
```

※注：外部ストレージデバイスのデバイス名 (/dev/sdb など)については『4-7-2 ストレージデバイス名の割り振りについて』を参照してください。

4-7-2 ストレージデバイス名の割り振りについて

各ストレージデバイスは Linux 上で使用するためにデバイス名が以下のような名前で割り振られます。

- /dev/sd**x** : ストレージデバイス全体のブロックデバイス
x は a, b, c, d... と認識順に増えていきます
- /dev/sd**x*** : ストレージデバイス上パーティションのブロックデバイス
***** はパーティション毎に 1, 2, 3... と増えていきます。
- (例 : /dev/sdb1, /dev/sdb2)

各ストレージデバイスは以下のルールに従い、デバイス名にアルファベットの若い文字から割り振られます。

- (1) OS 起動時に各ストレージデバイススロットにデバイスが挿入されていた場合、接続されているデバイスが表 4-7-2-1 の優先順位に従ってデバイス名が割り振られます。(接続されていない場合はスキップします。)
- (2) OS 起動後、新たに USB メモリなどを挿入した場合、それらの USB メモリにデバイス名が割り振られます。

AP シリーズでの認識優先度を表 4-7-2-1 に示します。

表 4-7-2-1. ストレージデバイス認識優先度

優先度	スロット名
①	m-SATA メインストレージ
②	m-SATA サブストレージ
③	USB スロット 0~3

※注 : USB スロットや SSD スロットに複数のストレージを接続したときは、それぞれにデバイス名が若いアルファベット文字から割り振られます。

例 1:mSATA メインストレージのみ挿入して OS 起動したとき

mSATA メインストレージが sda として認識されます。その後挿入された USB メモリは sdb、sdc... として認識されます。

表 4-7-2-2. デバイス名割り振り

スロット名	デバイス名
m-SATA メインストレージ	/dev/sda
USB スロット 0~3	/dev/sdb、/dev/sdc...

例 2:mSATA メインストレージと m-SATA サブストレージを挿入して OS 起動したとき

mSATA メインストレージが sda として、m-SATA サブストレージが sdb として認識されます。その後挿入された USB メモリは sdc、sdd... として認識されます。

表 4-7-2-3. デバイス名割り振り

スロット名	デバイス名
m-SATA メインストレージ	/dev/sda
m-SATA サブストレージ	/dev/sdb
USB スロット 0~3	/dev/sdc、/dev/sdd...

第 5 章 システムリカバリ

本章では、「AP シリーズ用 Algonomix4 32 ビット版 リカバリ DVD」を使用したシステムのリカバリとバックアップについて説明します。

5-1 リカバリ DVD について

AP シリーズ本体を「AP シリーズ用 Algonomix4 32 ビット版 リカバリ DVD」（以降、「リカバリ DVD」と表記します。）で起動させると、システムのリカバリを行うことができます。リカバリで行える処理は以下のとおりです。

- システムの復旧（工場出荷状態）
- システムのバックアップ
- システムの復旧（バックアップデータ）

リカバリ DVD を使用する場合、BIOS 設定が必要となります。また、リカバリ DVD での作業終了後は BIOS WDT の設定を元に戻す必要があります。

- リカバリ DVD 使用の流れ

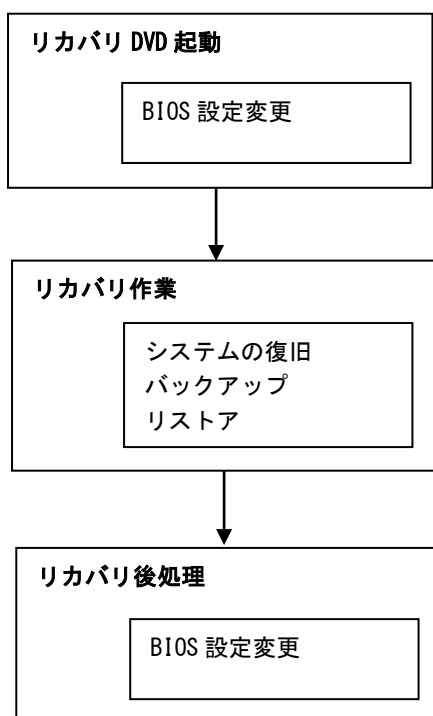


図 5-1-1. リカバリ DVD 使用の流れ

5-2 リカバリ DVD の起動・終了

リカバリ DVD を起動させる前に、本体に接続されている LAN ケーブル、ストレージ（USB メモリ、SD カードなど）を取り外してください。サブストレージ（mSATA2）を接続している場合は、サブストレージを取り外してください。

リカバリ DVD の起動には、USB 接続の DVD ドライブ、USB キーボード、USB マウスが必要です。

5-2-1 リカバリ DVD 起動

- ① LAN ケーブルが接続されている場合は、LAN ケーブルを取り外してください。
- ② USB メモリ、SD カードなどのストレージメディアが接続されている場合は、ストレージメディアを取り外してください。また、サブストレージ（mSATA2）が接続されている場合は、サブストレージを取り外してください。
- ③ USB-DVD ドライブにリカバリ DVD を入れ AP シリーズ本体に接続します。
- ④ USB キーボード、USB マウスを接続します。
- ⑤ 電源を入れます。BIOS 起動画面が表示されたところで [F2] キーを押し、BIOS 設定画面を表示させます。
- ⑥ BIOS 設定画面が表示されたら、[Advanced] メニューを選択します。（図 5-2-1-1）
- ⑦ [OS Selection] を [Linux]、[BIOS WDT] を [Disabled] に設定します。

※注：⑦で [BIOS WDT] を [disabled] にしないで開始すると、3 分後に再起動します。

作業途中で再起動しないよう、必ず⑦の変更を行ってください。

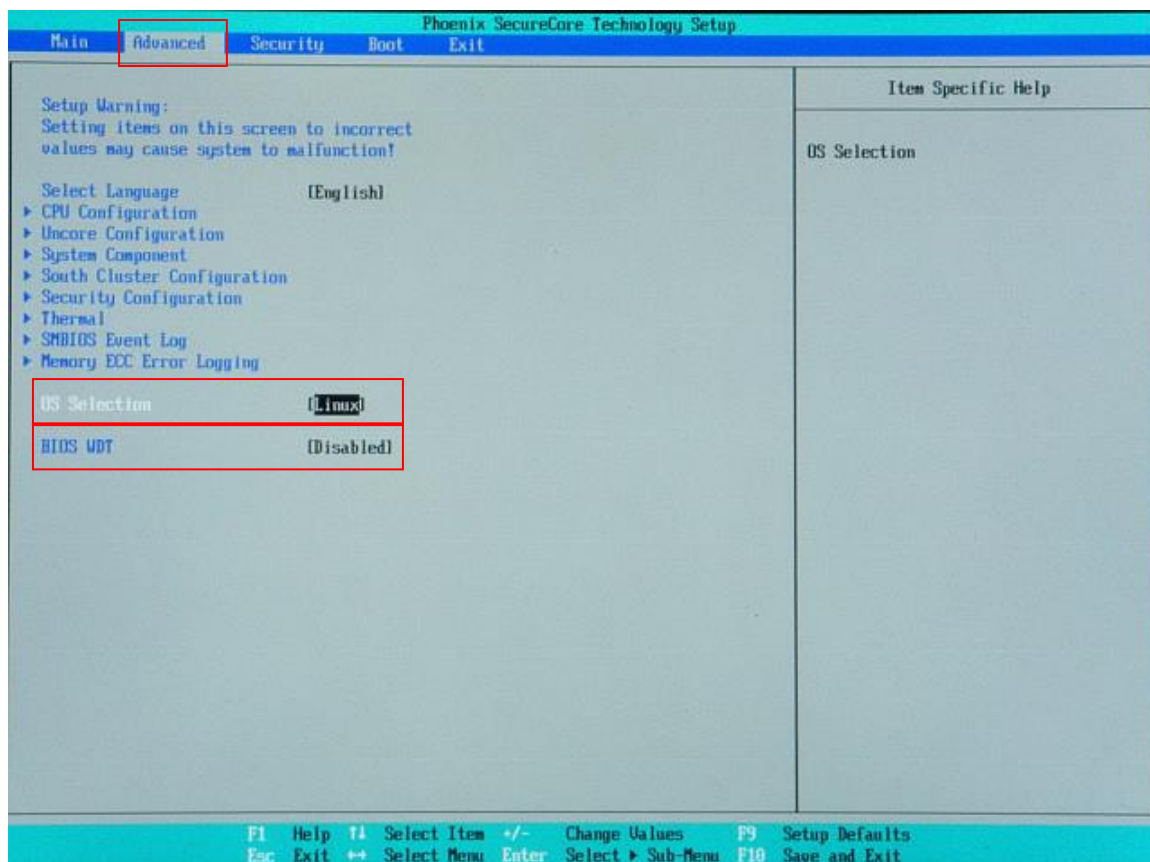


図 5-2-1-1. BIOS 設定 Advanced メニュー

- ⑧ [Boot]メニューを選択します。(図 5-2-1-2)
- ⑨ [USB CD] (接続した USB-DVD ドライブ) を [ATA HDD0] (m-SATA メインストレージ) よりも上に設定します。

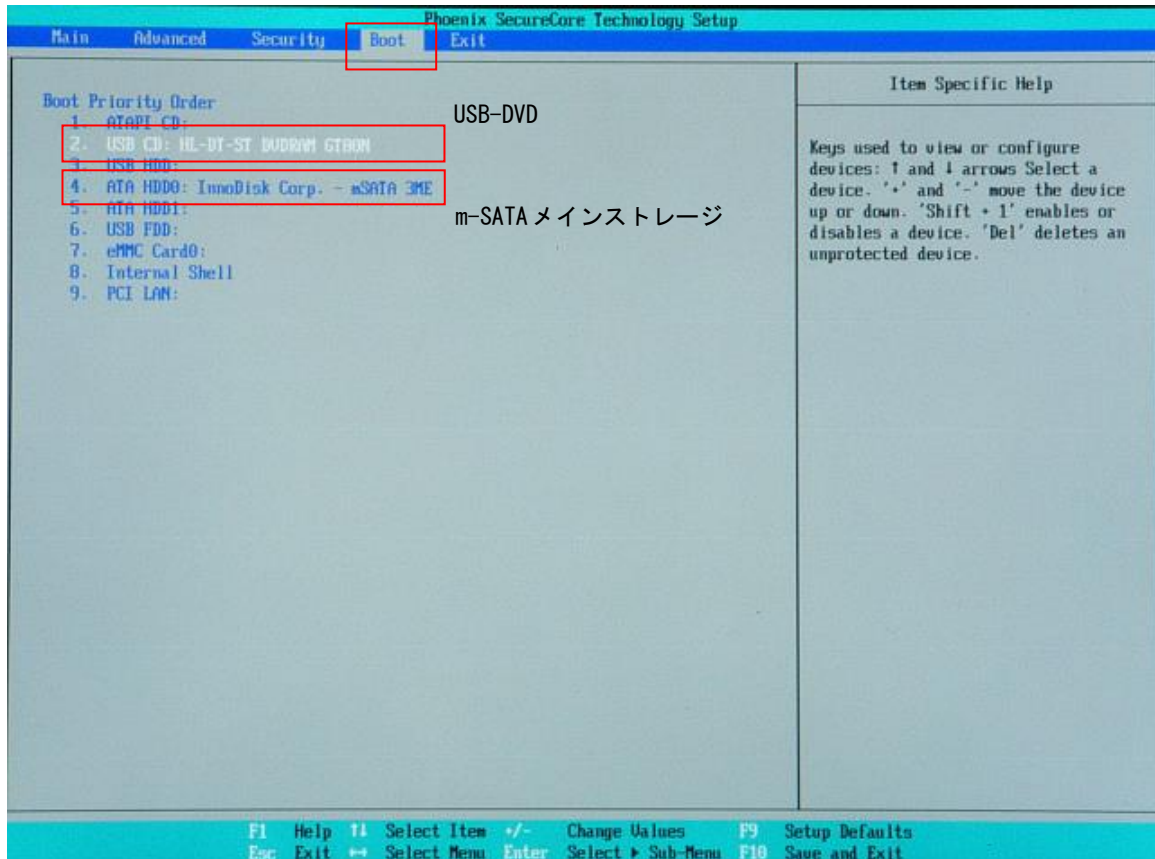


図 5-2-1-2. Boot デバイスの選択

- ⑩ [Exit]メニューを選択します(図 5-2-1-3)
- ⑪ [Exit Saving Changes]を実行し、設定を保存して終了します。

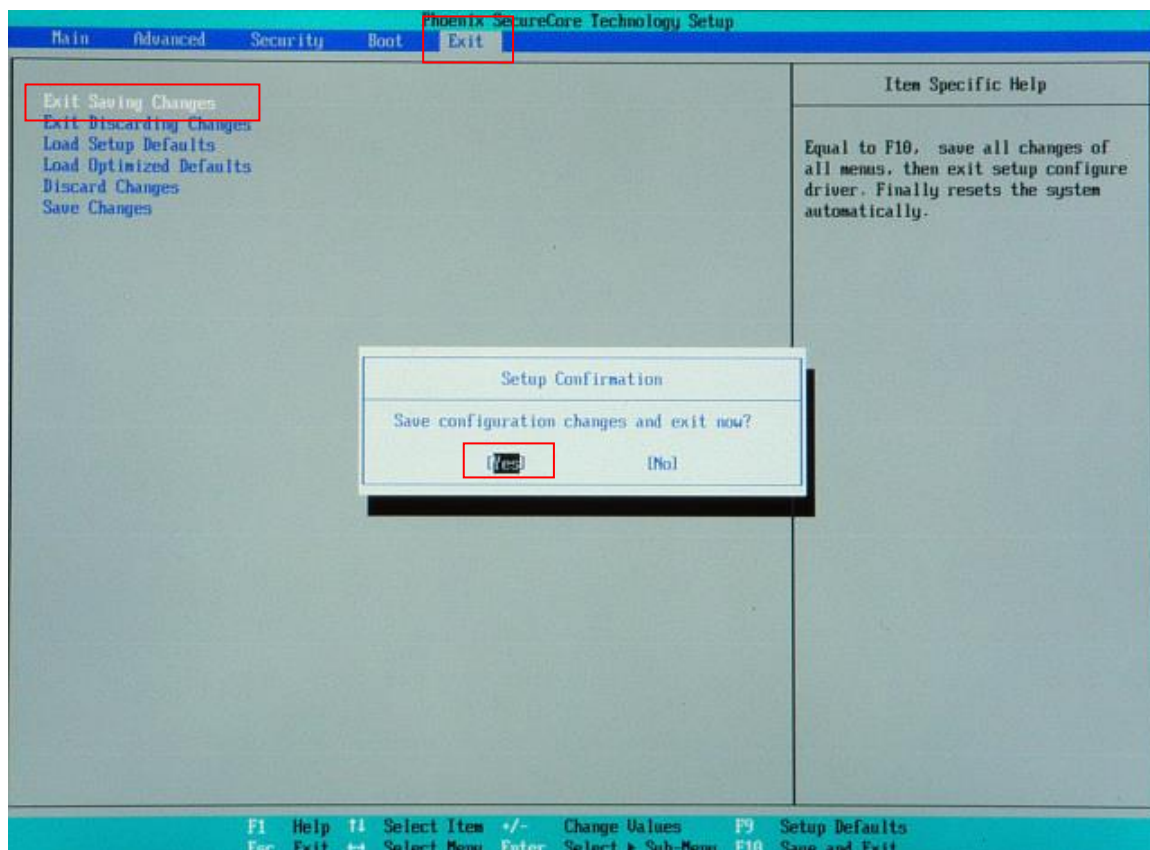


図 5-2-1-3. BIOS 設定 保存と終了

- ⑫ 再起動し、正常にリカバリ DVD から起動すると図 5-2-1-4 のリカバリメイン画面が表示されます。

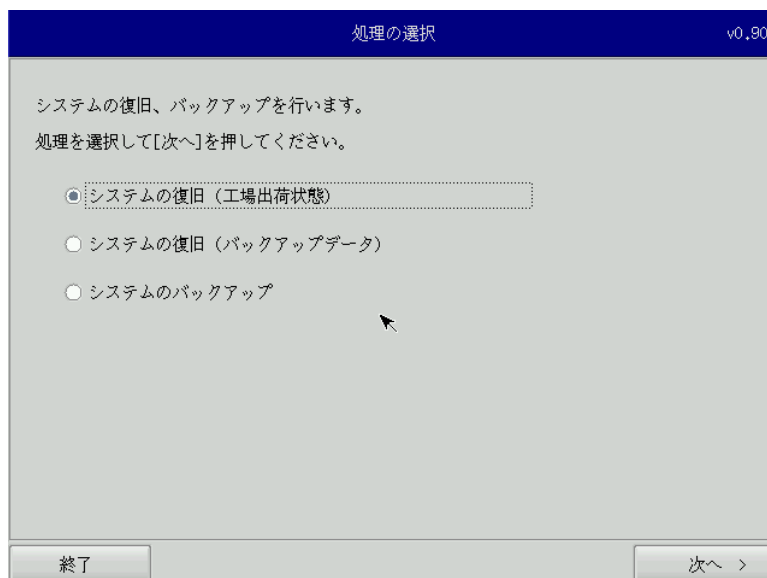


図 5-2-1-4. リカバリメイン画面

5-2-2 リカバリ作業

リカバリメイン画面から処理を選んでリカバリ作業を行います。

- システムの復旧 (工場出荷状態)
- システムのバックアップ
- システムの復旧 (バックアップデータ)

リカバリ作業の詳細は、「5-3 システムの復旧 (工場出荷状態)」、「5-4 システムのバックアップ」、「5-5 システムの復旧 (バックアップデータ)」を参照してください。

5-2-3 リカバリ後処理

リカバリ作業が終わったら、通常使用のために BIOS 設定を戻します。

● リカバリ後処理手順

- ① 電源を入れ、BIOS 起動画面が表示されたところで [F2] キーを押し、BIOS 設定画面を表示させます。
- ② BIOS 設定画面が表示されたら、[Advanced] メニューを選択します。(図 5-2-3-1)
- ③ [BIOS WDT] を [Enabled] に設定します。

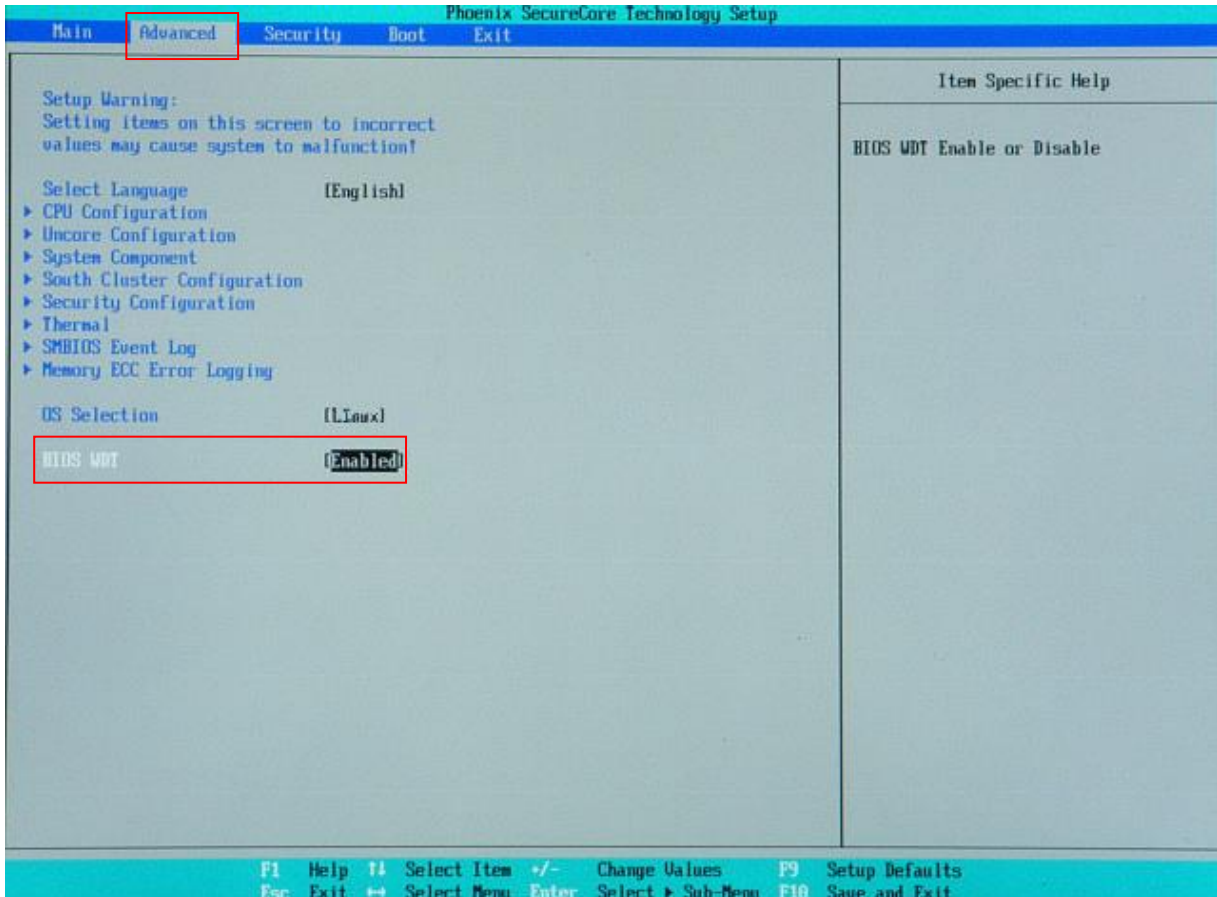


図 5-2-3-1. BIOS 設定 通常使用設定

- ④ [Exit] メニューを選択します。
- ⑤ [Exit Saving Changes] を実行し、設定を保存して終了します。

5-3 システムの復旧（工場出荷状態）

工場出荷イメージをメインストレージ（mSATA1）に書込むことで、システムを工場出荷状態に復旧することができます。

※ システムを工場出荷状態へ復旧するとメインストレージにあるデータはすべて消えてしまいます。必要なデータがある場合は、復旧作業を行う前に保存してください。

● システム復旧（工場出荷状態）の手順

- ① LAN ケーブルが接続されている場合は、LAN ケーブルを取り外してください。
- ② USB メモリ、SD カードなどのストレージメディアが接続されている場合は、ストレージメディアを取り外してください。
- ③ 「5-2-1 リカバリ DVD の起動」を参考にリカバリ DVD を起動させます。
- ④ リカバリメイン画面（図 5-2-1-4）で[システムの復旧（工場出荷状態）]を選択し、[次へ]ボタンを押します。
- ⑤ リカバリデータ選択画面（図 5-3-1）が表示されます。製品に合わせてリカバリデータを選択し、[次へ]ボタンを押します。表 5-3-1 に AP シリーズで選択できるリカバリデータを示します。

表 5-3-1. AP シリーズ リカバリデータ

#	リカバリデータ名	内容
1	Algonomix4 AP シリーズ 16GByte イメージ	AP シリーズ用 Algonomix4 32 ビット版 リカバリデータ

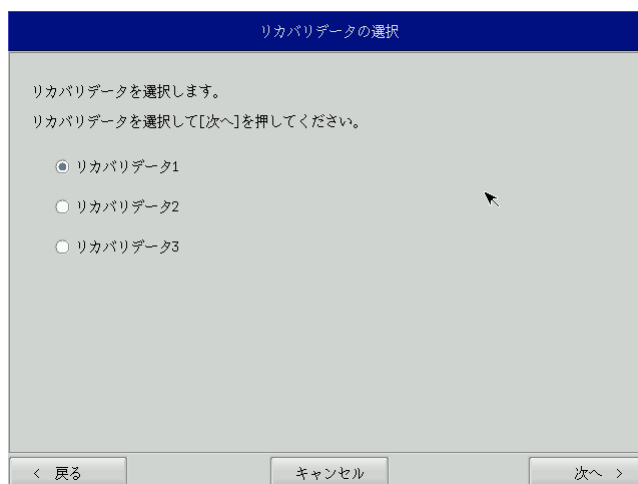


図 5-3-1. リカバリデータ選択画面

- ⑥ 確認画面（図 5-3-2）が表示されます。リカバリデータを確認し、[次へ]ボタンを押して処理を開始します。

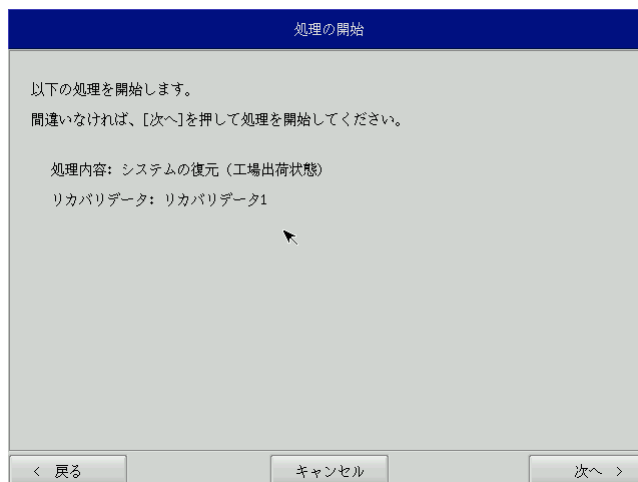


図 5-3-2. 確認画面

- ⑦ 処理が始まります（図 5-3-3）。実行中は DVD ドライブを外したり、電源を落としたりしないでください。

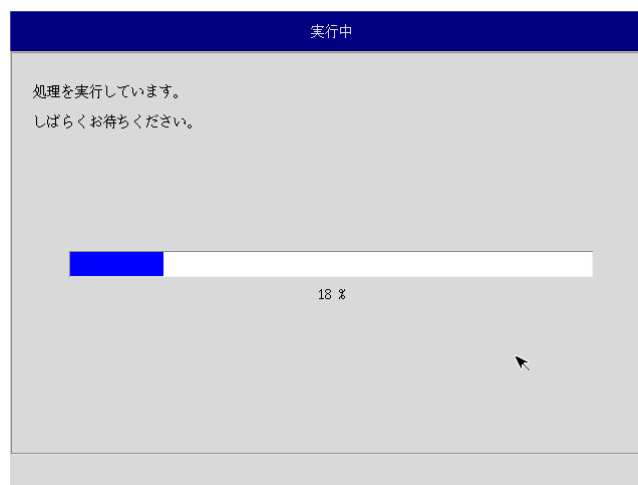


図 5-3-3. 実行中画面

- ⑧ 終了画面（図 5-3-4）が表示されると工場出荷イメージの書込みは完了です。[終了]ボタンを押して電源を落とし、DVD ドライブを外します。

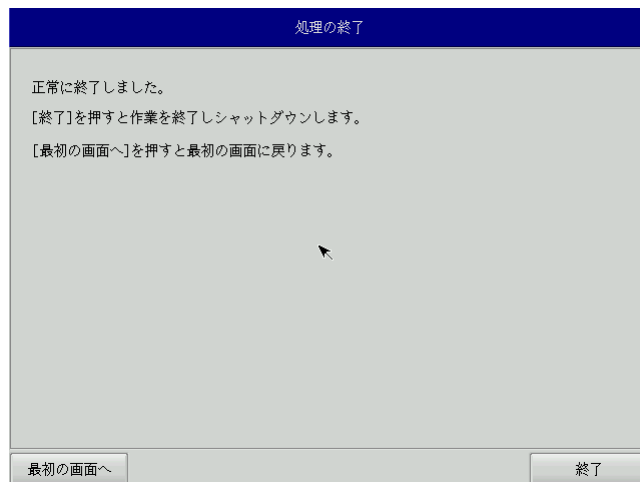


図 5-3-4. 終了画面

- ⑨ 電源を入れ、デスクトップが表示されて正常に起動すれば、システム復旧は完了です。
- ⑩ 「5-2-3 リカバリ後処理」を参考に BIOS 設定を通常使用用に戻します。

※ システムを工場出荷状態へ復旧する場合、一度目の起動時にシステム再起動を求められる場合があります。この場合は指示に従い再起動してください。

5-4 システムのバックアップ

メインストレージ (mSATA1) の状態をファイルに保存します。バックアップファイル保存のために外部メモリとして、USB メモリ、SD カードなどが必要となります。外部メモリの空き容量は、バックアップファイルの保存に十分な空き容量が必要となります。安全のためメインストレージの容量以上の空き容量がある外部メモリを用意してください。

バックアップソフトにフォーマット機能はありません。外部メモリはあらかじめ Windows、Linux などでもフォーマットしてください。対応しているファイルシステムは、FAT32、NTFS、EXT2、EXT3 となっておりますが、FAT32 は最大ファイルサイズが 4GByte であるため、NTFS、EXT2、EXT3 を使用してください。

※ バックアップファイルのサイズは、システムの状態によって変化しますので注意してください。

※ 作成されたバックアップファイルは、バックアップ作業を行った本体でのみ動作します。同じ型の本体であっても、他の本体では動作しませんので注意してください。

●システムのバックアップの手順

- ① LAN ケーブルが接続されている場合は、LAN ケーブルを取り外してください。
- ② USB メモリ、SD カードなどのストレージメディアが接続されている場合は、ストレージメディアを取り外してください。
- ③ 「5-2-2-1 リカバリ DVD の起動」を参考にリカバリ DVD を起動させます。
- ④ リカバリメイン画面 (図 5-2-1-4) で[システムのバックアップ]を選択し、[次へ]ボタンを押します。
- ⑤ メディアとパーティション選択画面 (図 5-4-1) が表示されます。本体にメディアを接続し、[メディア情報更新]ボタンを押してください。バックアップファイルを保存するメディアのパーティションを選択し、[次へ]ボタンを押します。

メディアの認識には少し時間がかかります。メディアを接続してすぐに[メディア情報更新]ボタンを押すと、目的のメディア情報が現れないことがあります。この場合は、1分程度待つて再度、[メディア情報更新]ボタンを押してみてください。

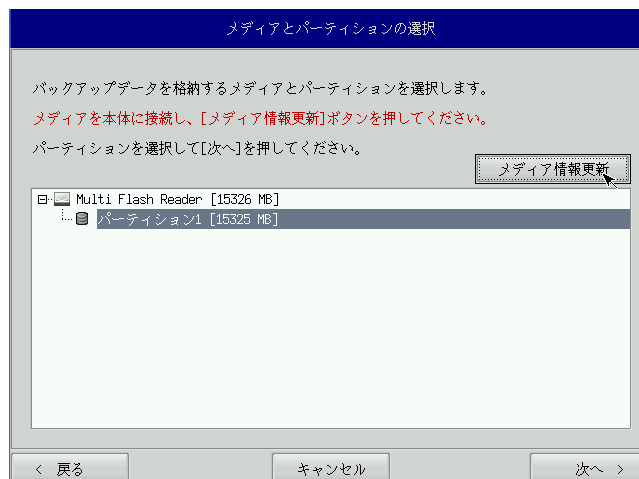


図 5-4-1. メディアとパーティション選択画面

- ⑥ フォルダ選択画面（図 5-4-2）が表示されます。[参照]ボタンを押します。

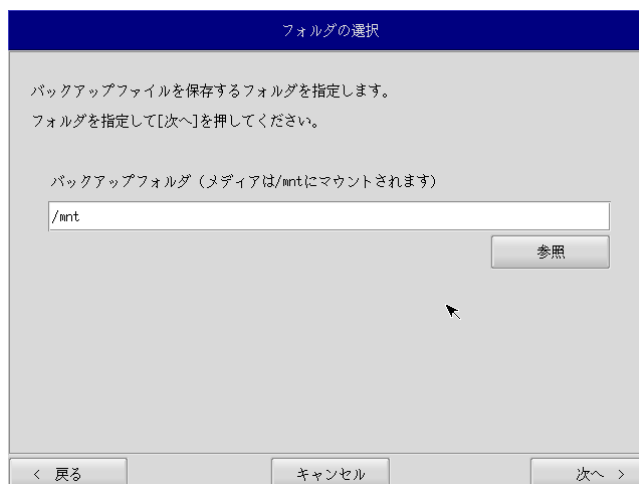


図 5-4-2. フォルダ選択画面

- ⑦ フォルダ参照画面（図 5-4-3）が表示されます。②で接続したパーティションは、/mnt にマウントされるので、/mnt 以下のフォルダを選択してください。[OK]を押すとフォルダ選択画面にもどります。

※ USB メモリに backup というフォルダがあり、このフォルダに保存する場合 /mnt/backup を指定します。

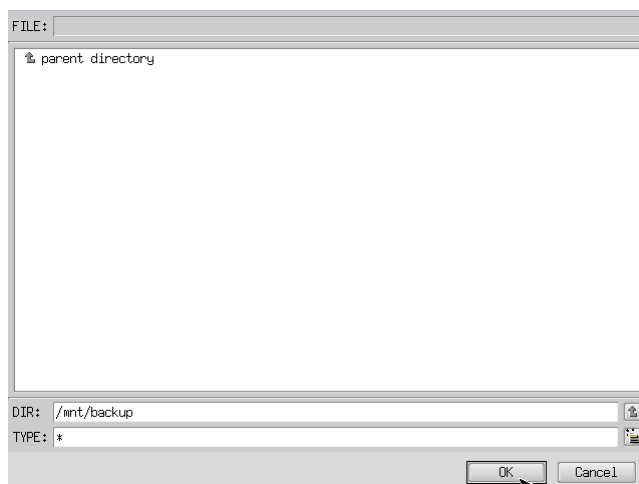


図 5-4-3. フォルダ参照画面

- ⑧ フォルダ選択画面（図 5-4-2）で指定したバックアップフォルダが入力されていることを確認します。[次へ] ボタンを押します。
- ⑨ 確認画面（図 5-4-4）が表示されます。メディア、パーティション、保存ファイルを確認します。[次へ] ボタンを押します。

※ 保存ファイル名は、現在時刻から自動生成されます。

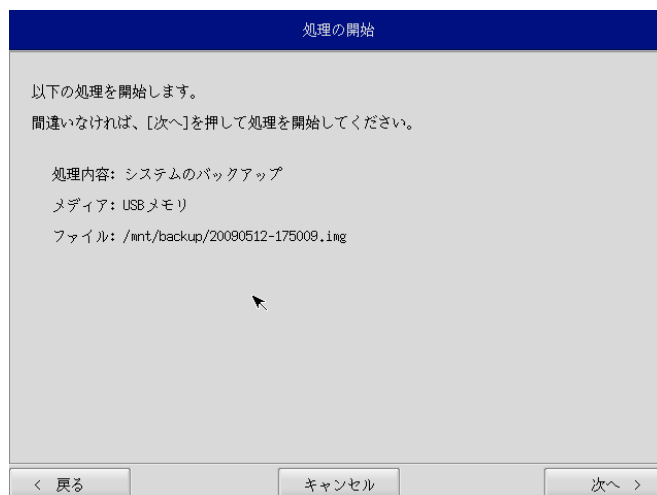


図 5-4-4. 確認画面

- ⑩ 実行中画面（図 5-4-5）が表示され、処理が開始されます。実行中は DVD ドライブ、保存メディアを外さないでください。また、電源を落とさないようにしてください。

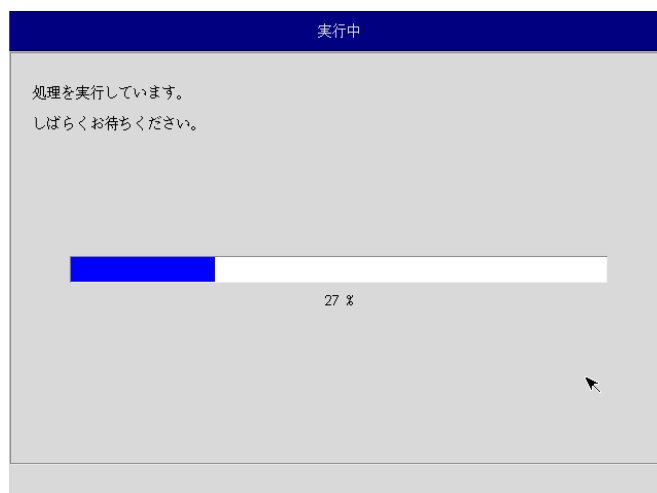


図 5-4-5. 実行中画面

- ⑪ 終了画面（図 5-4-6）が表示されるとバックアップ作業は完了です。[終了]ボタンを押して電源を落としてください。

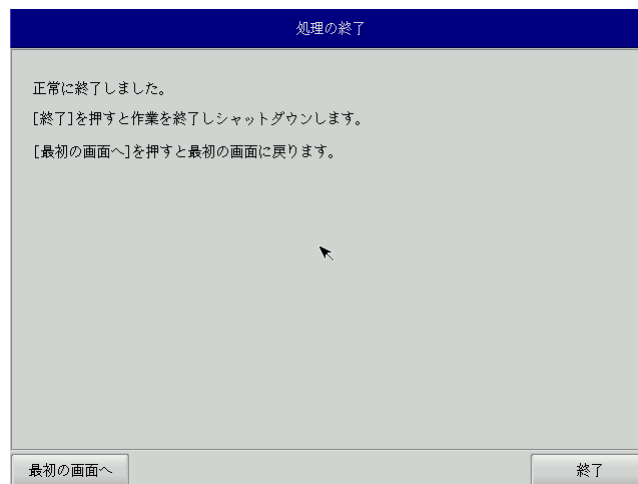


図 5-4-6. 終了画面

- ⑫ 「5-2-3 リカバリ後処理」を参考に BIOS 設定を通常使用用に戻します。

5-5 システムの復旧（バックアップデータ）

「システムのバックアップ」で作成したバックアップファイルを使用して、メインストレージ（mSATA1）をバックアップファイルの状態に復旧させることができます。

※ バックアップファイルは、必ず対象となる本体で作成されたものを使用してください。他の本体のバックアップファイルでは動作しないので注意してください。

※ バックアップデータで復旧を行うとメインストレージのデータは、バックアップファイルの状態に戻ります。必要なデータがある場合は、復旧作業を行う前に保存してください。

●システムの復旧（バックアップデータ）の手順

- ① LAN ケーブルが接続されている場合は、LAN ケーブルを取り外してください。
- ② USB メモリ、SD カードなどのストレージメディアが接続されている場合は、ストレージメディアを取り外してください。
- ③ 「5-2-1 リカバリ DVD の起動」を参考にリカバリ DVD を起動させます。
- ④ リカバリメイン画面（図 5-2-1-4）で[システムの復旧（バックアップデータ）]を選択し、[次へ]ボタンを押します。
- ⑤ メディアとパーティション選択画面（図 5-5-1）が表示されます。本体にメディアを接続し、[メディア情報更新]ボタンを押してください。バックアップファイルを保存するメディアのパーティションを選択し、[次へ]ボタンを押します。
メディアの認識には少し時間がかかります。メディアを接続してすぐに[メディア情報更新]ボタンを押すと、目的のメディア情報が現れないことがあります。この場合は、1分程度待って再度、[メディア情報更新]ボタンを押してみてください。

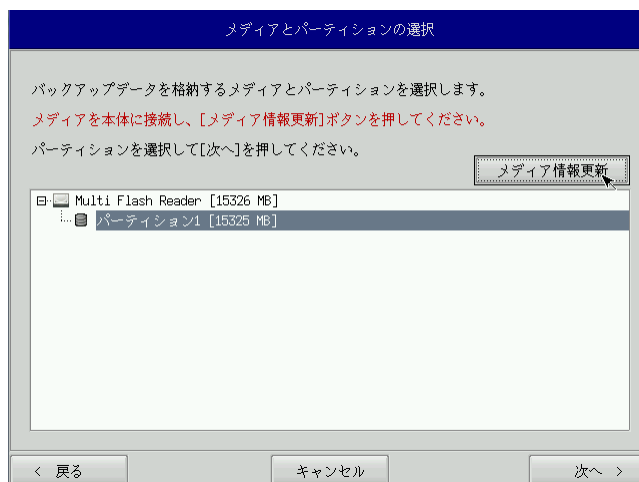


図 5-5-1. メディアとパーティション選択画面

- ⑥ ファイル選択画面（図 5-5-2）が表示されます。[参照]ボタンを押します。

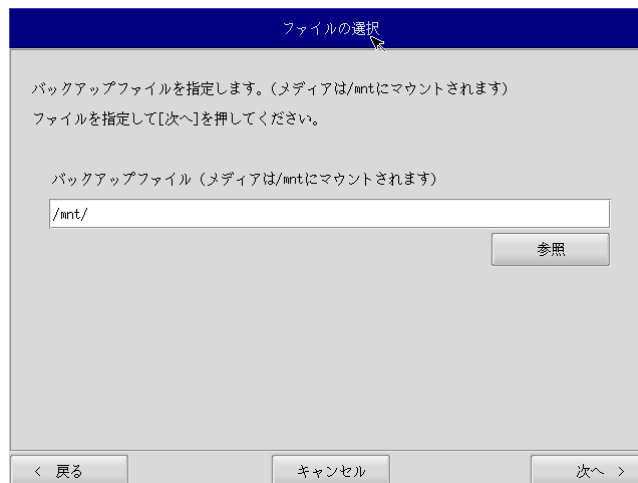


図 5-5-2. ファイル選択画面

- ⑦ ファイル参照画面（図 5-5-3）が表示されます。②で接続したメディアは、/mnt にマウントされているので、/mnt 以下から目的のファイルを探してください。[OK]を押すとファイル選択画面にもどります。

※ USB メモリの¥backup¥20090512-175009. img というバックアップファイルを指定する場合
/mnt/backup/20090512-175009. img
を指定します。

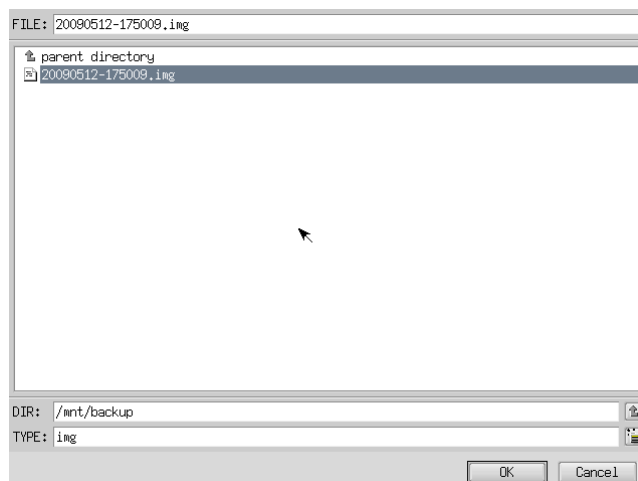


図 5-5-3. ファイル参照画面

- ⑧ ファイル選択画面（図 5-5-3）で指定したバックアップファイルが入力されていることを確認します。[次へ]ボタンを押します。
- ⑨ 確認画面（図 5-5-4）が表示されます。メディア、パーティション、バックアップファイルを確認します。[次へ]ボタンを押します。

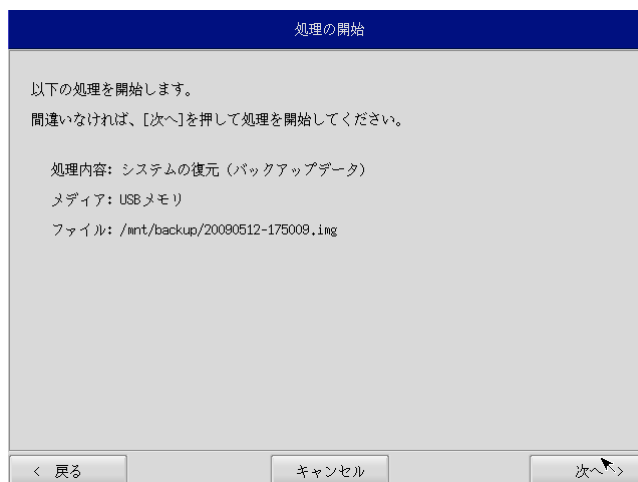


図 5-5-4. 確認画面

- ⑩ 実行中画面（図 5-5-5）が表示され、処理が開始されます。実行中は DVD ドライブ、保存メディアを外さないでください。また、電源を落とさないようにしてください。

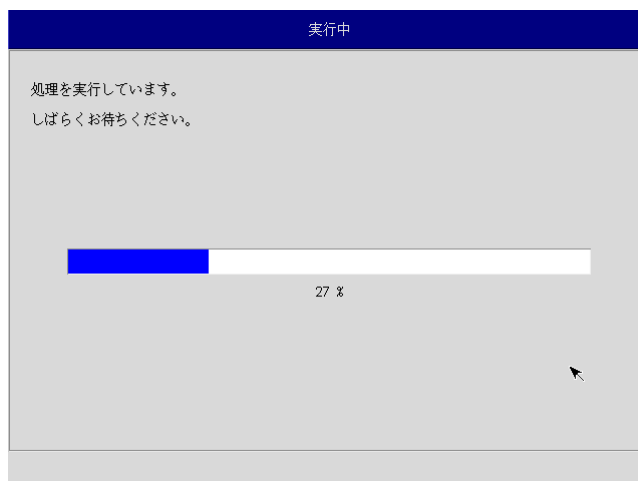


図 5-5-5. 実行中画面

- ⑪ 終了画面（図 5-5-6）が表示されるとシステム復旧作業は完了です。[終了]ボタンを押して電源を落とし、DVD ドライブ、保存メディアを外します。

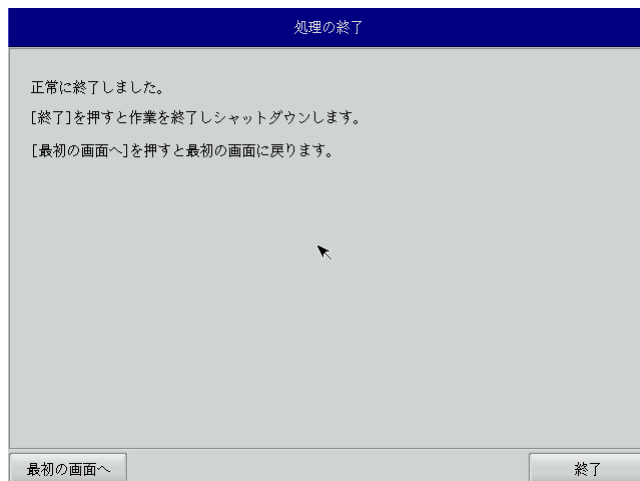


図 5-5-6. 終了画面

- ⑪ 電源を入れ起動を確認します。
- ⑫ 「5-2-3 リカバリ後処理」を参考に BIOS 設定を通常使用用に戻します。

付録

A-1 参考文献

- 「ふつうのLinux プログラミング Linux の仕組みから学べる GCC プログラミングの王道」
 - 著者 青木 峰郎
 - 発行所 ソフトバンク パブリッシング
 - 発行年 2005 年
- 「How Linux Works Linux の仕組み」
 - 著者 Brian Ward
 - 訳 吉川 典秀
 - 発行所 毎日コミュニケーションズ
 - 発行年 2006 年
- 「Linux デバイスドライバ 第3版」
 - 著者 Jonathan Corbet
Alessandro Rubini
Greg Kroah-hartman
 - 訳 山崎 康宏
山崎 邦子
長原 宏治
長原 陽子
 - 発行所 オライリー・ジャパン
 - 発行年 2005 年

このマニュアルについて

- (1)本書の内容の一部又は全部を当社からの事前の承諾を得ることなく、無断で複写、複製、掲載することは固くお断りします。
- (2)本書の内容に関しては、製品改良のためお断りなく、仕様などを変更することがありますのでご了承下さい。
- (3)本書の内容に関しては万全を期しておりますが、万一ご不審な点や誤りなどお気づきのことがございましたらお手数ですが巻末記載の弊社までご連絡下さい。その際、巻末記載の書籍番号も併せてお知らせ下さい。

77G030058A

2014年 11月 初版

77G030058B

2015年 5月 B版

 株式会社アルゴシステム

本社

〒587-0021 大阪府堺市美原区小平尾656番地

TEL (072) 362-5067

FAX (072) 362-4856

ホームページ <http://www.algosystem.co.jp>